

新任Pとシンデレラガール達

むつさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スカウトされプロデューサーとなつた松谷雪樹（オリ主）

最悪な前任の所業により輝きを失いかけているプロダクションだがシンデレラガール達にも爪痕が残りプロダクションは崩れかけている。

そんな環境の中での新任Pとシンデレラガール達が頑張るお話

目 次

新任Pと346プロダクション	1
残された資料、一つの傷跡	17
戻る賑わいと初仕事	35
逆恨みの終わりと疲労感	51
一つの不幸	67
悩みと過去の夢	85
枯れた気持ちと揺るがない意志	104
先を見据えた一歩	119
進んでいく準備。	134
お人好しという魔法	145
目的の道筋、僅かな進歩	159
一つの壁	172
責任感という重り	184

新任Pと346プロダクション

• • • • •

長い一難が去つて…

というには少し違うが

いつでも難にぶつかってしまうのは

和の人生の性たのかせしれなし

易傳

両親が亡くなつた。

大した持病も無いは

突然力なく立て続けに眠るよ

原因は老衰だと医者は言う

昨日まで元気にゲームをしていた両親が老衰なんて。まだ60代

1

葬儀や両親の部屋の片付け

一勝り手綱きが紺れり長男の兄貴と二人で家は戻ってきただ

雪齋「元畫心」

雪樹「元貴も最後だけはしつかり手伝ってくれるんだな」

うのは長男の役割だと思つてゐし」

「お前は時々故郷を憶り回遊されござらうが」

雪樹 「良く言えば親想いの息子、悪く言えば人柱、そんなところ」

長男「まあまああと結局あいづは来たのか?」

長男「それは。血の繋がつた人同士としてどうかと思うけどな。俺

雪樹一知らんよ。本人に言つて

長男「まあ、今更だな。」

雪樹「さて…親の遺品もなくなつてこの家はどうするか。広くなるな。こつち来る?」

長男「そうだな、それもありかもしれん。そしたら俺が家を持つけど」

雪樹「頼むわ。俺とあの兄貴だけじゃ広すぎるしさ。そのうち俺も出てくだろうし。」

長男「下二人もなんだかんだひとり暮らし?」

雪樹「一応、ただ二人とも相手がいるからそのうち結婚するだろうよ。あゝあ、先越されるわ」

長男「仕方ないだろ。お前は」

雪樹「まあ、一生独身でもいいけどね。やりたいことができるし」

長男「24歳がよく言うわ」

雪樹「まあ、とにかく次は兄貴一家の引っ越しだな。まだまだ大変だわ。」

長男「ああ、手間かけさせてすまんね」

雪樹「いいよ、俺はこの家計で一番の苦労人だろうから気にしてない」

長男「それ言うのは反則、まあ手伝つて貰うけど」

数日後には手続きを終え

長男一家も同居することになった。

頑固で天下取りな性格の両親とは違い歳も近いからか親と比べて格段と話しやすい。

それで、一つ話を持ちかけた。

雪樹「兄貴。一つだけ頼みがある」

長男「なんの頼み、またPC系?」

雪樹「仕事。変えたいなつて思つててさ。就活期間とかできるかもなあつて?」

長男「まあ、構わんけど年単位はやめてくれよ?お前も貯金はあるだろうけど無限じゃないだろうし」

雪樹「その辺はわかってるよ。」

長男 「それで次は何の仕事をしようと思つてるんだ?」

雪樹 「まあ、事務系の会社員かな。そのほうが自分的に。」

長男 「商業高校通つてたのもあるだろうからな。悪くないと思うぞ」

雪樹 「まあ。さっさとやめようかなと」

長男 「そんなに嫌なのか?」

雪樹 「別にやりづらいとかじやないよ。仲が悪いわけじやないし。」

長男 「なら変える必要なくね。お互負担なだけだと思うけど。」

雪樹 「まあ、俺が接客業を良しとしないのと。いつまでもこの仕事をしてるとあいつらを何故か思い出して嫌なんだよな。」

長男 「あいつら、ああまあ。」

雪樹 「できる限り、思い出したくはない」

長男 「そうか、」

雪樹 「感謝してない訳じやないけどね。それ以上に嫌な思いさせら
れてるから。」

長男 「まあ気持ちはわからんでもない。お前がそう言うなら今の仕事辞めてもいいと思うけど。仕事辞めて次どうするかだな」

雪樹 「有給休暇期間くらいはのんびりさせてくれ。」

長男 「それくらいはいいけど。眞面目に就活しろよ?」

雪樹 「その眞面目について言葉がやけに刺さる」

長男 「図星じやねえか」

雪樹 「まあ。しばらくは問題ないと思うけど。」

長男 「有給休暇期間つてどれぐらいあるんだ?」

雪樹 「有給休暇を普段からほとんど取つてないから二ヶ月分くらいはあると思う。」

長男 「え、長すぎない…? 大丈夫?」

雪樹 「いや、給料出るから何も問題ないって。」

長男 「二ヶ月も人生サボつてんのにお金貰つてるとか羨ましいわ。」

雪樹 「人生サボるという表現よ」

長男 「そりや、仕事しないでずっと家で呆けてたら人生サボつてる
ようなもんだろ」

雪樹「やめて、せめて二ートつて言つて」
長男「会社は錢ついてるから金もつて

いだろ」

雪樹 「『ご』もつともで。よつしや人生サボつたろ」

長男「自覚ありじやねえか。こいつめ。」

雪樹「たつて週休7日不労所得だよ、最高じゃん。」

長男（たぬき） ごいふん殴（うつ）てやらないと

雪樹「之物騏」

長男一 僕は二 三四年

雪林「さういふの発音といふ」

雪樹「そり

生だしな。」

長男 「レツツ定年退職」

雪樹 「あの会社では勘弁してくれ」

•
•
•
•
•
•
•
•
•

有給休暇期間も終わり

真面目に就職活動を初めて数日が経つたある日。

を買うのに、CDショップに向かつていた

いざ着くと列が出来ており、店に入るの

店の入り口でカウンターができておりそこに並んでいるようだつ

雪樹「なるほど 握手会か」 アイドルの握手会。

有名なアイドルなのだろうか

雪樹 「まあ、俺の目的はまた別だからな、」

知り合いに勧められたCDを探し。

運が良かつたのか限定版の一つが余っていたようだ

雪樹 「あいつ、限定版欲しかつたつて言つてたし。譲つてやるか」

限定版を手に取った時

ピンク髪の女性が隣で物欲しそうに見ていた

雪樹「あれ。」

女性「あれっ…それ最後の一ついやん…」

雪樹「もしかして、限定版目当てでした？」

女性「目当てっちゃ目当てだし…まあ…でもCDだけでもいいから…いやでもせつかくのしまむーソロ曲で限定版だし…」

雪樹「いいですよ、僕は特に限定版とか気にしてなかつたので。」

女性「え、いいの？ほんとに？」

雪樹「はい。元々、アイドルの曲はあまり興味持つたことなくて。今回勧められて買おうと思つただけですし。狙つてたとかじゃないので、どうぞ。」

女性に限定版のCDを手渡しすると喜んで会計口まで向かつていった
改めて通常版を手に取り、表紙を見ると先の握手会のアイドルが
写っていた。

雪樹「なるほど、今日握手会に来ていたファンの人だつたのかな」
会計口に向かうとまた別の女性に話しかけられた。

女性「あつ！そのCDは！」

雪樹「えつと。何かありましたか？」

振り向くと先のアイドルが居た。

アイドル「買つて頂けるんですね！」

雪樹「そうですね。知り合いの紹介で、ちょっと気になつたので」

アイドル「ありがとうございます！是非聞いてください！」

女性「ちょっと卯月、まだ片付け終わつてないんだから手伝つて」

アイドル「あつ、ごめん！」

アイドルは謝りながらも笑顔のまま戻つていった

雪樹「名前は…島村卯月。」

見慣れない名前。

サンプルを聴かせてもらつた時は、曲の一部だけだつたか。

会計を終えて店を出る直前。

さつきのアイドルがまだ居た。

目が合うと近寄つて話しかけて来た。

卯月「あの、さつきの方でしようか?」紹介で私のアルバムを買ったということはファンの方から?」

雪樹「そういうことになるかな。サンプルは聴かせてもらつて。気になつたんだ」

卯月「そなんですね。それなら是非他のアイドルのも、サンプルだけでもいいので聴いてみてください!」

雪樹「うん、気が向いたらいくつか調べて見るよ。」

卯月「それでは!私はそろそろ戻らないといけないので。ありがとうございました!」

元気な笑顔で去つていくと。他のアイドル達と車に乗り込んで行つた。

雪樹「まあ、これも何かの縁。か」

その後は特に何もなく家まで帰り、購入したCDの曲を聴いていた。

数日後

先日の会社の合否発表の日

会社のロビー掲示板にて合否発表という、なんとも言えない通知方法だつたため会社まで出向くことになった。

雪樹「普通、電話か書類送付するだろ……いやこの会社人数多いからこの方が確実なのかもしれないのか……」

ロビーに着くとスーツ姿の人達が大勢居た。

中途採用が多いからか中年の人が多い

なんとか割り込んで掲示板が見えるところまで行くが掲示板の合格欄には自分の番号はなかつた。

つまり。落ちた訳だ

雪樹「まあ、次探すかな」

会社のロビーで挨拶だけして帰ることにした。

帰りのバス待ち中。

一人の少女が数人の男性に囲まれてるのが目に映つた

いい雰囲気じゃない：

押し付けがましい様な雰囲気。

少女も必死に避けようとしてる

雪樹「ナンパには見えないし、少し度が過ぎるな…」

そう呟いたとき別の少女がその現場に近づく。少女の知り合いか、友人か。

よく見ると。先日CDショップにいた握手会のアイドルだつた。

私は話しかけてきたアイドルとは他の子だ。

それでも少女が2人いた所で。

大人の男性が4人もいるなら変なことに巻き込まれる可能性もある

る

会話の内容は聞こえないが。

見てみぬふりはできない

現場に向かうと後から来ていた少女が思いもよらぬ発言をした。

少し背の高い少女「あつ、プロデューサー、遅いよ」

（えつ…そう来るの…アドリブやめてよ…）

雪樹「急に呼び出しておいて、遅いは酷いと思うけどな」

男性「おや、プロデューサーということは、彼女達はもしや、「

雪樹「うちのアイドル達に何か御用ですか？」

男性「用事、というか少しモデルのお手伝いをお願いしようと思いまして。」

背の低めな少女「いや…だから…モデルなんてもりくぼには…」

少し背の高い少女「これから撮影の予定があるから断るつて言つてるんだけどしつこくて。」

雪樹「プロダクション所属のアイドル達ですので勝手な行動は困ります、お引き取り願えますか」
男性「ほんの少しだけお時間あればいいのですが、それでもダメですかね」

???「キミ達、うちの事務所のアイドルに何をしてる」

背の高い女性。うちの事務所のアイドルってことは…

鋭い眼差しに上からの目線

男性「少しモデルのお手伝いをですね…」

背の高い女性「少女相手にモデルの協力とは感心しないな。必要であればうちの事務所のプロ達を用意するが、どうかな?」

男性「いえ。け、結構です…」

背の高い女性「そうか、それは残念だ。彼女達はこれから別で仕事をある、勝手されでは困るから、お引き取り願おうか。」

男性「そ、そうですね、それでは…」

男性達は早歩きで去つていく

ひとまず落着と言つた感じだ

女性「キミは話を聞いていなかつたのか」

少し背の高い少女「待つてください専務、この人は私達を助けようとしたんです。」

女性「そうか、感謝する。」

背の低めな少女「あの…ありがとうございます…」

雪樹「まあ、いきなりプロデューサーって呼ばれたときはどうしようかと思いましたよ。なんとかアドリブ効かせましたけどね。」

女性「アドリブまでさせて…」

雪樹「いえいえ、お気になさらず。あのまま見てみぬふりするつもりもなかつたので、少なくともアドリブ無しでも止めに入つてましたし。」

女性「心遣い助かる。名前を聞かせてもらつてもいいかな?」

雪樹「松谷雪樹、あいにく名刺はなくて、大した事情ではないんですけど、仕事を辞めて、今はフリーです。」

女性「そうか、私は346プロダクションの美城という。これから用事がないのであれば、せつかくだから次の撮影を見学していくといい。」

渋谷「専務? いいんですか?」

美城「感謝の意を込めてだ、それに私自身が少し無礼した謝罪の意も込めている。」

雪樹「ご厚意感謝します。お言葉に甘えて職業見学させていただきますね」

少し移動したところでバスが待っていた

森久保「やつと…街中を出れるんですね…」

渋谷「乃々、ほんと人集り苦手だもんね」

美城「苦手は早めに克服するといい。そうでなければ舞台で支障が出るかもしれないぞ」

森久保「わかってるんですけど…それでも…」

渋谷「まあ、乃々、少しずつ慣れていくこう」

人集りが苦手…か

雪樹「一つ質問よろしいですか」

美城「答える範囲でなら回答するが、何かな。」

雪樹「アイドルの姿についてなんですが…いえ、今ここで、この質問をするのは無粋かもしません。また後でさせてもらいます」

美城「そうか、折を見てまた聞くといい」

撮影を見届けてもいない部外者が

容易に聞くべきじやないだろう

到着したのは街外れの森の

別荘のような場所

ある美容品のCM撮影。

あれほど恥ずかしがっていた少女もいざ撮影となると、微かに笑顔で撮影に応じている。

もう一人の少女もそれに応えるように振る舞う。

これがアイドル…プロ…なのだろう

握手会や撮影の仕事

以前見た舞台での演技や披露もそう。

想像していたものと大きく違う。

少し前の自分が…接客と販売だけを繰り返していた自分がとても小さく見えてくる。

雪樹「これが。アイドル」

美城「先の質問の回答は見つかったかね」

雪樹「いえ、まだひとつだけ引っかかります」

美城「何かな。」

雪樹「なぜ彼女達は、アイドルになれた、のでしょうか」

美城「アイドルになれた、か、それはいくつか回答があるな。まず一つ、我々プロダクションのメンバーやによる協力。あとは彼女達自身の中にある輝きに彼女達自身が気づいたから。もう一つは単純に根気や努力と言つたところだろう。」

雪樹「アイドル自身の問題とプロダクションによる協力か。」

美城「私は主に彼女達がすぐのでも実力付く為に協力するようにしている。」

雪樹「実力付ける努力：例えば、アイドル同士で協力して切磋琢磨を繰り返す：お互いの輝きがお互いをより一層強くする。アイドルになった過程は違えども同じ目標に目指しているから。」

美城「面白い意見だな、確かにそれもあるだろう、だがそれは度が過ぎると、ただのお遊戯に成りかねないな。」

雪樹「貴重な回答。ありがとうございました」

美城「キミの人生に役立つかわからぬが納得したのならそれでいい、さてそろそろ時間だろう。」

森久保「あの…撮影、もう終わりですか？」

美城「十分だ。あとはプロダクションの営業と相手方の話し合い次第。場合によつてはまたお願ひするかもしれないが、ひとまず今日は終わるとしよう。」

渋谷「お疲れ様、乃々」

森久保「はい、お疲れ様です…」

美城「さて、キミも帰るといい。タクシーを用意してある。これを受け取つて欲しい」

手渡しされたのは万札。

タクシー代に万札：

雪樹「タクシーにしては多過ぎる思いますか」

美城「余つた分は好きにするといい、それと、私の名刺も渡しておこう。」

雪樹「ご丁寧にどうも。」

美城「キミには少し期待している。また声を掛けてくるといい。」

渋谷「専務…それって」

美城「もちろん。今日限りでも構わない。やりたい仕事を見つけるのが今のキミに必要なことだ。」

雪樹「そうですね…」

一つのチャンスでもあるわけか

美城「ほら、バスに乗り込むぞ。それではな」

三人はバスで帰つていった。

少しもしないうちにタクシーが着き、

家までタクシーで向かつた

運転手「着きました。お疲れ様です。お代は3250円ですね♪」

タクシー代：めちゃくちや余つた

翌日。

雪樹「ここが、事務所にあたるのか」

名刺の住所を便りにプロダクションを訪ねた

エントランス前で数人の少女達が話し合つていた

少女「あれ？」

雪樹「えっと。初めまして。美城さんにお話があつてきただんだけど。今居るかな」

少女「お客様でござりますね、案内するですよ！」

少女達に連れられて着いたのは一つの部屋だつた。

少女がノックして声をかけると聞き覚えのある声がした

美城「開いているぞ」

少女に連れられて部屋に入ると

先日の女性が忙しそうに書類整理していた

雪樹「先日はお世話になりました。雪樹です」

美城「キミか、ここに来たということは、そういうことだな。」

少女「え？ どういうことでござりますか？」

美城「市原仁奈だつたか。いまキミのプロデューサーはどこにいるかわかるか？」

市原「今は前の人気がやめて、いねーですよ？」

美城「そうだ。それで新しいプロデューサーを連れてこないといけないな」

市原「そうでござりますね。」

美城「それで、この人はうちの事務所の新しいプロデューサーとなるんだ。」

市原「おお！つまりこの人が仁奈達の新しいプロデューサー！」

美城「そうだ」

雪樹「面接とか必要ないんですか？」

美城「安心したまえ。私からの推薦と言う形で通してあるから。基本的に書類手続きのみで大丈夫なはずだ、まあ問題はそれを終えてからだがな」

雪樹「そうですね。彼女達が僕を受け入れてくれるかどうか。」

美城「仮に受け入れられなくとも。嫌でもともに歩まねばなるまい。本当に嫌ならば、キミが消えるか。他のプロダクションに行くか。どちらか選ぶだろうな」

雪樹「そうなるよな。」

美城「市原仁奈、案内ありがとうございます。戻つていい」

市原「お疲れ様でござります!!」

少女が部屋から出ていくと

美城さんとの会話が続いた

プロデューサーとしての活動内容

アイドル達への教育

営業とライブとの兼ね合い等

美城「まあざつくりとした話はこれぐらいだろう。」

雪樹「まあ、ある程度想像はできます。」

美城「だがな、今の事務所を考えるとそれもままならない状態にある」

雪樹「どういうことです？」

美城「前任が最悪でな。アイドル達に猥褻な行為を中心にして手を出していたんだ。痴漢に近い行動が多くつたがな。立場を利用した悪質な手口だ。アイドル達からのクレームも多かつた上に、何人か事務所

に来るのを拒む者も出た。」

雪樹「信じられませんね。最悪です」

美城「おかげさまでライブや予定していた撮影も営業も代理人手配や中止が多発、リハーサルの段階でのキヤンセルで会場を出してくれた企業の信頼やファン達も減っていく一方だ。それでもまだ残つてくれているアイドルは居るが。」

雪樹「さつきの子達や、先日の二人とか」

美城「ああ、前々任が良くしていたからな。恩返しだと彼女達自身も言つていた。ただ、前任が原因で来なくなつたアイドルも確かにいる。」

雪樹「建て直しから、ということですね。」

美城「連絡すら取れないアイドルも居る。そういうたアイドル達を戻つて来させる自身はあるか」

雪樹「自身は無いと一括するのは簡単なことですね。ただやる前から決めたくはありません」

美城「覚悟はあるようだな。これから大変だぞ」

雪樹「右も左もわからぬですから勉強しながら、少しずつやっていきます」

美城「私も元々別の役職で臨時でプロデューサーとしているだけだ。キミが新任となるならサポートはするが基本キミの判断となる。」

雪樹「もちろん、それは承知の上です。やれるだけ、やつてみましょう。」

美城「そうか。先に釘は打つておくが。アイドル達からのクレームが重なれば、キミの席も無くなると思つていい」

雪樹「その時はお構い無く。それが結果ですから。ただ私は意図的に嫌な事はしたくありません。そういうの、苦手なので」

美城「その言葉、今は信じておこう、それで連れて行く場所がある、こつちだ」

専務の部屋を出てしばらく歩くと

また別の部屋に案内された。

美城「ここだ。」

鍵を開け部屋を開ける

窓も閉め切つていて薄暗く埃っぽい

奥に机があり。

左右に棚、多くのファイルとトロフィー。

美城「ここがプロデューサーのオフィスだ、前任が使った形跡はほとんどない。少し掃除が必要だが。ここを使ってほしい。」

雪樹「僕の前の人たちはここを使つてたですよね。」

美城「そうだ。だから今更別の部屋を用意する必要もないと思つてな」

雪樹「そうですね…この方がいい。」

美城「気に入つたかな、」

雪樹「ええ、今日はここを綺麗にして、一度帰ります。」

美城「そうか。好きにするといい、私はまだ仕事があるから。それではな。」

美城さんがオフィスを出てから

早速、掃除を始めた。

カーテンを開き窓を開け換気をする。

照明も合わせると一気に明るくなつた

ソファーや床やテーブルも。

机の上すら埃まみれなのを必死になつて拭いていく

棚や窓も入念に水拭きする。

雪樹「まさか、掃除から始めるとはな、でもこれも大切な仕事だ」
正式に決まつたわけじやない

ただ今後利用させてもらえるなら
大事なことだ

二時間ほど掛けてようやく一頬り綺麗になつただろう。ソファー
や窓、机も棚

雪樹「疲れたな。」

ソファーに座り込みオフィスを見渡す

決して広くはないが十分すぎるスペースはある。

雪樹 「ああ…だめだ、眠たくなつてきただな…」

考えが纏まらなくなつて少しするともう意識はなかつた。

…

??? 「…きて、お……さい！」

誰かの声が聞こえる。

よく聞き取れない

??? 「起きてください！」

雪樹 「はっ?!」

起きた。寝てしまつていたんだろう

雪樹 「えつと…そうだ…掃除してついうたた寝して…」

??? 「どうして寝てるんですか？」

さつきから声をかけていたのは女性の人だったようだ

雪樹 「美城さんに案内されて。少し部屋をキレイにしてました。そ

したら疲れてしまつて。」

女性 「美城専務、やつぱり貴方が美城専務が言つてた新しいプロ

デューサーさんですね」

雪樹 「ああ、もう話が通してあるのか…」

女性 「私は、プロデューサーさんのアシスタントの千川ちひろです。

今後ともよろしくお願ひしますね」

雪樹 「新しくプロデューサーになる、松谷雪樹です。アシスタント

ですか、よろしくお願ひします千川さん。」

千川 「またこの部屋が使われる日が来たんですね」

雪樹 「ええと、まあ」

千川 「前の方はこの部屋を嫌つててほとんど使つてなかつたんですよ。アイドル達気に入つてたんですけど。」

雪樹 「そうだつたんですね」

千川 「大変かもしませんが、しつかりサポートさせてもらいますので頑張つて行きましょう！」

雪樹 「はい、よろしくお願ひします。」

??? 「あれこの部屋開いて…あれ…？」

また入ってきた別の人

雪樹「あれ、君は先日の」

森久保さんだつただろうか。

森久保「え…あ、えつと…」

雪樹「こんにちは。新しくプロデューサーになつたよ。これからよろしく」

森久保「え?ほんとにプロデューサーになつたんですか…」

千川「お二人は知り合いだつたんですね」

雪樹「先日、ちよつとした出来事があつてその時にね」

森久保「嬉しいような…そうじやないような…」

雪樹「どうしてかな?」

森久保「プロデューサーさんがいれば、事務所の皆さんがまたお仕事ができますけど…森久保はそんなにお仕事ほしいわけじやないので…でも、あんまりなさすぎるのも…」

雪樹「まあ。仕事取れたときはまた声掛けるから、そのときはよろしく」

森久保「は、はいい…そ、それでは私はこれからレッスンがあるのです…」

雪樹「また今度ね」

千川「えつと、今のこのプロダクションについてなんですが…」

雪樹「美城さんから大体は聞きました。とりあえず今日は一旦帰ります。」

千川「わかりました。今後もよろしくお願ひしますね。あと、事務所の鍵を。」

雪樹「ありがとうございます。」

千川「朝開けて起きますけど、夜とか夕方最後に出るときは締めてくださいね。」

雪樹「わかりました。」

事務所を出て帰宅する。

雪樹「また。難しい話になつて來たな…」
一言呴いて、帰路に向かう。

残された資料、一つの傷跡

帰宅途中の出来事だ。

身に覚えのないが。

誰かに後をつけられていた。

雪樹「ストーカー…か」

かなり距離はあるが、確実に後ろの方からついてきている。
適度に後ろを振り向いて歩いていたせいか
正面からの歩行者に肩がぶつかってしまった、

雪樹「あっ、すいません。」

男の人だった。

僕のことを眺めると何かを察したのか
顔を反らし始めた

男「…夜道には気を付けろよ…」

男はそう言うと早歩きで去つていった。

その後からストーカーも居なくなっていた。

雪樹「夜道には気を付ける。か」

何か少し引っかかるが
気にせず帰った。

…

翌朝。特に出勤予定時間等はないが

9時頃、事務所に着いた、

雪樹「あつ、開いてる」

オフィスにノックだけして入る。

千川「おはようございます、プロデューサー」

雪樹「おはようございます。早いんですね」

千川「そうですね。今日は8時過ぎくらいに来ました」

雪樹「8時過ぎ…早いですね」

千川「久々にこの事務所で仕事ができるので色々と準備もありますから」

雪樹「助かります。」

千川「さつきレッスンルームの鍵を持つて行く子達がいたので良かったら挨拶に行つてみてください。多分もういるはずなので」

雪樹「そうしたいのはあるんですけど、まだまだお互い話もしたこと無いのにいきなりレッスンの話をするのも気が引けますね。いくつか資料で調べてからのほうがいいかと思つてます。」

千川「確かにそうですね。」

雪樹「さてと…ん…？」

机の下になにか…

なにか…いや誰かいる…？

?/?「あ…お…おはよう…ご…ざいます…」

雪樹「も、森久保さん…？なんでそこに？」

森久保「ここ、落ち着くんです、ちょっと暗くて、もりくぼには丁度いいスペースで。」

森久保さんの隣にはいくつもの本が置いてある。

いつから居たのだろうか…

雪樹「えっと…そななんだ…椅子、座つてもいいかな。」

もりくぼ「どうぞ、わたしにお構い無く。あ、ぶつからないようにお願ひします。」

お構い無くと言いつつもぶつからないように注意喚起だけはする。とりあえず少し引き気味に椅子に座る。

特に違和感はなく、問題はなく作業できそうだ

雪樹「えっと…昨日貰った書類…」

鞄から入社用の書類を一式

多分、大丈夫

千川「書き終わったら専務のところまで届けてくださいね。」

雪樹「あれ、専務でいいんですか？」

千川「事務の人でもいいとは思うんですけど。専務が自分で持つていくつて言つてたので」

雪樹「そうですか。わかりました」

一頻り書き終えて持つていく事にした

部屋を出て専務の部屋まで着くと扉の前で専務と丁度会つた

美城「君か、書類が書けたようだな」

雪樹「ええ、丁度、提出に来たところです」

美城「預かろう。こちらから話をして事務に提出しておく。」

雪樹「よろしくお願ひします」

書類を渡してオフィスに戻ると見覚えのない少女が二人居た。

ひとまずソファラーに座つて挨拶をする

雪樹「えつと、ここ所属のアイドルだよね。」

美嘉「そう、アタシは城ヶ崎美嘉、それでこつちが妹の」

莉嘉「莉嘉だよー」

雪樹「姉妹アイドルか、小耳に挟んだことはあるよ。」

美嘉「新しいプロデューサーが就いたつて聞いたから、挨拶に来た

の」

雪樹「松谷雪樹、346プロダクションの新しいプロデューサー。よろしく」

莉嘉「よろしくー！」

美嘉「うん、真面目そうでいい人っぽいじゃん、ちょっと安心した」

莉嘉「お姉ちゃんやっぱり気にしてたんでしょ？」

美嘉「少しね。またみんなが嫌な思いするのは嫌でしょ？」

雪樹「僕の前の人のことかな。」

莉嘉「そう。あの人のほんとに酷い人だつたね。」

美嘉「みんな困つてたからね。」

雪樹「やっぱりそうなんだな…専務の美城さんからある程度話を聞

いたんだ。前任が酷かつた影響もあるつて。」

美嘉「アタシ達は特に何かされたことはなかつたけど。あの人に気に入られた子達は特にボディタッチが多かつたし。」

莉嘉「ボディタッチって軽い感じでもないよ。嫌な触り方してたし無理やり変なこともして来てたし」

美嘉「嫌がると圧力かけてたりしたからね。やり方が酷いのもそうだけど何よりも気持ち悪いっていうのが強いかな。」

雪樹「そうか…二人の友人で特に嫌な事された子は居るのかな」

美嘉「うん…居るよ…」

雪樹「出来たらでいい、無理にとは言わない、もしよかつたら教えて」

美嘉「先に一つ約束して」

莉嘉「お姉ちゃんいいの？」

美嘉「良いか悪いかじやないよ。アタシはこの人なら大丈夫だつて思う。あんな人とは違うつて。」

莉嘉「わかってるけど…でも…」

雪樹「どんな約束。」

美嘉「もし、あなたが悪い人だつて私達がそう思つたら、すぐプロデューサーを辞めてね。」

千川「美嘉さん、流石にそれは言い過ぎ…」

雪樹「いいですよ。それは覚悟の上です、というか美城専務とも約束してますから」

千川「雪樹さんも…」

美嘉「…なら…教えるよ」

雪樹「ありがとう」

美嘉「大槻唯つて子がいるの。」

莉嘉「お姉ちゃん、ほんとにいいの？」

美嘉「莉嘉、これはアタシとプロデューサーの話、確かに莉嘉も唯と仲良いし友達かもしれないけど、今回だけは譲れないの」

莉嘉「わかった…」

雪樹「大槻唯さん、だね」

美嘉「そう。元気で明るいのが特徴でさ、よく一緒にカラオケ行ってたりした。みんな唯のこと信頼してたしすっごく仲良かつた、みんなね。」

元気で明るいのが特徴：

周りから信頼されるほど

美嘉「でもあいつは違つて、唯はあいつのこと嫌がつてたんだ。みんなに嫌な事する人は嫌いだつて、唯はみんなを護ろうとした、必死になつて抗議したんだ。」

雪樹「勇気ある行動だな。それだけ大槻さんも周りの事を大切にしてる証だね」

美嘉「そう…私達にとつても、唯にとつてもお互に凄く大切だつたんだよ。でもあいつは唯を虐め始めたんだ…」

雪樹「大人なのに虐めか、情けない」

美嘉「持ち歩いてる飴を没収したり。少し話してただけで怒鳴つたり…次第に話を無視されたり、舞台にも立たせてもらえなくなつたり、営業すら行かせてもらえなくて。」

雪樹「最低だな…」

美嘉「それ以来、元気の無さそうな日も見かけたし、話しかけてもたまにぼーっとしてるときもあつたんだよね。らしくないって感じ」

雪樹「励ましてあげないと…」

美嘉「もちろんアタシ達は唯の味方だし、唯が傷つくのが嫌だからみんなで励ましたね」

…励ましたとしても、根源がなくならないと意味ないか。

美嘉「実際にはどうかわからぬけど、出入り禁止だつて言われたつて聞いたこともある…それでそんな日が続いて。唯が事務所に来なくなつた。電話しても元気のない返事ばっかりだし、最近あいつが居なくなつたつて話をしてあげたけどまだ元気ないんだよね」

雪樹「確かに、みんなの嫌がつていた人は消えたかもしれないが、大槻さんがどう感じているかだね。」

美嘉「立ち直るのも難しいくらい落ち込んでるんだと思う。だけど、アタシはもう一度、元気な唯が見たいよ」

雪樹「大槻さんがこの事務所に気軽に来れるように、できる限り協力をする。教えてくれてありがとう。」

美嘉「さつきの約束、忘れないでね」

雪樹 「当然、忘れないよ」

美嘉 「また今度、唯を事務所に誘つて見るから、その時は…」

雪樹 「その時は僕も話をするよ」

美嘉 「うん。よろしく。」

ソフナーから立ち上がりつて資料を探す

この事務所について、アイドル達についてもそう。プロデューサーとして何をすればいいのか調べないといけない

雪樹 「えっと。」

プロデューサーマニュアルや、

レッスンマニュアル：

雪樹 「最初はこの辺だな。」

美嘉 「何してるの」

雪樹 「昨日来たばかりだから、知らないことだらけなんだ。美城さんからプロデューサーについてはある程度聞いたけど。その細かいところまではまだわからないんだ。だからそれすら知つていかないといけない」

莉嘉 「プロデューサーとしてつてこと?」

雪樹 「そういうことだね。」

美嘉 「何もわからないのにプロデューサーになつたの?」

雪樹 「そうだね…僕はプロデューサーになりたくてプロデューサーになつたのとは少し違う、確かに自分からこの場所來たのは間違いないけど。スカウトの形として來た感じかな。」

美嘉 「スカウト? もしかして専務からの?」

雪樹 「名刺を渡されてね。断る理由も無かつたどころか。少しありがたいのもそう」

莉嘉 「アイドルをスカウトするのはわかるけど。プロデューサーをスカウトするって、どうなのかな?」

雪樹 「さあ…プロデューサーの事とかも初めてだから、その辺は…」
千川 「スカウトされるプロデューサーは少ないと思います。前任の方も志願による就任でしたね。その前の方は別プロダクションから移転という形でしたし。」

美嘉「あの人は急にやめちゃったんだつけ。」

千川「前々任は、実家のご両親の介護で、県外に出られてしましましたから。確かに東北の方だつたはずです。」

莉嘉「遠いね：流石に通うのは難しいと思う。」

千川「この前連絡頂いたんですが。向こうでも介護の合間をみてア イドルプロダクションのアシスタントをやってるそうですよ」

美嘉「ちひろさんと同じ感じ？」

千川「副プロデューサーって言つてましたけど。やることは私の仕事に近そなうだったんで多分そうですね」

美嘉「元気そうで良かつた。」

莉嘉「みんな仲良しだつたからねー」

仲良し：心配をされるほど。

信頼をされているプロデューサー

僕はまだ何もしていない。

当たり前だけど、アイドル達との信頼関係も全くと言つていいほど皆無だ。

僕は彼女達と上手くやつていけるだろうか。

雪樹「あれ…これって」

棚に視線を戻すと幾つものノートを見つけた

一つずつ表紙に名前が書いてある

アイドル達の名前だ。

雪樹「前々任の人のノートか」

冊数だけ見ても100は超えている…

まさか全員分のノートを…？

雪樹「プロデュースノート…」

試しに一冊開くと

びつしりと並んだ文字とたまに写真が貼られている。

そのアイドルの特徴、得意なレッスン苦手なレッスン、相性のいい他アイドル、結成済みユニット、ソロ曲やユニット曲。

雪樹「アイドルプロデュースつてこんなにも事細かくするのか。」

これだけの内容がしつかりと残されているなら、使わない手はない

い。

できる限り、利用させてもらおう。

美嘉「莉嘉。そろそろ、レツスンルーム行こう」

莉嘉「あ、もうそんな時間なんだ。」

雪樹「今日はありがとう。また今度。」

美嘉「それじゃあね」

莉嘉「じゃあねー」

二人がオフィスを出たあと。

別の一冊のプロデュースノートを手に取った。

近道かもしれないとはいえ、ここに書いてある通りにはいかない、

本当に受け入れて貰えるかどうかだ。

千川「お昼ですが。どうしますか?」

雪樹「あれ。そんな時間か?」

手に取つたプロデュースノートを元に戻した。先に昼食だ。

千川「社員食堂。行かれますか?」

雪樹「いや、コンビニで買つてくるので僕はいいです。」

千川「そうですか。では、私も少し席を外しますね。」

雪樹「はい。お疲れ様です」

事務所を出て近くのコンビニまで出向く。

その途中。少し見覚えのある姿を見た。

雪樹「あの格好、昨晩のストーカーか?」

声を掛けるべきか、

いや人違ひだつたら失礼だな。

コンビニで買い物だけ済ませて事務所に戻る。

オフィスに鍵が掛かつてたので開ける。

そういえば森久保さんことを忘れていた

机の下を覗くと。森久保さんがいた

(あれ…鍵掛かつてたよな…?)

森久保「プロデューサーさんは、コンビニのお弁当ですか?」

雪樹「まあね、森久保さんはやっぱりそこでお昼ご飯食べるんだね。」

森久保「はい、ここが落ち着くので。」

机の下でクロワッサンを食べる…

小動物みたいな…

僕も昼メシを済ませよう。

雪樹「森久保さんはさつきの話聞いてた?」

森久保「唯さんの話でしようか…?」

雪樹「そう。」

森久保「聞こえていました。唯さんは、もりくぼでも話しやすいと思ふくらいで…でも、そんな唯さんが悲しそうにしてるのはやつぱりちよつと心配で。」

雪樹「そうか…やつぱり皆心配なんだな」

森久保「赤原さんは唯さんがキライだつたみたいでした。唯さんが皆を護ろうとする前から唯さんの悪口を言つてたり…」

雪樹「赤原? 前任のことかな」

森久保「赤原児玉、だつたはずですけど。もりくぼは会つたことが無いので。噂しか聞いたことないです…」

雪樹「会つたことない?」

森久保「その前の人がいなくなつて、ほぼずっと家にいましたし、お仕事のときはレッスンルームに行くこともなかつたですし、ロツカーしか寄らなかつたので。」

雪樹「そうか、よかつたというか。」

森久保「お力になれず…」

雪樹「いやいや、大丈夫。」

森久保「プロデューサーさんは、赤原さんとなにか?」

雪樹「何もないよ、できる限り赤原さんが何をしたのか知りたいんだけど。」

森久保「ちひろさんとか、他のアイドルに聞いたほうが、早いかもしないでです…」

雪樹「うん。そうするよ。ありがとう」

森久保「もりくぼは何もしてないんですけど…感謝だなんて。」

雪樹「さてと。さつきの続きだ。」

一冊のプロデュースノートを手に取る。

• • • •

パツションアイドル 大槻唯

養成所でレツスン中にスカウト

(何故か食べかけの飴を貰つた)

346 プロダクションに所属

レツスンに対して少し面倒くさがりだが

手を抜くことはあまり無い

「口外クジミン所属後程無くして他のアーティストとの二三ヶ月程成ユニット間だけでなく他アイドルともすぐに打ち解ける程話しやす
い。」

営業においてもバラエティ、旅物、ドラマ等広く活躍していくつか出演してほしいとの要望が耐えないとの感想

盛り上がりした

数ヶ月も経たずして多くのファンを得る

雪樹「やっぱり元気な子つてのは間違いなさそうだな。さつきの話でも出てきたけど、飴が好きなのかな？」

森久保「唯さんはいつも館を持ち歩いてますね…」
「おお！ やつぱり空いてるね！」

雪樹「あつ、どうも」

雪樹 「若、…？」

雪標一着い

警のピチピチアイドルよ♪』

雪樹「新人プロデューサーの松谷雪樹です。今後共よろしくお願ひします。」

片桐「お、言葉遣いはしつかりしてるね。前のおっさんとは大違い。よろしく。若人よー」

雪樹 「え、えっと、はい…」

やたらと馴れ馴れしい：

近い…近い近い：

雪樹 「ちょ…近い…」

片桐 「おお、これは失礼。ところでいくつ？」

雪樹 「いくつて…歳？…歳は24ですが。」

片桐 「やっぱり若い!!あ、連絡先交換していい？」

雪樹 「連絡先ですか？電話番号でいいですか？」

片桐 「構わないわよ！」

雪樹 「えっと…これで。」

片桐 「ありがとうございますー、これでいつでも大丈夫ね。」

雪樹 「何が大丈夫なんですか？」

片桐 「連絡先、他の子達から何かあればすぐ連絡出来るでしょ。」

雪樹 「そういうことですか。まあプロデューサーである以上アイドル達の事であれば話はすぐお伺いした方がいいのは確かです」

片桐 「それもそうだけど、前任の一件もあるし？」

雪樹 「僕は前任の様な真似はするつもりありませんよ。」

片桐 「もし。彼女達が貴方に無実の罪を着せようとしたら？」

雪樹 「僕は非力ですから結果次第です。でもできる限り無実を証明できるものを探ししますね。理不尽に流されるのだけは勘弁なので。それでもだめなら、そこまで」

片桐「冗談よ。そこまで言うのなら、貴方を疑う必要は無さそうね」

雪樹 「冗談は苦手です。」

片桐 「お堅いのは、嫌われちゃうわよ？」

雪樹 「そうなり過ぎないよう、努力しますよ。」

片桐 「あと、連絡先交換した理由は、もう一つあるのよね」

雪樹 「もう一つ？」

片桐 「最近、付近の街並みでストーカーされているという話が多いって、知り合いの警察から聞いたの、貴方もあつた？」

雪樹 「ええ、丁度昨日の帰りにストーカーされましたね」

片桐「やっぱりそうよね。気をつけなさいよ。何か巻き込まれそうだつたらすぐ電話してよ？」

雪樹 「わかりました。元婦警となればかなり心強いですね。」

片桐 「これでも黒帯持ちなのよ」

雪樹 「尚更ですね。」

千川 「戻りました。あら、早苗さん」

片桐 「ちひろさん。どうですか？新しいプロデューサー君は。」

千川 「どうですか、と言われましても。まだ話も少ししかしてませんし。」

片桐 「昨日来たばかりって聞いたけどほんと？私しばらく警察のお手伝いしてたからあんまりこっちの事情知らないんだよね、前任の人全く声掛けてくれないし。」

雪樹 「そうですね、昨日来たばかりです。」

片桐 「そななんだ、頑張つてよ？」

雪樹 「もちろんです。」

片桐 「それじゃ、私は挨拶に来ただけだから。また今度お仕事頂戴ね！」

雪樹 「はい、お疲れ様です。」

早苗さんはオフィスを出て行つた

元婦警か、少し圧があつた気がする。

最初の視線は鋭かつたし後から親しげな感じだつたけど手を出せば確実に仕返しされていたと思う。

黒帯つて言つていたし…

雪樹 「いろんなアイドルが居るんですね。婦警からアイドルに転職するなんて。びっくりです」

千川 「職務質問中に試しに声掛けたらスカウト出来たつて…冬斗さんが言つてましたね。」

雪樹 「冬斗さんつて。前々人ですか？」

千川 「そうです。」

雪樹 「職務質問中にスカウトする方もどうかと思いますけど。それでアイドルになろうと決めた方もどうかと…」

千川 「それは…私も思いました…」

雪樹 「ですよね…」

いやまあ普通おかしいとは思うけど…

良かつたのか：公務員からアイドルへ転職して…

雪樹「ほんとに…いろんなアイドルがいますね。」

千川「そうですね。乃々さんもアイドルになるつもりは無かつたそ
うですが、結局アイドルになつてますよね。」

森久保「もりくぼは：何故かアイドルになつてました。」

雪樹「何故かつて…アイドルになりたかったわけじやないんだね」
森久保「そもそも…アイドルなんてもりくぼには似合わないと思つ
てたんですけど…何故か順調に…」

雪樹「まあ。楽しいんだつたらいいと思うよ」

千川「さつきの話ですが、唯さんのことどう思いますか？」

雪樹「大槻さんのことだよね。大丈夫ですよ、多分少し話をすれば
いいだけです。」

千川「そ、そうですか」

雪樹「確信はありますから。」

千川「確信？」

雪樹「まあ、すぐ良くなりますよ。」

森久保「プロデューサーさん…自信有りげですね…」

プロデュースノートを改めて手にとつて最初のページを読み返す。
そう、特別やることは無い。

むしろ。話をするくらいしか僕にできることはない。

雪樹「あつ、そうだ。千川さん。」

千川「どうしました？」

雪樹「キヤビネットのところ、コンセント余っているので使つても
いいですか？」

千川「あのコンセントは元々冷蔵庫に使つてたので、今は使つてな
いのでいいと思いますよ」

雪樹「1ドア冷蔵庫の小さいサイズですかね？丁度それを考えてい
たんですね。」

千川「はい、一度備品管理室にしまいこんで、それから使つてませ
ん。まだ動くかわからないですが。」

雪樹「買い換えるより、そっちのほうがいいかな、備品室か。」

千川「専務の部屋の2つ隣です。扉に小さい看板付けてあるのですぐわかると思いますよ。」

雪樹「鍵はかけてありますよ。」

千川「鍵は、これですね。」

雪樹「ああ、持ってるんですね…」

千川「このフロアはほとんど私達しか使わないので一部以外はこの部屋に全部あるはずです。」

雪樹「なるほど、」

オフィスを出て備品室に行く。

雪樹「ここか」

備品室。確かに少看板が付いてる。

鍵を開けて電気をつけるとダンボールだらけの場所だつた。

レツスン道具等もあるみたいだ。

雪樹「冷蔵庫：これが。」

台車に積んである物をそのままオフィスに運ぶ。

雪樹「さて…と、これでいいかな」

千川「しつかり通電しますか？」

雪樹「そうですね。冷えてきても本格的に使えるのは明日からかな。」

千川「そうですね。」

丁度置き終えソファーに腰を掛けたところでオフィスの扉が開いた。

???「あっ、ほんとに変わってるんだー。」

見覚えのある顔だけど…実際には初めて会うかな

雪樹「初めまして、新しいプロデューサーの松谷雪樹です。よろしくね。」

大槻「大槻唯だよ。よろしく。」

思つたより暗いというか。落ち着いているのほうが合つてるかな。

千川「お久しぶりです、大槻さん。」

大槻「ちひろさん久しぶり～！ちひろさんは大丈夫？あの人に何も

されてなかつた?」

千川「私は大丈夫ですよ。関わること少なかつたですから。」

大槻「そなんだ、良かつた!」

千川「彼が新しいプロデューサーですので、今後ともよろしくお願ひしますね?」

大槻「う、うん、わかってるよ。」

：目を背ける辺り、前のことを感じてる様子かな。

雪樹「無理はしなくていいよ。さつき、とは言つても昼前か、城ヶ崎姉妹がレッスンルームに行つたけど、まだいるかもしれない、鍵は戻つてきてないから、良かつたら顔を出して来るといいかな。」

大槻「二人も来てるんだね! 行つてこよつかな!」

大槻さんはオフィスを出て走つていった。

雪樹「思つたより元気そうだね」

千川「赤原さんが居た頃よりか、元気ですね。」

雪樹「僕が話をしなくとも。自然と良くなるんじやないかな」

千川「そうだといいですね」

雪樹「そうだ、森久保さん。飴、食べる? コンビニ行つたときに買つてきたんだ。」

森久保「え、そんな唐突な、あ、でもいただきます。」

雪樹「それじゃ、サイダー飴のりんご味で。」

森久保「いただきます、んむつ…粒が大き過ぎて…」

雪樹「ほつペが膨らんでる、リスみたいだね。」

森久保「あうう…りす…りすくば…」

自分も飴を食べる。

粒が大きい。確かにこれは頬が大きくなるな。

雪樹「この飴久々に食べた気がするなあ」

森久保「飴…おおきい…」

大槻さんは残念そうに戻つてきた

大槻「うーん、一人ともいなかつたよー。あれ! サイダー飴じやん

!」

雪樹「大槻さんもどうぞ、何味がいい?」

大槻「サイダー飴ね～！それコーラ味が好きなんだよね～！貰つていいかな？」

雪樹「コーラ味だね。もちろん」

飴を渡すと嬉しそうに口に放り込んだ。

大槻「うーん！このシユワシユワするのやっぱりいいね～！」

雪樹「確かにこういう一風変わった飴は美味しいね。」

大槻「事務所で飴食べるの久しぶり～！」

雪樹「飴はテーブルに幾つか置いておくからいつでもおいで」

大槻「もしかして、新しいPちゃんってめちゃくちゃ良い人？」

雪樹「少なくとも悪い人ではないよ。」

大槻「ちょっと安心したかな～。」

雪樹「僕も少し安心したよ。」

大槻「んー？ なんで？」

雪樹「城ヶ崎の二人がね、大槻さんの事心配してたから。もし来たら良くしてあげてって言われてたんだよ。」

大槻「そうだよね、わかつてたけど…でも事務所の事思い出したりすると、あの人の嫌なことも思い出したりして。ちょっと落ち込んじゃつてさ。」

雪樹「それでも、戻つてきてくれたんだよね。」

大槻「うん、もう居ないなら悩む必要もないでしょ？ またみんなと一緒に遊びたいし、美嘉達にも悪いかなって。」

雪樹「ありがとう。これから宜しく」

大槻「よろしくね！ Pちゃん！ ちひろさんも！」

千川「改めてよろしくお願ひしますね。」

大槻「それじや、美嘉達探してくるから唯は行くね！ また遊びに来るね～！」

大槻さんは元気そうにオフィスを出て行つた

雪樹「うん、大丈夫だね。」

千川「でしたね。さつきの話ですが、ほんとに大したお話もしてないのに唯さんが戻つてきてくれるなんて。どうしてわかつたんですか？」

雪樹「そもそも、あの子は落ち込むのを引き摺るような子じやないと思つたんだ、元気つ娘は自分が落ち込むことより他人が落ち込むことのほうが気にしてることが多い。自分のことにある程度楽観的になれると思うんだ。だからじやないかな」

千川「確かに大概さんが落ち込むところはあんまり見たことないですので、そうかもしれないですね。」

雪樹「あくまで僕の憶測だけどね。でも実際戻つてきててくれたんだ。それでいい。」

森久保「もしかして雪樹さんも、魔法使いなんですか？」

雪樹「ま、魔法使い？それに僕もつていうのは、どういうこと？」
森久保「冬斗さんにスカウトされたアイドルは、お仕事貰えたり、ユニットを組めたり、ソロのレコーディング貰えたり、必ず皆さん耀いているんです。もりくぼもそうでした。」

雪樹「僕にそこまでの力があるかわからないよ、まだ大きな目標は見つからないし、みんながまた楽しくアイドル出来るようになるのが、今の僕の目標かな。」

森久保「楽しくアイドル出来るように…なら…いや…」

雪樹「どうしたの？」

森久保「いつ、いえ、なんでもないです。」

雪樹「そう、気になる事があるならまた今度教えてくれると嬉しいかな。」

森久保「ま、また今度で…」

ふと窓に目を向けると夕暮れのオレンジ色の空が見えた。

雪樹「あれ、もう夕方なのか。」

千川「六時過ぎてますね、そろそろ私は帰りますね。」

雪樹「はい。お疲れ様です。」

千川「お疲れ様です。」

千川さんは荷支度をして帰った。

けど、森久保さんは…

雪樹「森久保さんは。まだ帰らないのかな」

森久保「もりくぼも、森に…女子寮に帰ります。」

雪樹「うん、お疲れ様。」

森久保「お疲れ様です…」

森久保さんも小走りでオフィスを出ていく

皆が居なくなり一人だけになる。

樹 僕も帰らうかな 明曰は専務に話をしてみるか

本アーティストを出て鑑をかに事務所を出た

雪樹「昨日と同じ人じゃな、な。」

複数犯か。交代制なのか。

とにかくストーカー犯は一人だけじゃない

といふことだらうが

気にしていないふりをして普段通り帰路を進むと先日と同じ場所で前から人が歩いてくる。服装も似ているし仕草も似た感じだ。

道を開けるように横にずれて歩くと

何事もなくその場を歩き去って行った

昨日とは違うのは。

ストーカーがまだついてきている事

氣にする素振りをせず家の付近まで着くとストリカリは去つて

雪樹「特定されたか……？（まだ）距離はあるナゾ。明日の帰りは道を変

えるか…」

• • • • •

翌日、郵便受けに差出人のない封筒。中には異様な手紙が入っていた：

戻る賑わいと初仕事

手紙の内容…

…

お前に必ず不幸が降り掛かる
あのプロダクションに近づけば必ずだ
それを回避する手立てはお前にはない
お前には不釣り合いだ
今すぐ辞めろ

…

雪樹「ストーカーからか」
目を通すとゴミ箱に捨てた
不幸が降り掛かる…か

雪樹「手紙の主が思う不幸がどんなものか、別に気にするまでもないか」

家を出て事務所まで向かつた。

何事もなくオフィスまでたどり着く。

雪樹「おはようございます」

ちひろ「おはようございます、プロデューサー」

デスクの横に見覚えのない女の子が…

大きなうさぎ?の椅子に座つて本を読んでいる

雪樹「えっと…プロダクションのアイドルなんだよね…?」

杏「そう、双葉杏だよ、あ、飴ごちそうさま!」

雪樹「結構、堂々としてるんだね…」

ちひろ「杏ちゃんは以前からずっとこんな感じですよ」

雪樹「連休だからかな。みんな事務所に来るんですね」

杏「そうそう、まあ杏は連休じゃなくても学校たまに休むけどね

」

雪樹「成績とか大丈夫なの?」

杏「こう見えても成績優秀なんだよ?」

雪樹「定期試験とかは…」

杏「大丈夫大丈夫、宿題は出してるし、テストは毎回全教科9割以上取つてれば怒られないから」

雪樹「え、ちひろさんこれ本当なんですか?」

ちひろ「年下や同年代の子達に勉強教えてる所をたまに見ますよ?」

雪樹「すごいな…」

杏「そうそう、だから少しぐらいはだいじょ…」

?? 「杏さん! お待たせしました!」

杏「待つてないよ…? てかよくここだつてわかつたよね…」

雪樹「あれ、君は」

?? 「あれ? もしかしてあなたは。」

雪樹「CDショップで会つたかな…?」

島村「そうです! やつぱりそうですよね! 私、島村卯月です! よろしくお願ひします! プロデューサーさん!」

雪樹「松谷雪樹、よろしくね。」

杏「卯月ちゃんには挨拶して杏には挨拶なし? まあいいけど…」

雪樹「ごめんごめん。流れがちよつとなかつたね、改めてよろしく」

島村「杏さん! 今日もお願ひします!」

杏「た、たまには休んだら? 詰め過ぎじゃないの…?」

島村「いえ! 今回の試験は絶対に落とせないので! 頑張らないといけないんです!」

杏「十分すぎると思うけどなあ…そもそも杏が教えなくとも十分点数取れてるしさー、全教科で平均点8割だつけ?」

島村「平均8割方じゃダメなんです! 9割以上は必要です!」

雪樹「そこは100点じゃないんだね…」

ちひろ「そもそも平均8割もあれば十分だと思いますが…」

杏「最近ずっとこんな感じでさー、プロデューサーもなんか言つてあげてよ」

雪樹「そこで僕に振られてもなあ、頑張りすぎても疲れるから。

程々にね」

島村「はい！頑張り過ぎないように頑張ります！」

雪樹「う、うん？そつか…」

杏「まあ仕方ないなあ…教えるようなことないとは思うけど。」

島村「ありがとうございます！」

二人はテーブルに教科書とノートを広げて勉強を始めた。

ちひろ「ちょっとどずつ、前の事務所に戻りつつありますね。」

雪樹「こうやって気軽に来てくれるとありがたいね。」

二人の勉強姿を眺めているとオフィスに専務が来た。

美城「プロデューサー、少し話がある」

雪樹「話とは？」

美城「簡単に言うなら営業だな、アイドルの仕事の依頼だ。私に連絡が来たのだが、本来は君の仕事だからな。頼むぞ。」

美城さんから仕事の資料を渡された。

雪樹「わかりました。」

美城「わからない部分は聞いてくれていい。それでは、私はまた別の仕事があるから。」

オフィスから専務が出ていくと勉強していた二人がこちらを凝視していた、

杏「プロデューサーって。何者なの」

雪樹「何者って言われても。ただのプロデューサーだけど。」

杏「専務からあんな軽々しい対応されるの珍しいと思うんだけど。」

ちひろ「今日の専務、少し忙しそうでしたから。それもあると思いまますが。」

雪樹「別に特に何かあったわけじゃないよ」

杏「まあ、専務が信頼してるならそれだけしつかりした人なんだろうね。」

雪樹「少なくとも前任よりは。」

杏「あの人はだめだよ。プロデューサーじゃないもん」

雪樹「さて、初めての仕事の話だな…」

杏「頑張つてね！」

デスクに腰掛けて資料を眺める

平日夕方放送のドラマの撮影。

共働きの家庭の娘役にアイドルを選定。

設定として年齢は15歳、高校生、大人しめの女の子。友人には恵まれているがあまり自分から交流はせず読書が好きでよく本を読む

雪樹「なるほどね。子役…って程でもないか」

ちひろ「どんな内容なんですか？」

雪樹「ドラマの撮影で、15歳の娘役です」

ちひろ「15歳ですか。」

雪樹「大人しめの子を演じれる子」

ちひろ「森久保さんとかどうでしよう？」

雪樹「いいかもしないけど。折角の機会だから他の方も声を掛けみてたい。森久保さんに頼むのは数件尋ねてもだめだつたらにします。」

ちひろ「わかりました。」

雪樹「とは言つても、僕もまだどんな子がどれだけ居るのかすら把握しきれてないし。」

棚からアイドルの自己紹介カードのファイルを取る。

ちひろ「自己紹介カードから選ぶんですね」

雪樹「物は試しに。上手く行くかどうかはわからないですけどね。」
年齢や趣味から選ぶには多少難しい。

自己紹介カードの第一印象から見ても難しい部分は多い。

幸い、短い内容で、撮影の期間は通しでも数日で終わる話だから、学生の子達でも何も問題なければ大丈夫そうだろう。

雪樹「誰がいいだろうか…そうだ、二人はどうかな」

島村「えつと、私は試験前なので…」めんなさい」

杏「ええ、働きたくないよ。それに15歳の女の子でしょ? 見た目があなあ」

ちひろ「杏さんは容姿が15歳に見えないですから…」

杏「そうそう、同じ年だけど、どちらかといえば卯月ちゃんのほうが適任だと思うよ」

雪樹「でも島村さんは試験もあるから無理と、仕方ない、探すか。」

自己紹介カードをめくつっていくと一人のアイドルに目が止まつた。

雪樹「白菊ほたる。この名前って」

この名前は見覚えがある…確かにライブの…

ちひろ「いいかもしないですが。」

杏「ほたるちゃんか？」

雪樹「声を掛けてみたい。」

杏「まあいいんじゃない」

ちひろ「うまく行くといいでですね。」

その前に。プロデュースノートを…

棚からノートを取り出したとき棚からいくつもノートが崩れ落ちてきた。

雪樹「これは…整えないとな…」

並べられたとおり五十音順に片付け直す

杏「早速だつたね。」

今の言葉が気になつたが

ひとまずノートを開く。

…

キユートアイドル 白菊ほたる

公園にて落ち込んでいるところを説得し、スカウト、自分は不幸体质だと彼女自身が言つており周りにもそれが影響するかのように不運なことがたまに起ころる。

事務所を転々としていた過去があり

そのほぼ全てが倒産してしまったとか。

日々のレッスンやユニットでの活動、営業を重ねていくうちに前向きになることが多くなり。不運に思うのではなく。努力不足だと言いい換えるようになつた。

ユニットでの活動でもたまに不運なことが起ころるが、彼女を知つている仲間は気にしておらず優しく接することが多い
ユニット活動やソロ曲披露で沢山のファンを得た。

ソロ曲「谷の底で咲く花は」
ユニット曲…

…

雪樹「…やつぱりこの子なのか。」

ちひろ「何か知ってるんですか？」

雪樹「ソロ曲、聴いたことがあって、以前知り合いの付き添いでラ
イブに行きました。」

ちひろ「そうだったんですね」

雪樹「女子寮借りてるんだね、今いるかな」

ちひろ「連休で帰省してる子が多いですが、残ってる子も一部はい
ますよ」

雪樹「連絡してみるか…」

…絶賛コール中…

白菊「は、はい白菊です！」

雪樹「こんにちは、346プロダクション新任プロデューサーの雪
樹です、白菊ほたるさんでよかつたですよ？」

白菊「えっと、はい。私が…ほた…す…新し…さーさん？」
うまく聞き取れない。

回線が悪いのだろうか

雪樹「えっと、回線が良くなかったみたいで、かけ直して…あれ、」
電話が切れてしまつた。

やはり回線が悪かつたみたいだ。

ちひろ「どうされました？」

雪樹「うーん…途中で電話が切れてしまつて、かけ直してみます。」
電話をかけ直すと電波の繋がらないところに…という案内が流れ
る

その後いくらかけ直してもコールだけで一向に繋がらないかコー
ルせずすぐ切れるかのどちらかだけ。

雪樹「困ったな…」

杏「まあ、もう少し待つてみようよ。」

雪樹「とりあえず、別の候補を探すか。」

また自己紹介カードの冊子をめくつていく。

雪樹「誰が適任はいると思うんだけど…」

大人しめの子とか居るといいんだけど

：流石にいると思う…いるよな…？」

雪樹「ちひろさんは、誰が適任の子とか思い浮かばないですか？」

ちひろ「んー、15歳の大人しめの子ですよね。そうですね。渋谷

さんとか、」

島村「凛ちゃんは大人しいというよりクールなので、どうなんでしょうか…？」

杏「あの子は？智絵里ちゃんととかさ」

ちひろ「確かに智絵里さんは大人しめってイメージはありますね」候補の会話をしていると

オフィスの扉が開いた。

???「お、おはようございます」

雪樹「あ、こんにちは。来てくれたんだね」

白菊「お電話貰ったのに途中で切れてしまつて…すみません」

雪樹「来てくれてありがとうございます。新任プロデューサーの雪樹です。よろしくお願ひしますね」

白菊「白菊ほたるです、どうぞ、よろしくお願ひします」

大人しめ、ではあるけど、

少し暗いかな。

雪樹「そうだ、電話した理由についてなんだけど、今話してもいいかな。」

白菊「お仕事のお話でしようか？」

雪樹「ドラマの撮影でこのプロダクションから1人お願いできなかつてことで、声を掛けさせてもらつたんだけど。いいかな。」

白菊「えつと、内容を見てもいいですか？」

白菊さんはソファラーに座つて資料を眺める…

お願いできるだろうか。

雪樹「うん、これが資料。回答はすぐじゃなくともいいから。」

白菊「いえ、やります、手芸も教えてもらつて少し練習してました。」

読書も嫌いではないですし、頑張ってみます！」

雪樹「ありがとう、ドラマの脚本の方や撮影事務所に連絡をするから、また進展があつたときに連絡するよ。ひとまずありがとうございました」

白菊「はい、宿題の途中だつたので、戻ります、お疲れ様です。：いたつ…！」

白菊さんはオフィスを出ていくとき
ドアノブに腕をぶつけていた

雪樹「さてとひとまず一段落かな。お昼、どうしようか。」

卯月「私はおにぎりを作つてきました。」

杏「コンビニおにぎりがあるからいいかなー」

ちひろ「私は社員食堂に行つてきますね」

雪樹「そうか。まあ外で食べに行つてくるかな」

：

事務所を一旦出てまた近くのコンビニの横を通り、この前のストーカーに似た人物がコンビニの少し離れたところで立つていた。

時折こちらを見ているような気がする
気にせず通過することにした

：

雪樹「戻りました」

森久保「あ…プロデューサーさん、おかえりなさい。」

雪樹「あれ…二人とも寝てるじゃないか…」

森久保「えつと…杏さんと卯月さんは休憩つて、言つてました」

雪樹「それで、大きなうさぎのいす…なのかな、そこで横になつて寝てるわけか、何かブランケットとかないかな。」

秋も終わりかけてるが、肌寒さはない

とはいえ私服のまま横になるのは少し良くない
オフィスの戸棚を探すが

それらしいものはない：

森久保「あ、これで良ければ…」

森久保さんが持ってきたのは少し薄めのタオルケット。昨日とかで机の下で使つていたものかな。

雪樹 「森久保さんはいいの？」

森久保 「だ、大丈夫です…」

雪樹 「うん、ありがとう。」

早速二人にタオルケットを掛ける。

雪樹 「今日は机の下に居ないんだね。」

森久保 「いつもいるというわけじゃないのですが…」

雪樹 「そうか。」

とりあえずデスクに腰掛ける。

さて、撮影事務所に連絡してみるかな…

雪樹 「この番号かな。かけてみるか」

…

電話に出ない、留守電にもならなかつた。

雪樹 「昼飯中かな、それなら出られなくともわからなくなるが」と、そう思つた矢先

折り返し電話かかつてきた

雪樹 「はい、346プロダクションの雪樹です」

斎藤 「お世話になります、○○事務所の斎藤です」

雪樹 「あ、お世話になります。先程はすいません。ドラマの出演者の件でお話させていただこうとお電話かけさせていただいたのですがよろしいですか？」

斎藤 「ああ、わざわざありがとうございます。決まりましたか？」
雪樹 「ええ、白菊ほたるさんにお願いしました。今度打ち合わせ等お伺いしますが。」

斎藤 「あの白菊さんですか！ありがとうございます！実は出演者の中に白菊さんのファンの方が居るんですよ。有り難い限りです、では早速で申し訳ないのですが、明後日の連休最終日に脚本の方と打ち合わせがあるので、そのときにでもお会い出来ませんか？」

雪樹 「それはよかったです。明後日ですね、私は問題ありませんが、白菊さんにも確認してまた連絡させていただきますね。」

斎藤 「わかりました、ではお待ちしています」

雪樹 「はい、それでは」

……

うまく行きそうだ。

森久保「お仕事のお電話ですか？」

雪樹「そうだね。専務から任せられたんだよ。」

森久保「大変ですね：つい先日ここに来たばかりですよね：」

雪樹「そういう仕事だからね。専務も忙しいだろうし、慣れてないからと言つて任せてしまうのも良くない。やれるだけの事はするよ。」

森久保「怖くないんですか？初めてのお仕事とか：」

雪樹「んー。心配なのはもちろんあるけど、気にしそぎても前に進めないから。」

森久保「そうですよね…」

雪樹「森久保さんは事務所の仕事は怖い？」

森久保「怖いというか、自信はなくて…それにあの人も居なくなつてから逃げてしまわなかが不安で…」

雪樹「背中を押してくれる人か。そうだね。僕もそうなれるといいかな。」

森久保「プロデューサーさんは真面目ですよね…」

雪樹「よく言われるよ。」

森久保「森久保はすぐ逃げてしましますし。お仕事には自信はあります：でもそんな森久保でもこの事務所で上手く行つてますから…きっとプロデューサーさんはもつとうまく行くと思います…」

雪樹「うん。ありがとう」

杏「ふあ～ああ寝てた…あ…卯月ちゃん隣にいるし…」

雪樹「おはよう。」

杏「おはよ～…」

雪樹「二人とも気持ち良さそうに寝てたね。」

杏「う～ん、卯月ちゃんは勉強してたはずだけど。まあいつか。」

森久保「ノートとか、広げたままでしたので…とりあえず一纏めにしておきましたけど…」

雪樹「そういえば。双葉さんはここのおオフィスのことをどうやって

知つたの？」

杏「んー？ 城ヶ崎姉妹達がグルー・チャットの方で話してたからかな。多分もうみんな知つてるんじゃないかな。」

雪樹「なるほど、SNSか。それなら伝達も早そうだね。」

杏「まあ卯月ちゃんがここに来るとは思わなかつたけど。結構集まつたりするから。」

雪樹「活気が戻つて来てくれるならそれはそれで有り難いことだよ」

杏「他の子はどうかわからないけど、杏はここに来る理由が無くなりそุดだけど」

雪樹「来る理由？」

杏「友達がここへのプロダクション辞めようと思つてるとかなんて言い出したから、杏も考えてるんだよね。」

雪樹「友達か。どんな子？」

杏「杏と違つて真面目なところがあつて背が高いかな。諸星きらりつていうんだけどさ。前のプロデューサーが散々嫌がらせしたせいで辞めようかなんて言い出しちやつたんだよね、杏もきらりのことは心配だけどさ。暴力じみた事されたら反論もできないし」

雪樹「今はもう前任は居ないから」

杏「きらりにはそのことは話したよ、新しい人がどうかで続けるか辞めるか決めるつて言つてたから。そのうちここに来るの思う。」

雪樹「話をしてみないとわからないかな。」

杏「今暇だろうし、呼ぶ？」

雪樹「無理やり話をするつもりはないよ来てくればいいから。」

杏「いいんじやない？ むしろ今のきらりは呼ばないところないんじやないかな。」

雪樹「呼ぶのはいいけど、まだ少し用事があるし。そうだ、森久保さん。」

森久保「は、はい…？」

雪樹「白菊さんの連絡先知つてたら呼んで貰えないかな、さつき連絡したときは繫がりが悪くて」

森久保「あ、わかりました、呼んでみます」

雪樹「頼むね。」

杏「きらりに聞いてみたけど今日は来ないってさ。」

雪樹「そつか。また今度かな」

森久保「ほたるちゃん来てくれるそうです。」

杏「結局ほたるちゃんにするんだね。」

雪樹「他の出演者の方で、白菊さんのファンの方が居るらしくて。なおさら白菊さんのほうが適任だつたよ。」

杏「たまに居るよね。でも気をつけないと厄介ファンとかだと拗らせたら面倒だからさ」

雪樹「テレビに出るような人が厄介ファンだとは思いたくないけど。」

森久保「人は見かけに寄らないですから…」

杏「そうそう。杏もこう見えて17歳だからねえ！」

雪樹「17なのか：確かに17歳には見えないな…」

杏「さつき言わなかつたつけ？」

雪樹「同じ年としか言つてなかつた気がする」

杏「あれ、あ、そうかも、」

雪樹「ということは卯月さんも17歳か。」

杏「そういうことだね。」

雪樹「学生の子がやつぱり多いのかな、年齢層が多いとかちょっとわからぬけど」

杏「学生は圧倒的に多いんじやないかな。20歳超えてもアイドルやつてる人はいるけどさ。」

雪樹「所謂、大人アイドルと言うやつか。」

杏「結構いるよ？」

雪樹「昨日来た片桐さんがそうかな。」

杏「あれ：あの人30前とかじやなかつたつけ…」

雪樹「体力持つのかな：あいや、片桐さんは元婦警だから大丈夫か。」

白菊「お待たせしました。お疲れ様です。プロデューサーさん、お仕

事の話ですか？」

雪樹「お疲れ様、何度もすまないね。ドラマの話なんだけど。明日は空いてるかな。打ち合わせがあるんだけど」

白菊「明後日は舞台演技のイベントの予定のはずなんですが…」

雪樹「あ、そうか。専務がまだ持つてる仕事か…」

白菊「なので明後日はいけないです…すみません」

雪樹「うん、仕方ないよ。連絡はしておくから、ありがとうございます」

白菊「はい。せつかくですから。少しゆっくりしていこうかな。」

杏「ドラマの役、頑張ってね！」

白菊「はい、久々に頂いたお仕事なので頑張ります。何も起こらないうように気をつけます。」

雪樹「みんな少しずつ戻つてきてくれてるんだね」

杏「さつきも言つたけど、グループチャットでみんなに知り渡つてるだろうから、そのうち顔合わせる子も増えると思う。」

雪樹「あとは：前任の後始末もあるか。」

杏「全員が全員戻つてくるとは思えないけどなあ…」

雪樹「出来る限りは頑張るよ」

ちひろ「戻りました。つて卯月さん寝てる」

杏「よく学びよく寝るつてことだよ。」

ちひろ「杏ちゃんは少し学びよく寝る。ですよね。」

杏「さすがちひろさんよくわかってる」

白菊さんが片付けられたノートを少し開いて見ている。

白菊「あ…そつか…これ高校の内容なんだ…」

森久保「ほたるちゃん、多分それ見てもわからないと思います…」

白菊「はい…全くわからないです…」

杏「そりや、高校生の内容だから。習つても難しいと思うよ。」

そつとノートを閉じる。

雪樹「ちょっと電話してくるよさつきのドラマの事務所の方に」

ちひろ「日程とかですか？」

雪樹「打ち合わせが明後日あるみたいで。その件で」

ちひろ「わかりました」

オフィスを出て廊下で電話を掛ける、

斎藤「はい、斎藤ですが」

雪樹「346プロダクションの雪樹ですがドラマの打ち合わせの件、今話してもよろしいですか？」

斎藤「ええ、大丈夫ですよ、どうでしたか？」

雪樹「生憎、白菊さんは舞台演技でイベントの出演があるそうで、明後日の打ち合わせには来られないみたいですね。私だけでも大丈夫そうですか？」

斎藤「そうですか。とりあえずは大まかな企画の打ち合わせなので詳細は決まってませんし、問題はないですよ。」

雪樹「助かります。明後日の打ち合わせは、どちらで行う予定ですか？」

斎藤「あとでFAXを送りますのでそちらで確認願えますか。電話だと長くなりますし、今も別の撮影の片手間だつたので」

雪樹「それは失礼しました。番号とかは…」

斎藤「先日お会いしたプロデューサー代理の方からお伺いします。また不明点があればお電話ください。申し訳ないですが、そろそろ戻らないといけないので」

雪樹「お手数おかげしました。失礼します」

⋮

電話の途中から気がついていたけど

さつきからオフィスが騒がしい…

雪樹「どうかしましたか」

杏「それが、アレが居たって」

雪樹「アレ?」

白菊「黒くてカサカサ動くアレです…棚と壁の隙間に入つていくのを見た気がして…」

あー、アレか

雪樹「ああ…アレ…というかアイツ。」

卯月「寝起きからいきなりてんやわんやです…」

雪樹 「殺虫スプレーとかあります?」

ちひろ 「噴き出しタイプのであれば」

雪樹 「あるなら大丈夫かな。」

ちひろさんからスプレーを受取り
とりあえずスプレーを噴射した。

確かに棚の底奥の方から何か小さな音が近づいてきて、出てきた、

割と大きい

雪樹 「あ、コイツか」

すぐさま蓋付きの塵取りで拾う

杏 「プロデューサーはなんともないんだね」

白菊 「あの…その後は…」

雪樹 「処理してくるよ。」

……

雪樹 「どこから入つてきたんだろう…」

ちひろ 「長いこと閉めてましたから、最近だと思うんですけど」

杏 「どこにでも出てくるから。他の部署からかもよ?」

雪樹 「見つけ次第また処理すればいい」

ちひろ 「そうですね」

雪樹 「さてと…今日はこの辺で帰ろうかな。もう日も落ちかけて來たし」

杏 「時間が過ぎるのってホント早いよね。」

島村 「殆ど寝てて全く勉強出来てません…」

白菊 「私も途中だつたので。続きやらないと。」

森久保 「もりくぼも…帰ります…お先にすいません…」

ちひろ 「もう少し書類だけ整えてから帰るので雪樹さんは先にどうぞ」

雪樹 「手間かけてすいません。お言葉に甘えて先に失礼しますね、お疲れ様です」

ちひろ 「お疲れ様です」

オフィスを出てプロダクションから出た

……

帰路の途中。

やはりストーカーに付けられていた。

雪樹「何が目的だ…？」

思案しながら歩いていると前方に数人の男が道を塞ぐよう立つ
ていた…

逆恨みの終わりと疲労感

なるほど。誘拐か

雪樹「何か御用ですか。」

男「あんただな。新任のプロデューサーは」

雪樹「散々ストーカー使い回してるならわかつてることだと思いま
すけどね。」

男「なかなか強気だな」

雪樹「この状態で怯えるような人間が、プロデューサーなんて出来
ませんよ。」

男「なるほど、気持ちだけはしつかりしてるんだな。まあ、それも
もう終わりにさせてやる。」

雪樹「ただでは済まないのは承知ですが。何かされるんですかね、
見た感じ物騒なものは見当たりませんけど」

男「まあ、刃物は何本があるな。生憎拳銃はねえんだよ。」

雪樹「刃物一本でもあれば勝ち目はないですかね。」

一つ…掛けに出でみるか。

雪樹「少し失礼、電話が。切れますね。」

早苗さん。読み取つてくれるとありがたいけど、

⋮

片桐「プロデューサーから電話?こんな夕方から何かしらね…夜の
お誘いはお断りなんだけど。」

電話に出ても反応がない⋮

片桐「まさかイタ電?でもあの感じでイタ電するような人とも思え
ないし。」

何か聞こえる…この声もしかして…
少し。様子見しましようか

⋮

男「電話か。切つとけそんなの、緊張感の無い男だな。」

雪樹「緊張感というより。冷静だつて言つたほうが、聞こえはいい

と思いますけどね。それよりお名前聞かせてもらつてもいいですか。」

男「そうだなせつかくだから言うよ、俺は赤原児玉、あなたの前任のプロデューサーだよ。」

雪樹「それで、前任のプロデューサーが僕になんの恨みがあるんですか？」

赤原「あんたが潰れれば今度こそあのプロダクションは終わりだ。」

雪樹「逆恨み。ん、ちょっと違うか。とにかく僕はあなたに恨まれる筋合いは無いし、潰したいなら直接的にやればいいじゃないですかね。遠回しすぎると思いますよ。」

赤原「あんたが潰すほうが話が早い、俺にあのプロダクションは今はあんたが希望の星だ、その希望が潰れたとなれば…そりや苦しいだろうな。」

こいつ…馬鹿か…

雪樹「入つて3日の新人を希望の星とか言つてるのは少し筋違いだと思いますけどね。ましてや、過去に何の経験もない一般人ですよ。」

赤原「何でもいいんだよ、とにかくあのプロダクションにプロデューサーは着けさせねえ。」

雪樹「それで、どうするんですか。早く行動の結論を言つてください、時間勿体無いですよ」

赤原「おい、車まで連れて行け。」

ワゴン車に連れ込まれ。どこかに向かつているようだ。

雪樹「どこ向かうんですか。」

赤原「そうだな。港で沈めてやるよ」

雪樹「東京港ですか。」

赤原「なんだ、なんか文句でもあるのか」

雪樹「いいえ何も。鞄少し車においておきますね」

しばらくしたら港に着いた

赤原「降りろ。」

雪樹「夜景、なかなかキレイですね」

赤原「お前ほんと緊張感ないな…お前今から海に沈められるんだぞ

?死ぬんだぞ?怖くねえのかよ」

雪樹「別に怖くないですよ。そりや色々とやりたいこととか後悔はあると思いますけど、死んだら関係ないですからね。怖いと思うくらいなら楽しいこと考えておけばいいんですよ。」

赤原「こいつ…なんか調子狂うな…おい早く縄繋げる。めんどくせえ。」

雪樹「一番面倒被つてるのは僕なんですけど。」

赤原「うるせえな…」

港の石橋の一番深いところの端に立たされ

両手を縛られ、両足に縄で重いコンクリートを繫げられた。

うまく歩けず恐らくかなり重量があるだろう

赤原「さてと。最後に言い残す言葉はあるかよ」

雪樹「そろそろ後ろ振り向いたらどうです?」

赤原「は?」

警察車両がいくつがあり

警官と片桐さんがいる

赤原「嵌めやがったな…」

雪樹「簡単なトリックです。」

赤原「まさか…あの電話…!？」

雪樹「正解。詰めが甘いですね」

赤原「ちくしょう!てめえだけでも!」

雪樹「あつ。」

ヤケになつたのか押されて海に落ちる。

(うん。確実に沈んでる。助けが来なかつたら溺れ死んでたかな)

片桐「あんたなにして!？」

男共を警官に任せて海に飛び込んできた

片桐さんは手と足の縄をナイフで切つた。

(これで楽だな)

息はまだ続いている。

水面まで結構あるけど大丈夫。

(片桐さんが逆に心配だ…)

結構苦しそうな顔をしている…

手を引いて水面まで引っ張る、

片桐さんがギリギリのところで水面まで出した

片桐「ふはあ…結構深いじやない…勘弁してよ…」

雪樹「助かりました。ありがとうございます」

片桐「涼しそうな顔してるわね…息大丈夫だつたわけ?」

雪樹「ひとまず陸に上がりません?」

片桐「そうね。」

警官達に手を借り陸に上がる。

先程の連れられた車から鞄を回収して

捕まつた赤原達のもとに行く

赤原「お前、生きてたのか」

雪樹「もう少し遅かつたら三途の川泳いでましたね」

赤原「ちつ…」

雪樹「ひとつだけ聞いてもいいですか?」

赤原「なんだよ。」

雪樹「あなたがプロダクションを恨む理由はなんですか?」

赤原「…ファンだったアイドルがあのプロダクションのオーディションに落ちた。他のアイドルは新人だらけで。まだアイドルを目指すかもわからない子もいた、それなのにその新人を取つて、慣れたアイドルを取らない…」

雪樹「それだけか?別に自分でスカウトだって出来ただろう?」

赤原「断られたんだよ、一回落ちたなら別にいいと。他の事務所に行くとな。」

雪樹「それならそれで仕方ないだろう」

赤原「どうしてもそのアイドルが輝く場所を自分で作りたかった…一緒に仕事をして。ファンを増やして。そうしたかったんだよ、でもそれも叶わなかつた。だからヤケになつたんだよ」

雪樹「そうか。それだけなんだな」

赤原「ああ、それだけだよ。」

雪樹「まあ、残念だつたな、としか言えないな。まあ、しつかり処

罰受けて反省しな。うまく行かないことだつてあるよ」

赤原「…わかつたよ…」

片桐「連れて行つて。」

赤原達は警察に連行されていった。

雪樹「片桐さんこれ。寒いでしょう」

置いてあつたコートを渡した

片桐「あなたも寒いでしょう。」

雪樹「わざわざ助けに来てくれたお礼ですよ。コートは濡れてない
ので」

片桐「わかつたわありがとうございます」

雪樹「今度事務所に来たときにはオフィスに返してくれればいいで
す。」

片桐「帰りは宛ある？」

雪樹「この付近なら交通は問題ないですけどね」

片桐「せつかくだから送つていくわ」

雪樹「お世話かけてすいません。」

片桐さんの車で家まで帰った。

雪樹「この辺で大丈夫です、ほんとお世話になりました。」

片桐「一件落着ね。前任つて例のストーカーと繋がつてたんですね？」

雪樹「ええ。帰り際に誘拐されましたよ。」

片桐「あなたも冷静ね。普通ならあの状況は怖いはずよ。」

雪樹「僕はあの程度なら別に怖くないです」

片桐「そう、メンタルがよく育つてるわ。それじゃ帰るから。明日

コート返しに行くわ。」

雪樹「はい、お疲れ様です。」

家に帰ると

全身が濡れ氣味なのが兄貴夫婦に心配された

一連の話をして尚更相当心配された…

まあ、誘拐されたから当たり前だけど

……

翌日、出勤してオフィスに行くと…

ちひろ「プロデューサーさんおはようございます」

雪樹「あの…集まりすぎじゃないですか…?」

何人かのアイドル達が居る

見覚えのない子もいる

ちひろ「プロデューサーさんが誘拐されたって聞いて。無事だつたって話から皆さん確認するために集まつたんですよ」

杏「一日で解決するとか話が早すぎない」

雪樹「いやあの…無事だつたからいいと思うんだけど…?」

卯月「皆さん心配だつたみたいですよ」

雪樹「初めて会う子もいるね」

ちひろ「それだけ皆さん新しいプロデューサーに期待してるんですよ。」

雪樹「それはありがたいけど…視線が多い…って待つた。ちひろさん一つ聞いていい?」

ちひろ「何でしよう」

雪樹「大体の予想はつくけど。僕が誘拐されたって話はどこから?」

ちひろ「早苗さんですよ?」

片桐「あ、プロデューサーおはよう! コート返すね、おーみんな集まってるねえ!」

雪樹「片桐さん…昨日の話どうやつて広めたんですか…」

片桐「グループチャットだけど?」

雪樹「やっぱりそうですか…前任のこともありますが。話す必要なかつたと思いますよ…?」

片桐「新しいプロデューサーの事だから。お知らせとしてもね。」

雪樹「軽い話ではないんですけど…まあ大事には至つてないです。いいか。」

渋谷「久しぶり、でいいのかな。」

雪樹「ああ、あのときの。」

渋谷「アドリブびつくりしたと思うから。申し訳ないかなつて。」

雪樹「いいよ。放つておけない性格だし。この前も言つたけど。結果的には止めに入つただろうから。」

渋谷「改めて、ありがとうございます。」

雪樹「これから、よろしくお願ひしますね。」

???「この人が新しいプロデューサー？」

渋谷「この前助けてくれたつて言つてたのはこの人だよ」

本田「おおー！噂のヒーローだね！私は本田未央。よろしくね！プロデューサー！」

雪樹「僕は松谷雪樹、こちらこそよろしくお願ひしますね。まあ、ヒーローって程でもないけど。」

渋谷「でもまさか、本当にプロデューサーになるなんて思わなかつたよ。」

ちひろ「そういえば、プロデューサーさん宛に専務から書類が届いてますね。」

雪樹「専務から？」

渡されたのは明日の打ち合わせの資料だつた

丁度確認しようと思つてたところだつたから探す手間が無くて済んだかな

雪樹「このビル：あれ、あいつの所と同じか」

ちひろ「打ち合わせ先、何かあるんですか？」

雪樹「友人が確かこのビルにある事務所で働いてた氣がするんですけど、まあ多分ですけど。」

ちひろ「会えるといいですね。」

雪樹「まあ、会えたらね」

白菊「あの、プロデューサーさん、今いいですか？」

雪樹「白菊さんどうかしました？」

白菊「あの、明日のことと相談があつて。」

雪樹「相談？舞台演技のこと？」

白菊「えつと、その舞台演技をするイベントが延期になつてしまつたので明日は予定が無くなつてしまつたんです。なので明日の打ち合わせに参加しても大丈夫なのかなと思つて。いいでしょうか？」

雪樹「イベントが延期になつた理由も気になるけどまあ、そういうことなら大丈夫だよ。場所もわかつてゐるし。午後からだからある程度時間に余裕もある。」

白菊「ありがとうございます。」

雪樹「これ、時間と場所だけメモしておいて。まあ事務所の近くだし一度集合してから向かうでもいいけど。」

白菊「むしろそのほうがあります。」

雪樹「それなら、そうしようか12時にプロダクション前に集合かな。」

白菊「わかりました。12時ですね。」

雪樹「遅刻しないようにね。」

白菊「はい、早起きして来るので、多分大丈夫です！」

雪樹「さてと。」

プロデューサー机に座ろうとしたとき

机の下から視線を感じた。

森久保「あ、おはようございます…プロデューサーさん」

??「お、おはよう…初めまして。」

雪樹「初めまして、えつと、机の下は集会する場所じゃないんだけどな。」

輝子「私は、星輝子、ここで、キノコを育てるんだ。」

え…キノコ…？なんで？

というか、机の下が…

雪樹「なんていうか…もう…いや、いいや、松谷雪樹だよ、よろしくね。」

輝子「うん、よろしく。」

雪樹「机の下には本を読む少女とキノコを育てる少女か…」

森久保「今日はたくさんの方がいるので…」

輝子「キノコは暗くてジメジメしたところが好きなんだ…フヒ…」

雪樹「わ、わかつたよ。」

??「レッスンルームにいないからこっちを探しに来たけど…」

また一人、オフィスに少女が來た。

独特なファッショニ・眼帯?

怪我でもしてるのかな

?? 「乃々と輝子はまた机の下なのか?」

雪樹 「うん、二人ならここにいるよ」

?? 「やつぱりそうなんだなー、って待った、お前誰だ!」

雪樹 「新しいプロデューサーの松谷雪樹だよ、今後、よろしくお願
いしますね。」

早坂 「ウチは早坂美玲だ、新しいプロデューサーってことは前の人
はやつぱりやめたんだな。嫌いだつたから良かつたけど。」

雪樹 「眼帯、目を怪我してるの?」

早坂 「ファッショニだ! 怪我をしてるわけじゃないぞ?」

雪樹 「そう、ファッショニね」

うん、それなら大丈夫だな。

ファッショニに眼帯もまた独特な…

早坂 「おいー、乃々一輝子ー、いつになつたら練習開始するんだ
よー」

森久保 「演劇なんて…恥ずかしいです…」

輝子 「ぼののちゃん。私も行くから。ほら。」

森久保 「も、もりくばに王子様役なんて…に、似合わないですから

⋮

早坂 「それじゃあ、お姫様役がいいか?」

森久保 「うう…それはもつとむりいー…」

輝子 「ぼののちゃんが王子様。ちょっと、見てみたいかな」

森久保 「弱腰の王子様なんですけど…」

早坂 「ほーら。早く行くぞ!」

早坂さんが二人を机の下から引つ張り出そうとする

森久保 「あう…美玲ちゃん、引っ張らないで…」

雪樹 「森久保さん、頑張つておいで。」

森久保 「はい…」

三人はオフィスを出ていった。

雪樹 「さて。今日はどうしようか…」

初めての仕事を明日から。

次の仕事をもらうのも自分にはまだ負担が大きいかも知れないふと視線を窓に向けると

事務所の庭先が見えた。

晴れてるし散歩でもするか

雪樹「ちひろさん。少し席を外しますね。何かあれば電話してください」

ちひろ「はい、いつ頃戻りますか？」

雪樹「昼前には戻りますよ」

ちひろ「わかりました。」

オフィスを出て。庭先で軽く散歩するベンチに一人の少女が居た。絵を描いているみたいだ

雪樹「こんにちは」

少女「あつ、えつと…」

雪樹「ああ、ごめん邪魔したかな」

少女「すぐ片付けますから…」

雪樹「いやいや、そのまま描いていいよ、邪魔してごめんね」

少女「でも…事務所の中では絵は駄目って…」

雪樹「それは、誰から？」

少女「誰つて…プロデューサーさんが…あれ…あなたは？」

雪樹「僕は松谷雪樹、新しいプロデューサー、多分前任から言われたんだよね」

少女「えつと…そうです…」

雪樹「もう前任はいないから。好きに描いていいから。」

少女「そうなんですね…ありがとうございます」

雪樹「名前、聞いてもいいかな」

成宮「私は成宮由愛です。」

雪樹「成宮さんもアイドルなんだよね。」

成宮「はい、えつと…絵も好きで」

雪樹「絵を描くのが好きなんだね。見てもいい？」

成宮「えっと…笑わないでくださいね…」

見せてもらつたものはどれも風景画だつた。
色の明暗や彩度が上手く塗られていて

その場の風景をしつかりと書き写している

雪樹「とても上手だと思うよ、風景画が好きなんだね」

成宮「人や動物は動いたりするのでちょっと難しいですから…」

雪樹「確かに人を絵に描くのは難しいね、僕は絵心がないから全く無理だけど、写真くらいなら」

成宮「綺麗な写真を取るのも難しいと思います…」

雪樹「そうだね。慣れるまで時間かかったよ。でも楽しかつたかな。」

成宮「今はもう辞めたんですか？」

雪樹「学生の頃だけ。今はカメラに触れる事も無くなっちゃって。妹にあげたから。」

成宮「そうなんですね。なんかもつたいないような。」

雪樹「仕事してると、そんな暇が無くなっちゃうから。」

成宮「でも妹さんが持つてるんですよね」

雪樹「そうだね。まだ壊れてなければ」

成宮「私は一人っ子だから：兄妹と共有とかしたことない…」

雪樹「それが悪いことでもないけどね。使いたいときに使えなかつたりするし。」

成宮「でも兄妹はほしいかな…」

雪樹「今は、兄妹みたいな仲間が居るよね。」

成宮「はい。だから寂しくありません。いつか皆さんのが集合絵を描いてみたいですね。」

雪樹「良い夢だと思うよ。それじゃ、そろそろ行くかな。またオフィスに来たときはよろしくね。」

成宮「はい、ありがとうございました。今後共よろしくお願ひします。」

会釈をして少し散歩をしてオフィスまで戻る
さつきとは人が変わつてゐる気がする。

何人か見覚えのない子もいる。

雪樹「戻りました。」

ちひろ「おかえりなさい。プロデューサー」

雪樹「何人かまた、初めましての子が居るね、でも…このピンク髪
……」

この。ピンク髪…それに髪先に少し水色…

あれ：何処かで見たような：

ちひろ「夢見さんですか？」

夢見「え？ なにぼくがなんかあつた？」

あ、わかつた。CDショップの時の

雪樹「ああ…あの時の…」

夢見「えっと…ぼくは見覚え無いよ？」

雪樹「CDショップ、卯月さんのアルバムの限定版の時、覚えてま
すか？」

夢見「ん…あ！ 思い出したー！ あの時の優男みたいな人！ え、ま
さか新しいプロデューサーだつたの!?」

雪樹「だつた、というより、最近プロデューサーになつた。だね」

夢見「なるほど…？ えっと、ぼくは夢見りあむだよ、えーと、アイ
ドル好きのオタクって言えば、なんとなくわかつてもらえると思う。」

わかりたくないけど

わかる。元オタクだつたから

雪樹「オタクっていうのを自分で言うのか…」

夢見「オタクはオタクだから。そこは否定しない！」

雪樹「あ…そう…」

個性的な子、ほんと多いな…

ちひろ「お昼どうされますか？」

雪樹「お腹減つてないし、まだいいかな。」

ちひろ「私は社会食堂行つてくるので。少し席を外しますね。」

雪樹「わかりました」

特にお腹は空いていない、

戸棚からプロデューサーマニアアルを取り出して眺めていた。

?? 「初めまして、でいいかな」

雪樹 「ん?、ああ初めまして。松谷雪樹、新しいプロデューサーだよ、今後よろしくお願ひしますね。」

関 「私は関裕美。えつと。よろしくお願ひします。」

一言挨拶を交わすとまたマニュアルを眺めていた。

関 「えつと、ちょっとといいかな。」

一旦手を止める

雪樹 「なにかな?」

関 「ほたるちゃん明日舞台演技のはずだつたんだけど。さつき中止になつたつて聞いたんだよね。何か理由知つてるかなつて」

雪樹 「その件に関しては僕は知らないんだ。多分専務が担当していると思うんだけど。本人に聞くか専務に聞いてみて。」

関 「そつか、プロデューサーさんなら何か知つてるかと思つたけど。」

夢見 「つい最近来たばかりでしょ、まだ仕事の事とかわからないと思ふけど。どうなの?」

雪樹 「まあ実際、昨日始めて仕事振られたばかりだし。わからぬ事だらけだね。」

関 「あつ、そうだつたね……なんか失礼だつたかな。」

雪樹 「ううん、気にしなくていいよ。」

関 「ちょっとほたるちゃんに聞いてみるね。それじゃ、また今度。」

雪樹 「うん、お疲れ様」

裕美さんがオフィスから出て行つてから
またマニュアルを眺めていたが。

ちよつと眠たくなつてきた：

雪樹 「そうか……そういうば、まだ休んでないな」

マニュアルを閉じて少しほーつとしている。眠気に負けてしまつて。

椅子に座つた姿勢のまま寝てしまつた。

夢見 「あれ、Pサマ居眠りしてる。毛布あつたかな。」

少し暖かさを感じたのは多分毛布のおかげだと思う。

ふと気がつくと。

暗い森の中にいた。

(ここは?)

見ええない森

少し歩くと。

開けた場所に出た。

そこには。赤い花・曼珠沙華が沢山咲いて。
その中に一人の少女が居た。

(この風景・あの時の…)

いつか見た雑誌の風景。

あの少女の名を思い出せない。
確かに花の名前の少女だったはず。

少女は振り向くことはせず。

一輪の曼珠沙華を摘み取り。

木々から漏れる僅かな陽の光だけを眺めている…

(…彼女は…)

そうだ。思い出した。

(白菊ほたる…)

名前を思い出すと。

目の前が暗くなり

不意に体の力が抜けて

倒れた感覚を味わった瞬間に気を失った

…

雪樹「あつ…寝てたのか…」

不思議な夢を見てた気がする…

あと、お腹空いた。

ちひろ「まだ休み取つてなかつたですよね?明日は…打ち合わせでしたね。」

雪樹「まあ打ち合わせの翌日にも、」

ちひろ「はい。無理しないでくださいね。」

雪樹「お気遣いありがとうございます」

夢見「あ、Pサマ起きた？」

雪樹「ああ、毛布かけてくれたんだよね。ありがとうございます。」

夢見「まあ、この時期に居眠りは風邪ひくし。今風邪引かれても困るし？」

雪樹「まあ、そうだね。」

ふと時計に目を向けると。

夕方になっていた。

雪樹「4時間位寝てたのか？」

ちひろ「よく座つたまま寝れますよね」

夢見「首痛くなるでしょ。」

言われてみれば少し首が痛い

雪樹「座つた姿勢で寝るのは昔よくあつたからね。」

夢見「もしかして、学校の授業とか居眠りしてた？」

雪樹「割と居眠りしてたかな。」

ちひろ「私も居眠りくらいはしてましたけど。」

雪樹「まだ眠たいし。明日は初営業だから先に帰ります。お疲れ様でした。」

夢見「お疲れ様」

ちひろ「お疲れ様です。」

事務所を出て帰路を歩く。

そう思えば。連日ストーカーを気にしていたから。何もない帰宅というのは割と気が楽だった。

帰つて食事を済ますと。

眠たかつたのですぐ寝た。

……

ふと目が覚めて窓に目を向けると。

青い月が見えた。

(懐かしい…けど思い出したくはなかつたな)

ある知り合いが亡くなつた日の夜

あの日も青い月だつた気がする。

一つの不幸

⋮

学校の駐輪場。

一組のカツップルが居た。

「呼び出して来て何だつた？」

「プレゼント。これ」

少年が少女に渡した小箱。

中身は⋮

「手袋！いいの？」

「手作りじゃないけど、もしよかつたら。」

「ありがとう！」

「それじゃ、バイトあるから。また後で」

「うん、また後で電話してね！」

少年はマフラーをして自転車に乗り
帰路に向かう

⋮

肌寒さを感じて、目が覚めた。

朝はもう十分寒い。

今日は少し厚着した方がいいだろうか。
(懐かしい感覺の夢だつたか?)

なんとなく感じたことのあるような夢
ただしつきり覚えていない。

(まあ、いいか)

身支度をして家を出て

プロダクションに向かう。

10時頃、オフィスに着いた。

雪樹「おはようございます、ちひろさん」

ちひろ「おはようございます、今日はドラマの打ち合わせでしたよね。」

雪樹「そうですね。午後からなので少しゆっくりしてから向かいます。」

ちひろ「わかりました」

今日はアイドルの子は誰も来てないみたいだと。思つて いたけど。

デスクの下の住人達は居た

雪樹「二人ともおはよう」

輝子「あ、おはよう、プロデューサー」

森久保「お：おはようございます…」

キノコを育てる少女と本を読む少女。

ただし、プロデューサーデスクの下で。

雪樹「二人は昨日、演劇の練習してたよね。」

森久保「そうですね…幼稚園や小学生向けのイベントがあつて…そのイベントの演目にはゲスト参戦する形なんですけど…」

輝子「ぼののちゃん。王子様だね。」

森久保「うう…もりくぼが王子様役はおかしいと思うんですけど

⋮

雪樹「何の劇をやるの？」

輝子「シンデレラ。王道のお話だけど、主催の人アレンジしてるんだ。」

雪樹「アレンジ。どんな感じに？」

森久保「本来はシンデレラのお話なんですが…これは王子様のお話みたいですね」

雪樹「王子様のお話？」

森久保「えっと…王子様の名前が、プリンスチャーミングで…」

輝子「舞踏会の前のお話を王子様側でやるんだ。」

雪樹「なるほどね。」

森久保「最後にはシンデレラのお話と変わりませんけど…なんで森

久保が王子様役なんですか…」

輝子「シンデレラ役、やりたい子も多かつたし、妖精役も人気だつたよ」

雪樹「そう考えると。普通のシンデレラよりも役の量が増えるのか？」

輝子「そうだね、確かに多かつたはず。」

??「もー…またこつちに居るな？」

聞き覚えのある声。

オフィスの入り口に目を向けると

早坂さんが居た

雪樹「おはよう。」

早坂「お、おはよう…」一人はまた机の下に居るのか？」

雪樹「うん。居るよ。」

早坂「ほら、今日も練習するぞー。今度からはレッスンルーム集合だぞ！」

森久保「ま、まだ集合時間まで少し時間が…」

早坂「乃是メイソンの役なんだから、しつかり練習しないと本番間に合わなくなるぞ！」

雪樹「頑張つておいで、森久保王子。」

森久保「うう…プロデューサーさんまで…」

三人はオフィスを出てレッスンルームに向かった。

ちひろ「三人とも頑張つてますね。」

雪樹「あの三人は仲良いね」

ちひろ「三人はユニットでの活動もありましたから。」

雪樹「そうなんですね、あの個性的な子たちのユニットか。」

ちひろ「今度調べてみてください。」

雪樹「ええ、そうします。」

まだ出発まで時間があるので

いろんなアイドルの自己紹介カードを見ていた

??「あ、あの…おはようございます」

入り口に目を向けると見覚えのある子がいた

雪樹「おはよう。えっと成宮さんだったかな」

成宮「はい、ちょっとだけ居てもいいですか？」

雪樹「構わないよ。ゆっくりしてね」

成宮さんは机の前のソファに腰掛けると絵を描き始めた。

それから一時間ほど経つただろうか

成宮「あの…プロデューサーさん。」

雪樹「なにかな？」

成宮「や、やっぱり何でもありません。えっと、また今度来ますね」

雪樹「うん、またね。」

何か言いかけて、オフィスを出ていつしまった。

それからまた自己紹介カードを眺めていたら12時近くになつて
いた。

雪樹「白菊さんまだかな」

と、思つていたらオフィスの扉が開いた

白菊「あの…おはようございます」

雪樹「おはよう。そろそろ向かおうと思うけど大丈夫かな？」

白菊「はい大丈夫、です。」

雪樹「うん、それなら行こうか、ちひろさん、頼みますね」

ちひろ「お気をつけて。行つてらっしゃい」

オフィスを出て事務所を出る。

玄関前で女性に会つた

??「あら、ほたるちゃん、おはようございます。」

白菊「茄子さん、おはようございます」

??「お仕事ですか？頑張つてくださいね。あと。隣の方が新しいプロ

ロデューサーさんですか？」

雪樹「はい、松谷雪樹です。今後共よろしくお願ひします」

茄子「私は鷹富士茄子。こちらこそよろしくお願ひしますね、プロ

デューサーさん」

挨拶を交わすと鷹富士さんは事務所に入つて行つた。

雪樹「知り合いの人かな」

白菊「えつと、茄子さんとはユニットを組ませてもらつてしまして…」

雪樹「なるほどね。また調べておくよ。」

白菊「はい。」

事務所の敷地を出て目的のビルまで向かう。
遠く離れてるわけではなく

同じ町内…というか市内と言ったほうがいいかな、歩いていける距離にある。

途中話をしながら歩いた

白菊「プロデューサーさん。初めてのお仕事なんですね…」

雪樹「そうだね、仕事っていうと、今も仕事をしてるから…初めての営業だね。」

白菊「初めてだと不安だつたりしないですか？」

雪樹「不安というか少し緊張はしてるかな。」

白菊「ですよね…上手く行くといいな…」

雪樹「楽しんでいたら、きっと上手く行くよ」

白菊「そうですね…楽しんで、ですね。」

会話の途中。

何かおかしな風景が目に映つた。

雪樹「あれ…さつきの車」

(向かいから走つてきた車…向かい？車道は左車線だから…というこ
とは…逆走？)

考えていたその一瞬の後

大きなクラクションの音が響いた

雪樹「なつ！」

振り向いたその先にはもう目の前まで車が来ていた

おそらく逆走車を避けようとした車だろうが、そんなことを考える

余裕もなかつた。

雪樹「ごめん！」

白菊「ひや…」

一瞬の判断で、白菊さんを突き飛ばした

運が良かつたのか白菊さんは同じ道を歩いていた女性に受け止め
られているが…

雪樹「くつ…う…」

私は…車に跳ね飛ばされた…

白菊「ふ…プロデューサーさん！」

衝撃のショックからか

すぐには言葉が出ず、動けない

白菊「す…すぐ救急車呼びます！」

白菊さんが電話越しに話しているが…

衝撃のショックのせいいか会話がよく聞き取れない…

白菊「プロデューサーさん…すぐに救急車来てくれますから…だから…」

動かそうとと思った右腕に感覚がない。

からうじて動く左腕で持っていたカバンから資料の纏まつたファイルを取り出し、白菊さんに渡そうとする…

雪樹「まだ…間に合うと思うから…」

白菊「えつ…そんな、置いていけないです…！」

雪樹「大丈夫…だから行つて…」

白菊「で、でも…！」

?「馬鹿な人ね。」

別人の声：誰だろうか…

白菊「せ、先輩!どうして?」

元先輩の女性「どうしても何もさつき受け止めてあげたじやない。まあいいわ。あんた仕事があるんでしょ。」

白菊「そ、そうですけど…でも…」

元先輩の女性「早く行きなさいよ。じゃないとその仕事、私が貰うわよ。」

白菊「えつと…」

元先輩の女性「救急車呼んであるんでしょ。あとは任せなさい。いいから早く行つて。」

白菊「あの…！ありがとうございます！」

白菊さんは走つて行つた。

元先輩の女性「この状況で仕事の話するなんて貴方も考え方のよ

雪對

雪樹「…君は…どうして…」

元先輩の女性「ほたるの知り合いってだけよ。でも噂は聞いてるわ。最近、ほたるの事務所に新しいプロデューサーが入つたって、別事務所の知り合いが言つてたわ」

には居られないの。どつかの誰かさんのせいよ。」

雲樹一ありかとく

数分後 救急車が着く前に意識を失つてしまつた。

元先輩の女性「ほたるも運がいいのか悪いのか。どつちかしらね。」

白菊「えっと……」のビルの16階……

資料の情報をもとに打ち合わせの場所に向かつた……

恐る恐る扉を開けると…

斎藤「あ！白菜さん？！今田

白菊 「あ、あの⋮」

斎藤 「どうかされましたか？あ、あれ、プロデューサーさんが居ま

七
人
方

白菊一ノ口テニリヤーさんか三井の三ノ口テニリヤーさん三ノ

斎藤「アーティザンに何かあつたみたいですね？」

斎藤 「事故に?! とりあえず事務所に連絡を。」

• • • • •

右腕と左足に痛みを感じた。

(ああ…そうだ…車に跳ねられたんだな。)
薄っすらと思い出してきた。

あのとき白菊さんだけでもと思つて突き飛ばした。

その後、避ける暇もなく突き飛ばされた。

体を起こそうとすると。

全体的に痛い。

痛い。

もうそれに尽きる。

目を開いても動く気になれない。

目の前に広がるのは病室の天井…

雪樹 「病院か…久しぶりだな…」

あのときはまだ小学生だつたか。

…まあ昔のことなんていいか。

利き手を怪我するなんて不便だろうな…

足は…どうにでもなるか。

車椅子でも松葉杖でも。

微かな痛みを感じて左手で頬を触ると。
ガーゼで止血されていた。

雪樹 「顔にも傷か…まあ俺はいいか」

アイドルに傷なんて負わせられないしな

…取り留めもなく色々と考えていると病室の扉が開いた。

? 「目が覚めたんだね」

雪樹 「はい。」

白い衣服の若い女性…

担当の看護師だろうか。

真壁 「私が今後君の治療の担当をする。医者の真壁だ、今後宜しく
頼むよ」

看護師じやなかつた。

雪樹 「松谷雪樹です。宜しくお願ひします。」

真壁 「怪我の状態を話してもいいかな?」

雪樹 「はい。」

…

大きな怪我としては

まず右腕、二の腕の骨折。

丁度真ん中辺りだろう。

複雑骨折してるわけではないよ。

次に左足。

ふくらはぎの骨折もしてる。

これも同じく複雰骨折ではないが

同じふくらはぎで別の場所にヒビが入っている。

無理に動かせば両方共痛むだろう。

あと細かい所でいくつかの切り傷擦り傷

偶然にも頭部の怪我は頬のそれ以外にない

不幸中の幸いと言つたところだろう。

普通、車に轢かれたら頭部は強くぶつけて怪我することが多い
最悪の場合、後遺症が残ることだつて有りえる。

……

真壁 「こんなところだ。」

雪樹 「大方は想像がつきました。」

真壁 「安静にしたまえ、それしかない」

雪樹 「わかりました。」

真壁 「少し余談だが、君は美城さんのプロダクションの新任だそうだな」

雪樹 「ええ、よくご存知ですね。」

真壁 「美城さんとは訳ありの知り合い同士でね。直接頼まれた」

雪樹 「美城さんから？」

真壁 「彼女は今頃、事務所に戻つてるだろうね、忙しそうにしてた

よ」

雪樹 「ドラマの打ち合わせどうなつたかな…」

真壁 「隣りに居たアイドルを助けたそうじやないか。自分は犠牲になつたけど

雪樹 「これしかありませんでした」

真壁 「そうか。君が後悔していらないのなら別にいい。完治までとは言わないが。私生活に戻れる所までは大人しくするのがいいだろう。

君、車は乗るか？」

雪樹 「免許はありますけど、通勤はバスとか電車で」

眞壁「私生活に戻れたらそれでもいいが、せめてタクシーが望まし

いぞ。

雪樹 「わかりました。」

真壁 「それじゃあ、私は他の患者のところにも用事があるから。ま

た今度様子を伺うよ」

雪樹
——はい、ありがとうございました。」

真壁さんか病室を出でていつた

河合仙人

花瓶が置いてあつて戸棚の足元に鞆。

鞆から携帯電話を取り出そうと

兄貴からの電話、数回不在になつてしまつて、ハル…掛けてみるか。

• • • • •

雪樹「もしもし？」

長男一派の雪舟が、今に至るまで、
かなり集つて、いふ様な「ゾゴ

雪樹「えつと、病院、かな。」

長男 どこの病院だ？近くのとこか？

雪林一矢前漢に之の事也

雪樹 「うーん、巻き込まれたの方が正しいかな。」

長男一と二女にしても車に轢かれるんじや怪我してるんだろ
大丈

夫なのがよ

雪樹「右腕と左足を骨折くらいたから大事には至ってないよ。」

雪樹「まあ、車で樂かるべつ、芝から

長男 「近いうちに見舞いに行く。今日はもう遅いだろうから。」

雪樹 「ああ、また今度で。」

窓の外は月が見える。
よく晴れる。

また取り留めもなく考えていた。

次第に睡魔に負けて眠った。

⋮⋮⋮

「そんなこと聞かれたくなかった」

⋮ならなんで。

「もういいよ、早く帰つたら? どうせまた勉強ばつかするんでしょ?」

そうだな…もう帰ろう。

⋮⋮⋮

昔の夢か⋮⋮⋮

陽の光が程よく差していた

朝だろう。

この狭い病室だとあまり関係ないか⋮⋮⋮

携帯電話から音楽を流す⋮⋮⋮

お気に入りの曲。

気持ちが落ち着いた時に聴く曲

気が高揚しそうな曲

落ち込んだ時に聴く曲

ランダム再生で流し始めた一曲目

ある曲が流れ始めた。

雪樹 「この曲⋮⋮⋮

「谷の底で咲く花は」

白菊さんのソロソング

最初は知り合いに誘われて聞いただけの曲

⋮⋮⋮ある花の歌

改めて聴くと色々と考えさせられた。

雪樹 「そうか…今までのこと。思い返してしまった。」

⋮⋮⋮

聴き入っていると。

涙が流れていた。

雪樹「…涙なんて久しぶりだな…」
曲が終わつて別の曲が流れていた、
しばらく色々な曲を聴いていた。

聴き入つていると、

病室の扉をノックされ。

音楽を止めた。

看護師「朝食持つてきましたよ。」

雪樹「ああ、ありがとうございます」

看護師「食べ終わつたらベルで教えてくださいね。」

そう言つて病室から出ていった。

雪樹「いや…左手で箸なんて普段持たないからな…」
慣れない手つきで箸を持つて食事を取る、

一頻り食べ終わり、ベルを鳴らした。

呼ばれてきたのは先程とは違う看護師だつた。

看護師「ああ、朝食の片付けですね。」

雪樹「ええ、お願ひします。あと…」

看護師「はい？なんですか？」

雪樹「次からフォークとかも一緒に用意してもらえませんか？利き
手が使えなくて…」

看護師「そういうことならわかつたわ。配膳係に行つておくわね。」

雪樹「ええ、頼みます。」

看護師は部屋を出ていった。

…うん…暇だな。

時間は10時頃。

日も上がつてきてる。

連休も終わつて事務所にも来る子達は減るだろうな。

まあ…私はしばらく病院暮らしだが…

携帯電話も充電器が用意されていたから十分に使えるとはいえる。
あまりやることはない。

そういうえばと思ひ鞄を眺めると。

破れていたり削れていたりと。

使い物にならなくなつていた。

雪樹「仕事辞めてから新調したのに、もうだめになつたのか…早いな…」

取つ手が引き千切れている。

雪樹「物持ち、いい方なんだけどな。仕方ない。」

仕方なく諦めて

事務所に連絡することにした。

……

ちひろ「はい。346プロダクションのちひろです。」

雪樹「あ、ちひろさん、おはようございます。松谷です。」

ちひろ「プロデューサーさん?えつと…大丈夫でしたか?」

雪樹「なんとかね。骨折したくらい済んでるよ。」

ちひろ「そうなんですね…良かつた…でもしばらく入院ですよね。」

雪樹「そうですね。いきなりで申し訳ないです。すぐには復帰できそうにないです。」

ちひろ「わかりました。お大事になさつてください。」

雪樹「ええ、あと、ほたるさんの出演するドラマの話つて何か聞いてますか?」

ちひろ「それに関しては専務が引き継ぎました。ほたるさんから連絡があつて、専務が私が請け負うつて。」

雪樹「やつぱりそうなつたんですね。わかりました。」

ちひろ「専務も心配されてるみたいですね。」

雪樹「わかりました。後で連絡してみます。」

ちひろ「そうですね。」

雪樹「それでは。また何かあれば連絡しますね」

ちひろ「はい、また今度。」

……

専務が引き継ぎしてくれてるなら心配はないか。

：ほんと何もない、やることがない。

外の空気が吸いたいな。

歩くことも今はままならないだろうけど。
さつきの看護師が気を利かしてくれたのか
窓を開けてくれている。

少しばかり外の空気が入ってきてているが
なんなら風も感じたいくらい。

雪樹「もう少し寝るか…」

少し考え方をしながら横になると
丁度良く眠気が来て寝入った。

⋮⋮⋮

少年「ほんと。悪人扱いされるの何回目だろうな」

友人「別に間違つてないと思うんだけど」

少年「誰かに擦り付けないと気が済まないんだろ。」

友人「何も悪いことしてないでしょ。」

少年「まあ、誰も悪くないし。あえて悪人として見るなら担任だ
ろ。」

友人「まあ、済んだことだしいいじゃん。」

少年「俺の印象はどんどん悪くなるけどな」

友人「わかってる人もいると思うけど」

少年「今更だけどな」

⋮⋮⋮

色々と夢を見てしまう

もう…慣れだ。

扉の開く音でしつかりと目が覚めた。

看護師「お昼お持ちしましたけど。どうされますか？」

雪樹「ありがとうございます。食べられる分だけ食べます。」

看護師「また呼んでくださいね」

今度はフォークのスプーンも用意されていた。

不思議とお腹は空いている。

昔からだが消化が早いのか吸収が早いのか

すぐに空腹になることが多い。

特に多かつた訳ではないが。

全部食べた。

看護師を呼び片付けてもらう。

そしてまた手持ち無沙汰になる。

雪樹 「まあ、安静にするのが一番だろうしな。」

以前呼んでいたインターネット小説のサイトを眺めていた。

懐かしいな。

一時ハマったネット小説。

長期連載を眺めていたときもあつた。

久々だからか長く読み続けていたら。

病室の扉をノックする音が聞こえた。

雪樹 「どうぞ。」

白菊 「あの…」

森久保 「事故に巻き込まれたって聞いて…心配で…」

入ってきたのは白菊さんと森久保さんだつた

雪樹 「ここにちは。2人とも仕事はうまく行きそう?」

森久保 「もりくぼは…まあそれなりに…」

白菊 「えつと。多分大丈夫だと思います。」

雪樹 「専務が引き継いでくれたんだよね。」

白菊 「はい、資料とか読んで話もしつかり聞いてました。がんばります」

雪樹 「よかつた。頑張つてね。」

白菊 「はい。あと…あの…」

雪樹 「どうかした?」

白菊 「事故のこと…不幸に巻き込んでしまつたのかなつて思つてしまつて…ごめんなさい」

白菊さんは謝ると頭を下げた。

雪樹 「別に白菊さんのせいじやないよ。運が悪かっただけ。」

白菊 「でも…」

雪樹 「そうだね。敢えて言うならこれは君の不幸に巻き込まれたん

じゃない。これは僕の不幸だよ。君は謝る必要はない。」

森久保「プロデューサーさん…不幸？」

雪樹「そう。例えば僕が事故に巻き込まれたのを君のせいにするなら。君の不幸に巻き込まれたって言うかもしれない。でもね。別に君が何かした訳でもない。僕が君を責めている訳でもないよ」

白菊「私…本当に悪くないんですか…」

半泣きで俯いてしまった

雪樹「ちょっと強く言つてしまつたかな。」

その時また病室の扉が開いた。

あれ、ほたるちゃん泣いてるの？」

??「半開きだけど…あ、ほたるちゃんとののちゃんやつぱりいた。

雪樹「あ、初めまして。松谷雪樹です。」

関「えつと。初めまして。関裕美です。」

ん？睨まれてる？気のせい？

森久保「裕美さん…目つきが…」

関「え？あ、ごめんなさい。わざとじやなくて」

雪樹「ああ、大丈夫だよ。」

関「ところで、どうしてほたるちゃんは泣いてるの？」

雪樹「えつと…」

森久保「プロデューサーさんが事故に巻き込まれたのを、ほたるちゃんが謝つて…でもプロデューサーさんはほたるちゃんのせいじやないって言つて…」

関「あ、この人がこの前言つてたプロデューサーさんなんだね。」

雪樹「しばらく事務所には行けないけど、よろしくね。」

関「そつか。それで事故に巻き込まれたつてことなんだね。」

森久保「ほたるちゃん…？大丈夫ですか？」

雪樹「言い詰め過ぎたかも知れない。申し訳ない。」

関「もしかして。ほたるちゃんまだあの人の言つてたこと気にしてるの？」

白菊「あの人は悪くないんです。やっぱり私が…」

関「ほたるちゃん。もうやめなよ。あの人が悪かったんだよ？」

雪樹「赤原さんのことかな」

関「えつとね。ちよつと前のロケで私とほたるちゃんが参加しているユニットのメンバーで撮影があつたんだ。それでその時、あの人は寝坊したり。現地に行く電車間違えたり。それをほたるちゃんのせいだつて言つたの。」

雪樹「ただの八つ当たりじゃないか。酷いな」

関「そうだよね。ほらやつぱりほたるちゃん悪くないよ。」

白菊「うん…ありがとうございます。」

関「でも、プロデューサーさんはほたるちゃん泣かせたんだからしつかり謝つてよ?」

雪樹「いや…うん。それに関しては申し訳ないと思つてるよ。ちよつと言ひ過ぎたかもしれないかな。」

森久保「優しい言葉だつたと思うんですけど…むしろあれだけ擁護してなんで謝ることに…?」

関「あれ、ほたるちゃんを責めてるように思えたけど」

雪樹「え…責めることになるの?」

森久保「いや…違うと思いますけど…」

白菊「大丈夫です。プロデューサーさんは悪くありません。」

関「まあ。いいかな。」

いいんかい。まあいいけど。

関「すつかり忘れてた。御見舞で来ただけど。これ。」

手作り最中。生地に好きな量こし餡を挟んで食べる。

かなり前に両親が買つてきたのを覚えてる。

雪樹「わざわざありがとうございます。」

関「ののちゃんのリクエストでこれになつたんだよね」

森久保「ひ…裕美さんそれは言わない約束したじやないですか…」

関「別にいいでしょ。ののちゃんか乗り気なの少し興味あつたし。プロデューサーさんのこと少し気に入つてるんでしょ?」

森久保「え…あ…えつと…その…」

ほたる「ほ、はら、でも…プロデューサーさん片腕しか使えないで

すし。私達が作つてあげないと。」

森久保「そ、そうですね。」

袋を開けて生地とこし餡を取り出す。

森久保さんが作ったものをくれた。

森久保「あの…プロデューサーさんの分…これ…」

雪樹「うん。ありがとう」

お札を言うと森久保さんは少し笑顔になつていた。

関「(やつぱり気にしてそう。)」

白菊「(でも触れない方がいいかと….)」

雪樹「ん? 2人ともどうかした?」

白菊・関「な、なんでもない!」

森久保「このお菓子…すごく美味しいですから。是非食べてほしくて…」

生地自体も大きくなく一口サイズで、こしあんも味が濃すぎなくて食べやすい

関「この前も買つてきて食べてたね」

森久保「まあ…お小遣いに余裕があつたので…と…思つて…」

雪樹「とても美味しいよ、ありがとうございます」

森久保「よ、よかったです…」

ほたる「あ、そろそろ帰らないと。まだ宿題途中だし…」

関「私も友達にあげるアクセサリー作つてるから、先に帰るね」

森久保「あの…もう帰つてしまふんですか…?」

雪樹「用事があるなら仕方ないよ。」

森久保「そ、そうですよね…」

ほたる「それでは、お大事に…」

関「また来るね。」

二人は病室から出ていった。

少しの間、二人で何も話せないまま時間だけが過ぎた。

悩みと過去の夢

…

雪樹 「森久保さんはどうする？」

森久保 「もりくぼは…特に用事は無いですけど…」

雪樹 「レッスンは？」

森久保 「今日は皆さん別の用事があるみたいで、集まり少なくて無しになりました。」

雪樹 「そつか。」

森久保 「あの…もし良ければでいいんですけど…プロデューサーさんのお話。少し聞いてもいいですか？」

雪樹 「えつ？僕の話？」

森久保 「あの…はい…嫌だつたらいいんです…」

雪樹 「何が聞きたい？」

森久保 「えつと…プロデューサーさんお幾つですか？」

雪樹 「歳？24だよ」

森久保 「案外お若いんですね…」

雪樹 「幾つだと思った？」

森久保 「あの…それは…」

雪樹 「怒らないよ、何度も間違えられたことがあるし、」

森久保 「も、もう30くらいかと…」

雪樹 「30かく姉と同じくらいになるな…」

森久保 「お姉さんがいるんですね…」

雪樹 「姉だけじゃないよ。弟妹兄姉、全部いる」

森久保 「え…えつと…五人兄弟ですか…」

雪樹 「いや、8人だよ？」

森久保 「8人?!」

雪樹 「まあ。驚くと思うよ。でもまあ今はみんなバラバラだから。」

森久保 「兄弟多いって…大変でしたか…？」

雪樹 「そうだね、大変だったかな。」

森久保「ケンカとか…したんですね…」

雪樹「ケンカしてもすぐ親に仲裁食らうからね。」

森久保「御両親も大変そう…」

雪樹「今となつてはもう感謝の言葉すらも伝えれないか。まあ…」

森久保「え…?えっと…もしかして…」

雪樹「両親はもう居ないんだ。気にしないで」

森久保「は、はい…」

雪樹「あと何か聞きたいことある?」

森久保「えつと…今までのこととか…」

雪樹「今までのこと?うーん。ざつくりした質問だね。」

森久保「お仕事とか…趣味とか…」

雪樹「前の仕事は好きじやなかつたかな。別に仲が悪かつた訳じやないけど。自分らしくないというか。楽しくなかつた。」

森久保「それで…お仕事辞めてプロデューサーに?」

雪樹「そうだね。色々と区切りが着いたから、前職を辞めて色々と当たつてる時に、専務からの誘いに乗つた、そんな感じ。」

森久保「あの時はありがとうございました…おかげさまで…変な事に絡まれなくて…」

雪樹「まあ、専務が来てくれて助かつたかな。僕もあれは見過せなかつたけど。あのまま押し切るのは僕は難しかつただろうし。逆にアドリブ振られて正解だったかもしれない」

森久保「凛さんのアドリブ振り…自然な感じでしたよね…びつくりしなかつたんですか?」

雪樹「いや、もうびっくりしたよ。でもあの子も相当勇氣必要だつたと思うよ。知らない男性にいきなり振るんだから。」

森久保「ですよね…でも今ではもうプロデューサーになつて…」

雪樹「それが、この様だけどね。」

森久保「でもプロデューサーさんがいなかつたらほたるちゃんは

⋮

雪樹「そういうことは考えない。」

森久保「そ、そうですね。」

雪樹「そりだなあ不幸…か。」

森久保「どうかされましたか…？」

雪樹「僕の人生は不幸だらけなんだろうなつて」

森久保「不幸だらけだったんですか…？」

雪樹「僕の話を誰かに話すのは久々な気がしてね、今思うとそりだなつて思つたんだよ」

森久保「そりだつたんですね…」

雪樹「でも、今は落ち着いてるよ。」

森久保「落ち着いてる…？」

雪樹「本当は休んでいられる場合じゃないんだろうけど。こんな状況だから、少しでも気持ちの整理が出来るかな。」

森久保「プロデューサーさんも、大変なんですね…」

雪樹「今だけは気が楽だよ。今までが大変だつたんだろうと思う。」

森久保「ご家族のこととか…？」

雪樹「それもあるけど。もう色々。」

森久保「もりくぼは…嫌な事ばかりだと…逃げたくなつてしまはず…」

雪樹「逃げるのも、ありだつたかもしれないね。でもそれもできなかつたというか。しなかつた。逃げても、結局は自分に降り掛かってくるつてなんとなくわかつてしまつたから。」

森久保「以前のプロデューサーさんは…もりくぼが隠れてると…すぐ見つけて…お仕事に…」

雪樹「断る方法もあつたと思う、でも森久保さんもそれをしなかつたんだよね。」

森久保「せつかくのお仕事なので…断つたら、申し訳ない気がして。」

雪樹「でも、隠れるんだね。」

森久保「え、ええ…まあ…」

雪樹「目の前の事にはしつかり向き合うよ、僕はね」

森久保「そう…ですよね…」

雪樹「つまらないんだ。逃げて隠れて。それじや何もうまくいかない

いんじやないかって。」

森久保「プロデューサーさんは…お強いんですね…」

雪樹「強くないよ。僕はただ我慢してただけだから」

森久保「もりくぼも…逃げなければ、強くなれたんでしょうか…」

雪樹「それは、僕にもわからないよ。君がどう思うかだから。」

森久保「もりくぼは…もりくぼでいいです…」

雪樹「そうだね。それでいいと思うよ」

…

森久保「プロデューサーさん…あの…」

雪樹「どうした？」

森久保「さつきからずつと。悲しい顔します…やつぱり話さなかつたほうがよかつたですよね…」

雪樹「ああ…悲しい顔してたかな。」

森久保「すいません…もりくぼが無理を言つたばかりに…」

雪樹「いや、謝らなくていいよ。」

森久保「でも。悲しい顔します…」

雪樹「ちよつと、考え方してただけだよ。」

森久保「そうですか…」

雪樹「でも。そうだね。少しそう思つてたかもしれない」

…会話が途切れる。

森久保さんは帰らなくて大丈夫だろうか。

雪樹「森久保さんは時間大丈夫？」

森久保「まだお昼ですし…」

雪樹「自主トレとか、学校の勉強とかも大丈夫？」

森久保「課題は終わらせてあります…自主トレは…」

雪樹「早坂さんも言つてたけど。劇の主役は大変だからしつかり取り組まないと大変だよ？」

森久保「わ、わかつてますけど…でも…」

森久保さんの表情がかなり曇つた。

劇の事で悩んでるのかな。」

雪樹「劇の事で悩んでるのかな。」

森久保「…はい…」

雪樹「話してみて。」

森久保「輝子ちゃんが失敗しちゃつたので…美玲ちゃんともりくぼが慰めて居たんですが…同じ劇のある人が輝子ちゃんの失敗に対して怒つてしまつて…」

ミスは誰でもあることだが…

森久保「輝子ちゃんもその失敗は一度目じやないんです…でも劇の演技家の人も難しいところだからつて失敗は許してくれて…なのに…」

雪樹「なら怒られる理由はないね」

森久保「美玲ちゃんは輝子ちゃんと一生懸命練習してましたし…もりくぼも…苦手ながら練習して…それで、美玲ちゃんがいがみ合つてしまつて…」

雪樹「できるなら、衝突は避けたかつたな…」

森久保「怒つた人…アイドルなんかにやらせるからつて…私達以外にも他の事務所のアイドルの方も…いましたし…そこでまた…言いになつて…」

雪樹「ああ…崩壊寸前だな…」

どうすればいいだろうか…

森久保「もりくぼは…何も言えなくて…どうすればよかつたかなんてずつと考えて…」

怖くて何もできなかつた

多分そうだつたんだろう。

でも実際には何ができるとしても

止めにかかるのは難しいだろう

そこまでヒートアップしてしまうと

最悪飛び火する可能性もある。

そもそもなれば森久保さんは余計辛い思いをしただろうし。他の人も更に嫌な思いをするだろう。

…突然、扉をノックする音が聞こえる。

雪樹「どうぞ。」

入ってきたのは女性二人

専務とちひろさんだつた。

美城 「その調子だと、意識はしつかりしてるようにだな。」

雪樹 「この有様ですけどね。」

ちひろ 「お怪我はどの程度…」

雪樹 「怪我という怪我は右腕と左足の骨折。かな」

ちひろ 「二箇所も…？」

雪樹 「車に轢かれた訳だから仕方ないです」

美城 「しばらくは休養になるだろうな」

雪樹 「まだまともに仕事した感じでもないんですが…はあ…」

美城 「何にせよ、今回は本当に迷惑をかけた。すまない。」

雪樹 「謝らないでください、ただの不運なんですから。専務は悪く

ないですよ。」

美城 「そう言われると。余計申し訳ないが、まあきりがない。」

雪樹 「事務所空けていいんですか？」

ちひろ 「大人組の方が居てくれてるはずなので、大丈夫だと思いま
す」

美城 「とは言つても長居するつもりはない、私はまだこの後予定がある。」

ちひろ「私も留守番任せきりにするわけにも行かないでの挨拶だけ
ある。」

⋮

雪樹 「はい、二人ともわざわざありがとうございます。」

二人は病室を出ていった。

森久保 「と…突然すぎるんですけど…」

雪樹 「凄い速さで隠れてたね。」

森久保 「だ、だつて…びっくりしましたし…」

雪樹 「隠れる必要なかつたでしょ？」

森久保 「あう…えつと…反射的にと言ふか…もりくぼは小動物なの
で…」

雪樹 「机の下によく隠れてるからね」

森久保 「え、ええ…はい…」

雪樹「劇のお話、どうしようか」

森久保「そ、そうでした…」

雪樹「一度起きた亀裂を治すのは大変だからね。」

森久保「でも…どうしたらよかつたんでしょう…」

雪樹「そうだね。演劇家の人相談してみないことには結果は出せないと思う。」

森久保「演劇家の人…そうですね…プロデューサーさんは今回あまり関わりがあるわけでは、ないです…」

雪樹「こんな状態だから、力になれなくてごめんね。」

森久保「いえ…こちらこそ…無理なお話ばかりで…ごめんなさい。」

雪樹「治るのにも時間がかかるし。どうしたらいいかなあ…」

森久保「怪我…大丈夫なんでしょうか…」

雪樹「心配してくれてありがとうございます…頑張るよ。」

森久保「はい…そろそろ…帰ります…」

雪樹「うん、帰り道、気を付けてね。」

森久保「ありがとうございます…えっと…また来ます…」

森久保さんは病室を出ていった

カーテンの隙間から夕陽が差し込んできている。

雪樹「そうか、もうそんな時間なんだな。」

残った最中を食べながら、スマートフォンでニュースを見ていたら先日の事故の記事が流れてきた。
名前は伏せてあるみたいだ。

雪樹「逆走した車は大破、運転手は飲酒運転…意識不明…巻き込まれた僕と僕を轢いた車の運転手は命に別状は無いが骨折等の怪我。」

十中八九、逆走車が悪いが

僕を轢いた車の運転手も氣の毒だ…

巻き込まれた挙句人を轢く羽目にあつた訳だから…

雪樹「トラウマだろうな…これは…」

巻き込まれた車の運転手も僕を轢いたことを認めてる。

雪樹「本当に氣の毒だな。」

事故の話はそこで止まつた。

しばらくしてまた

病室の扉をノックされた。

雪樹「どうぞ」

入ってきたのは兄。

ただ、先日電話した兄ではなく。

県外まで引っ越したはずの兄。

雪樹「これは珍しい人が。」

次男「事故つたって聞いて見舞いに来たぞ」

雪樹「もう会わないかなと思つてたけど、思いもよらない所で。」

次男「見舞いくらい来させろ」

雪樹「両親の葬式には来ないのに俺の見舞いは来るのかい。それはそれでどうなんだか」

次男「あの二人、亡くなつたのか、初耳だけど」

雪樹「あれ、連絡来てなかつた?」

次男「いつ頃?」

雪樹「今年の夏だよ。」

次男「その時は海外出張かもな…」

雪樹「そうか、まあやつと重荷が降りた、つて感じ。」

次男「お互い振り回され続けたからな。」

雪樹「色々とね」

次男「元気そудし、俺は帰るわ。」

雪樹「うん、お疲れ様。」

次男「また気が向いたらな」

そう言つて病室を出ていった

そのあとすぐ、また病室が開いた

看護師「夕飯、どうしますか?」

雪樹「ああ、ありがとうございます。」

看護師「また呼んでくださいね」

先程まで甘いお菓子を食べていただかりなのに、食事は何事もなく食べきつた。

夕飯、割と多めに見えたはずだけど
大食いと言うわけでもないんだが：

看護師 「片付けますね。また何かあれば呼んでください」
⋮その後は特に何もなく寝た。

⋮⋮⋮

「お前は考え過ぎなんだよ。」

好きでそういうふうにしてるわけじゃないけど

「考え過ぎて細かい、その割にはずっと張り詰めてるだろ。」

緊張の糸か…どうして切れないんだろうな

「ほんと、丈夫な癖に他の人間よりも纖細だよな」

纖細か、

「取り扱い注意にも程があるだろ。まあ俺は気にしないけど。」

⋮⋮⋮

雷の鳴る音で目が覚めた

雪樹 「また昔の事だ。」

何故昔の夢？

何か理由があるのか？

雪樹 「まだ3時か…」

もうひと眠り⋮⋮⋮

⋮⋮⋮

「大変だな。俺ももうそういうの考えないといけないのかな」

別にいいんじやない。

やりたいことやればいいと思う。

「俺はまだ親のすねをかじつてるんだなって思つてしまふよ、お前の話聞いてるとさ」

気がついたらそうなつていたつてだけだし。別に偉いことでもない。

「でも家のことも親のことも兄弟のことだつて考えてるんだろう？しつかりしそすぎだろ。」

任せきりにするわけにもいかないと思つた結末だから。別に⋮⋮⋮

雷の落ちる音で目が覚めた
また、昔の事だ。

やめてくれ。

ほんと。いい気分じゃない。
昔を否定するつもりはない。

ただそれを改めて眺めてなんの意味がある?
雪樹「なんの理由でどうして昔の事なんだ。」

全く意味わからない。

何か本能的な部分があるのだろうか。

病室の扉が開いた。

真壁「気分はどうかな、浮かれない顔をしてるようだが」

雪樹「一つ聞きたいことが…昔の事を夢で見るのは何か意味がある
んですかね」

真壁「私は精神科の方はあまり詳しくないんだがね、人間の見る夢
はその人の心理状態によつて変わる。昔の夢を頻繁に見るというこ
とは昔の事を懐かしんでいる、または昔のように生きたいと思つてい
るのだろう。」

雪樹「そんなことは微塵も考えたことないが…」

真壁「これはストレスからなる物が大多数だな、君が思つて居なく
ても無自覚に本能は現実から目を背けたいと思つているのだろう。」

雪樹「そういうことなんですかね。」

真壁「あくまで一例だ、君が本当にそう思つてているかどうかとは関
係のない可能性もゼロではないだろうな。」

雪樹「そうですか」

真壁「夢の話はまだ考えるといい。さて、一つ話をいいかな。これ
も君に直接的に支障はないが。」

雪樹「なんの話ですか？」

真壁「医療費のことだ。」

雪樹「ああ、そうですか、いくらほど掛かるんですか？」

真壁「それが驚いたことに君への請求はゼロ。会社の保険が効くの
と、あの二人からの協力だろう。」

雪樹「あの二人…」

ちひろさんと美城専務…？」

真壁「私は別に構わないんだがね。他人の医療費に散々払い込むなんて大した期待されているな、君も」

雪樹「自分でもびっくりですよ」

真壁「一応、請求書の写しは用意するから今度渡しておくよ。支払いは要らないからね。」

雪樹「わかりました。お願ひします」

真壁「それじゃ、私はこれで。」

真壁さんは病室から出ていった。

時間は7時頃

真壁さんが出たあとすぐ朝食を摂った。

雪樹「少しずつ。リハビリがいるだろうな。自分でできる範囲で体を動かしたいが、ギプスで固まっているせいか上手く動かせない。松葉杖は用意してもらっているが軽い移動くらいしかできない

「大人しくしてゐるのも退屈だな」

：朝食、昼食と食べて暇な時間を過ごす。

昼過ぎ、外が晴れてきたのか日が刺してきている。通り雨だったのだろうか。

考え事に更けていると病室の扉をノックされる。

雪樹「どうぞ」

入つて来たのは三人組

森久保「プロデューサーさん、今日も来ました…」

雪樹「ここにちは。学校終わり？」

早坂「今日はお昼までだからお見舞いに來た」

輝子「私は、元々休みだつたから」

雪樹「三人共ありがとう。」

森久保「朝、雨強かつたですね…」

」

早坂「雷の音で目が覚めたぞ…」

輝子「イイ感じの雷だつたな…フヒ…もつと続いても良かつたのに
…」

早坂「それじゃあお見舞いに行けないぞ。」

輝子「そ、そつか、それもううだね」

雪樹「無理して来なくてもいいよ？」

森久保「むりではないんですけど…やっぱり事務所にプロデューサー

さんが居ないと物足りないと言いますか？」

早坂「そうだぞッ！早く治して事務所に戻つてこいよな

雪樹「ん？僕悪くないよね？」

森久保「でも…皆さん待っていますし…」

雪樹「それはそうだけど。そんなすぐ治る怪我じゃないから…」

輝子「クリスマスが劇の日なんだ…間に合うかな…」

雪樹「うーん…なんとか歩けるようになれば行けると思う。それまでにリハビリ頑張るよ」

森久保「無理は良くないと思うんですけど…」

雪樹「大丈夫だよ。なんとかするよ」

輝子「ビデオ撮るから…それ見てもらうだけでもいいんだ…」

早坂「無理して来てまた怪我されるのも困るからな。しつかり治つたらでいいぞ？」

雪樹「うん、ありがとう。」

早坂「それじゃあウチはこのあと買い物に行つてくるから。また

なツ！」

輝子「小梅ちゃんと幸子ちゃんに呼ばれてるから、私も。」

雪樹「二人とも、お疲れ様」

二人が帰るが、

森久保さんはまだ隣の椅子に座つている。

森久保「あの…もう少し居てもいい…いや…ダメですよね…」

雪樹「いいよ。時間があるならね。」

森久保「ありがとうございます…それで…またお聞きしたいことがあつて…」

雪樹「どんなこと？」

森久保「えつと…プロデューサーさんは…松谷さんは…お友達とは居るんですよね…」

雪樹「そうだね。居ることには居るけど実際会つて話する人は片手で数える程度かな。」

森久保「そう…なんですね…」

雪樹「普段から引き籠もりがちだつたからそんなに出会いも無いし。」

森久保「も、もりくぼも普段から…机の下に…」

雪樹「森久保さんは僕よりも多いでしょ、友達を大切にね」

森久保「えつと…はい、輝子ちゃんや美玲ちゃん、裕美さんやほたるちゃん…色々な方と…」

会話を遮るように携帯が鳴つた。

誰からだろうか

雪樹「ごめんちょっと出ていいかな」

森久保「は、はい。お構い無く…」

タイミングを図つたかのように友人からの電話だつた

⋮

友人「おう、久しぶり」

雪樹「ああ、そうだな、なんだかんだ連絡してなかつたかもな。」

友人「仕事見つかつたか？辞めたつて話は聞いた覚えあるけど」

雪樹「おう、なんとかな、かなり大変だらうけどやつていけそうだよ。」

友人「そりや良かつたよ、今度、休み教えてもらえた休み被らせるけど。」

雪樹「残念だが今は病院。しばらく遊べそうにないんだよな」

友人「はあ?!病院!?!入院してるつてことか?」

雪樹「そう。事故つてさ。骨折だけで済んでるし後遺症とかはないから大丈夫だぞ」

友人「お前の大丈夫は言うほど大丈夫じゃないから。ちょっと今から行くわ。」

雪樹「今日は休みなのか」

友人「おう、暇だつたんだよ。ちよつと切るぞ。それじゃ後で。」

雪樹「焦るなよ。それじゃ」

：電話を終える…

森久保「えつと…お友達さん…ですか…」

雪樹「うん、前の仕事の同僚というか、同期。」

雪樹「数少ない友人のうちの一人つてとこかな」

森久保「ご家族が多くて…でもお友達は少ない…」

雪樹「ん？うん、まあそうだね。」

何か意図があるのかな

雪樹「森久保さん。僕からも質問をしていいかな」

森久保「もりくぼに答えられるなら…」

雪樹「どうして、僕のことをそんなに聞くのかな、何か理由がある？」

森久保「あの…あ…えつと…」

雪樹「結構積極的だつたから気になつて。」

森久保「深い意味は無くて…以前のプロデューサーさんに…少し似てるかなつて…」

空似か

雪樹「照らし合わせてるつてことだね。それだけ親しみやすいつてことなのかな」

森久保「あまり抵抗を感じなかつたので…でも…そうですよね…ちよつと欲張りで…すみません…」

雪樹「謝らなくともいいよ…でもね」

森久保「でも…？」

雪樹「これを言うのは少し心苦しいけど、僕と森久保さんはまだ会つて5日ほどだよ。一緒に仕事をしたことがあるわけでもない。親しい関係と言うには程遠い。違うかな。」

森久保「あう…はい…」

雪樹「ごめん。少し言い方を変えるよ、僕は大丈夫なんだ、そうやって親しんでくれるのはありがたいよ。でもね、親しく接するのはしっかり相手との関係を築いてからの方がいい。これはアイドルとして

も当然だと思うし。今後生きていくうちでもそうだからね」

森久保「わかりました…えっと…気をつけます…」

雪樹「辛い」と言つたかもしれないけど。僕に気軽に接してくれるのは大丈夫だよ。ただあまり質問ばかりでちょっと怖かつただけ。それだけはわかってほしいかな」

森久保「あの…」

森久保さんが言いかけたところで

病室の扉をノックされる。

おそらく…

雪樹「どうぞ」

友人「案外早く着いたな」

やはりさつき電話が掛かつてきました友人だ

友人「怪我はどうなんだよ」

雪樹「片足片腕の骨折だけ。それ以外はなんともないかな」

友人「いやそれでも不自由過ぎるだろ」

雪樹「大丈夫でしょ。そのうち治るつて」

友人「お前の大丈夫は信用ならないからな。大丈夫つて言い張る時はいつも爆弾抱えるだろ。何か心当たりあるか?」

雪樹「いや、特に…無いんだよな」

友人「まあ、それならいいか…ん…このカバン…?」

あ、森久保さんのカバン

友人「これお前の…なわけないよな隣にそれっぽいのあるし。」

雪樹「そうだな隣の破れたのが俺のやつだよ」

友人「もしかして彼女…?」

雪樹「ではないぞ。」

友人「だよな。お前に彼女とか夏に雪が降るんじゃないかと思つたわ」

雪樹「どういう例えだよ、」

友人「え、じゃあ、このカバン何?」

森久保「そのカバンは…もりくぼの…」

直前に隠れてた森久保さんが小鳥のさえずるような声で話す。

友人「え、今の誰…まさか出るの?」

雪樹「あー…こつち」

一言いうと友人はベットの反対側を覗き込む

友人「え…あれ?」

森久保「あ、あの…」、こんにちは…」

雪樹「鞄の持ち主。」

友人「えっと…待てよ…見覚えあるぞ…」

雪樹「知つてると思うぞ」

森久保「あ、あの…私が何か…?」

友人「うん、思い出したぞ、森久保乃々さんだな?」

森久保「もりくぼは…もりくぼですけど…」

雪樹「そうだな、もりくぼさんだよ」

友人「確かに、彼女では無さそうだな、つていやいや。」

雪樹「何か問題でも?」

友人「本人? コスプレとか空似とかなりきりとかじやない?」

森久保「もりくぼのニセモノ…にせくぼ…」

雪樹「本人だよ。」

友人「お前…森久保さんだぞ? アイドルだぞ? どういうことだ? フアンが黙つてないぞ…」

森久保「あの…この人はプロデューサーさんで…」

友人「プロデューサー…?」

雪樹「新人だけどね。」

友人「えつ、てことはお前、アイドルプロデューサー…? あのプロ

ダクションの?」

雪樹「うん、新しい仕事がこれ。」

友人「あ、そう。あ……そなのかー…」

雪樹「うん、んで事故に巻き込まれてこの有り様」

友人「事故つて、どう事故つたの」

雪樹「ニュース見てない?」

友人「あ、見たかも、逆走車の?」

雪樹「そう、それ。」

友人「なるほど。そりや災難だつたな、仕事就いたの最近か?」

雪樹「まだ一週間も経つてないよ。」

友人「身に付く前にそれは大変だな」

雪樹「事故遭う前も、ストーカーにつけられたり、海に沈められかけたりしたし、もうなんか驚かなくなつた」

友人「数日で色々ありすぎだろ」

雪樹「うん、色々とあります疲れたよ」

友人「そういうえば自己紹介まだだつた。荒浜友人(ゆうと)、よろしく、森久保さん」

森久保「あつ…はいよろしくお願ひします…」

友人「こいつ、無理と無茶ばっかりするから定期的に怒つてやってほしい」

森久保「そんな…プロデューサーさんに怒るなんて…もりくぼには無理です…」

雪樹「そうだな、就任していきなり五連勤してるな」

友人「ほらすぐそういうことする。」

雪樹「いいんだよ、俺は気にしてないから」

友人「お前は気にしてなくとも周りは気にするんだよ。汲み取れそれくらい」

雪樹「今後はのんびり仕事するよ。それができるならだけど」

友人「一言余分、もう言つても無駄だな。」

森久保「お二人とも、仲良しなんですね。」

雪樹「まあ、一番長続きしてるのは友人だから」

友人「へえ、それは初耳。まあお前友達少ないしな」

雪樹「少なくとも困りはしないからいいんだけどな」

友人「だろうな。これ以上居ても特に何かあるわけじゃないし、帰る、今度見舞いに何か持つてくるよ。」

雪樹「おう、わざわざすまないな。」

友人は病室を出ていくと森久保さんが椅子に戻る。

雪樹「時間、大丈夫?」

森久保「あ…あの…」

雪樹「何かな」

森久保「劇のことなんですけど…」

雪樹「さつき話しかけてきたこと?」

森久保「はい…」

雪樹「どうなった?」

森久保「演劇家の方が話していて、先日怒った人の役は別の人があ
ることになつたんです…」

雪樹「怒つてた人は?」

森久保「辞めてしましました…」

雪樹「他の人は?」

森久保「変わりないです…」

雪樹「そつか。新しい人とは上手くできそう?」

森久保「はい。優しい方で、でも失敗には厳しくて、無理やり怒つ
たりはしませんが…熱心というか。練習にお手伝いしてくれるので
…とても良い人だと聞きました…」

雪樹「良かつたね。少し楽しみかな。」

森久保「もりくぼも頑張ります…」

雪樹「うん、頑張つて」

森久保「そろそろ…帰ります…お疲れ様です…」

少し笑顔を見せたあと、鞄を背負つて小走りに帰っていく。

雪樹「一人は寂しいからな。」

夕食を取ると眠気に負けてすぐに寝入つた。
……

「ねえ、楽しい?」

楽しいというか忙しい?

「ならやめちゃえば?」

やめる理由もないからなあ…

「でも、私達と遊ぶ時間少ないじゃん」

確かに遊ぶ時間は少ないので。やめたら他に代わりが居ないし

「やめたら関係ないじゃん」

そこでやめたら他にも支障があるから

他のこともやめてしまうから

「他に何があるの？」

資格勉強、これはこの学校での目標だし

「資格試験、やつて何かあるの」

自己満足だろうけど。自分がどこまでできるか試したい。

「ふーん、そつか。自分の事優先なんだ。」

……

雪樹 「気分悪い…」

また昔の夢だつた。

朝食を食べ、適当にニュースを眺めていると
病院のドアをノックされた。

雪樹 「どうぞ」

??? 「久しぶり、松谷君」

入つてきたのは……懐かしい顔だつた。

枯れた気持ちと揺るがない意志

懐かしい…何年前だろうか…

伊南春佳…元彼女…

雪樹「連絡もなしに来るということは誰かから聞いたのか？」

伊南「事故が起きたとき、近くにいたんだ、それで松谷君が救急車に運ばれてるの見かけて。」

雪樹「なるほどね。」

伊南「怪我は大丈夫？」

雪樹「骨折だけ。」

伊南「そつか。」

雪樹「そのうち治る」

伊南「そうだね、良かつた」

雪樹「にしても、わざわざ見舞いに来るのはね。」

伊南「ん？んーなんか、むず痒いなつて」

雪樹「なにが？」

伊南「他人だからって思つてたんだけど、いざ知ってる人が事故に巻き込まれて、見てみぬふりするのは、なんか変な気分。」

雪樹「なるほどね、それはあるかもな」

伊南「今となつては昔の知り合いかもしれないけどさ、一応、彼氏だつた訳だし。」

雪樹「一応な。」

伊南「救急車に付き添いで乗つた人つて知り合いの人？」

雪樹「俺は知らない、ただ知人の友人、と言うことになるかな」

伊南「走つて行つた女の子の？」

雪樹「多分な、あの時のこととは半分くらいうろ覚えなんだよ。」

伊南「あの女の子なんで走つて行つちやつたんだろうね。」

雪樹「ああ、それは俺の指示だからだよ、そこまでは覚えてる」

伊南「そうなんだ。大変そうだね」

雪樹「まあ、仕事関係だから。仕方なく行かせたんだ。」

伊南「仕事、何やつてるの？」

雪樹「聞きたい？」

伊南「あ、まつて。当ててみようかな」

雪樹「ヒントいる？」

伊南「まず、学生の女の子と関わる仕事だよね……俳優？」

雪樹「残念。惜しいところではあるね」

伊南「ん……教師？」

雪樹「一気に離れた。」

伊南「離れたの……え……なんだろう」

雪樹「接客関連ではないのは確かだね。要はサービス業ではない」「そもそも松谷君がサービス系向かなそう」

雪樹「失礼な、これでも量販店員6年間やつてたんだぞ。」

伊南「へえ、意外、あ、もしかして事務職？」

雪樹「あながち間違いじゃないが正解でもない。」

伊南「えー、これも違うのー？あ、でも女の子……関係なくない？」

雪樹「俺の仕事は関係する。これめちゃくちゃヒントだぞ。」

伊南「え……女の子が大ヒント？俳優事務所の……プロデューサー？」

雪樹「ん……半分正解で半分ハズレ、アイドルプロデューサーだ

よ。」

伊南「ああアイドルね！あの女の子アイドルなんだ。なるほど！確かに事務所も近いし俳優ってもの近いね。」

伊南「ああ……大変だね……」

雪樹「まあ、あの子守れたからいいけどね。」

伊南「お得意の自己犠牲。変わらないね。」

雪樹「もうすっかり癖になつた。」

伊南「でも、かつこいいと思うよ。そうやつて胸張つて自分で何でもやろうとするの」

雪樹「そうか？」

伊南「昔は頑固なだけと思つてたけど最近ちよつと考え変わつて來たからかな、眞面目な人つていいなつて」

雪樹「褒めても何も出ねえぞ、あ、自販機でペットボトルくらいは奢る」

伊南「そういうところも変わらないね」

雪樹「言うな。」

伊南「懐かしいな、このやり取り」

雪樹「高校以来か。」

伊南「またあの関係に戻りたい？」

雪樹「ん? どうしてそう思う?」

伊南「聞いて見ただけ」

雪樹「お前はそう思うのか。」

伊南「うん、思つたよ」

雪樹「そうか。残念だが俺はそうは思わない」

伊南「そうだよね。仕事もあるし」

雪樹「仕事を言い訳にするのは違うな。俺の個人的な理由だからだ。これも言い訳と言われたらそれまでだけど」

伊南「どんな理由?」

雪樹「俺は、そういうのはもう興味がない、相手がどうとかじやなくて、単純にもう恋愛をする気がない」

伊南「そつか。」

雪樹「諦めてるとかそういう感じだな」

伊南「でもできないはわけじやないでしょ」

雪樹「俺は他人と恋愛できるほど良くてできた性格してないからな。」

伊南「本当にそうかな。」

雪樹「少なくとも自分ではそう思う。」

伊南「やつぱり、頑固だね。」

雪樹「頑固なんだろうな。」

伊南「あーあ、振られちやつたな」

雪樹「残念だが、俺はその気はないぞ」

伊南「わかつたよ。そろそろ待ち合わせの時間だしそれじゃあね」

雪樹「わざわざすまないな。」

伊南が病室から出ていった後

同じフロアの売店のところまで散歩していた。

雪樹「やっぱり松葉杖は大変だな…」

お茶と飴を買って自分の病室のところに戻ると。ちょうど昼頃
だつたのか、看護師の人が昼食を持ってきていた。

雪樹「すみません、売店まで行つてました。」

看護師「そうでしたか。昼食どうされますか？」

雪樹「食べます。ありがとうございます」

昼食を済ませ

ニュースを眺めていると

先日の事故の話がまた上がつていた

逆走した車の運転手は意識が戻り検察の取り調べで容疑を認めた。

巻き込まれた車の人も同じように入院。

雪樹「みんな、痛い目に遭う事故だつたな」

起きてしまつたものは仕方ない、

今すぐ怪我が治るわけでもない。

また、病室のドアをノックされる。

雪樹「どうぞ。」

入ってきたのは団体の大きい男性
腕を骨折してるので三角巾のサポーターを付けている。

男性「松谷さん、ですよね。」

雪樹「ええ、どちら様でしょう？」

男性「私は金森と言います。先日の事故で松谷さんにぶつかつてしまつた車の…」

雪樹「ああ…わかりました。」

男性「一度会うべきだと思いまして。保険のことなど話をどうする
か。」

雪樹「逆走車の彼はどうなるのでしょうか。」

男性「私はあなたを轢いてしまつたわけですから」

雪樹「元はといえば逆走した彼が悪いので。私達だけで話を決める
のもおかしな話ですよね。」

男性「ですが：彼は今私達より酷い状態です。」

雪樹「それは逃れる理由にはなりません。そもそも道路交通法違反です。それによつて起きた事故です。本人が容疑を認めた以上彼にもこの話に参加する義務があるはずです。」

男性「今の彼に保険の話や事故の話をするのは酷な内容だと思います。」

二

雪樹「今言いましたよね。逃れる理由にはなりません。それともあなたは彼に関わりたくない理由があるのですか？もしくは早くこの件を終わらせたいのか」

男性「わからぬのですか、心身共にひどくやられてるのにそこには事故の始末をしろと言われたら気が滅入るでしよう?」

雪樹「あなたの言い分はわかります。泣きつ面に蜂なんて酷いじやないかと。ですが彼はしつかり罪を償うべきです、違いますか？今の言い方だとあなたは彼を庇つているようにしか聞こえません。」

男性「頑なですね。そんなに彼を陥れたいのですか、心を病ませたいのですか？」

雪樹「誰も今すぐとは言つてません、彼がしつかり受け止めることができるようになつてからでも私は構いません。彼を恨んでいるわけでもないです。事実を受け止めて悔い改めて貰えればそれで十分です」

男性「そうですか。わかりました。それではまた彼が復帰した頃にでもお話をさせて頂きます。それでは」

「こういう時は相手に言い負かされてはいけない。特に今の様な内容では流されて不利益を被る場合があるから…」

氣分を悪く思われたかもしね

もう少し柔らかい言い回しをするべきだつたな。
その後は特に何もなく

夜になつて寝た。

重いものが落ちる様な音で目が覚めた。

雪樹「なんだどうか…」

病室は何も変わつていない

松葉杖を頼りに起き上がり

病室のドアを開けると足元に怪我をした女性が倒れている…
足から血を流している看護婦

一体何故足に怪我を?

雪樹「だ、大丈夫ですか!」

女性「あの…患者さんから暴力を受けて…」

雪樹「とりあえず止血しないと、確か…」

近くに事務室があつたはず。

雪樹「待つててください。」

女性「でもあなたも怪我をして…」

雪樹「僕は大丈夫です。」

事務室に向かつて歩くが

やはり松葉杖では普段より時間がかかる。

雪樹「すいません、誰かいませんか!」

事務室から出てきたのは男性看護師だつた

男性「どうかされましたか?」

雪樹「足を怪我した女性看護師の人があります。患者から暴力を振る
われたとかで。まともに歩けないみたいですね」

男性「患者から暴力? とりあえず怪我人のところに案内してくれれる
か」

病室の前に戻ると座り込んでいた女性が待っていた

男性「君はどうして足から血が…」

女性「金森さんのところに食事を届けた時…いきなりバターナイフ
を足に刺されて…」

男性「なんてことだ…何か怒らせたりとかしたわけじやないんだよ
な…」

女性「特に何も…食事をお届けしました…片付ける際はお呼びください、それだけです…」

雪樹「それが本当ならわざわざナイフを突き刺す意図がわからな
い」

男性「とりあえず応急処置はした。外科のところに行こう。松谷さ

んだったね。知させてくれてありがとう。」

女性 「本当にありがとうございました…」

雪樹 「いえ、お構い無く。」

二人が歩き去るのを少し眺めて部屋に戻る。
少し眠かったので寝ることにした。

と、その少しあと。

目が覚めて時間を確認するが然程寝てなかつた。丁度昼前くらい、

雪樹 「そういえば朝食無かつたな…」

今朝の一件で何かあつたのだろう。

朝食抜くくらいどうということはない。

昼食を済ませ、ニュースを眺めていると

病室のドアをノックされる。

雪樹 「どうぞ」

片桐 「プロデューサー元気？」

入つてきたのは早苗さん

雪樹 「元気もなにもこの通りです」

片桐 「仕事就いた直後で事故なんて大変よね」

雪樹 「そうですね。そろそろ退屈過ぎてきました。」

片桐 「でも、そんな状態じや仕事もできないでしょ、仕方ないよ。」

雪樹 「ずっとじつとしてるのも案外疲れるんですね、だから適度に仕事したいですよ」

片桐 「正直今できることはないと思うわ。プロダクションのPCを持ち出すわけにも行かないでしようし。」

雪樹 「なんとかして、抜け出してみようかな」

片桐 「それはダメよ。中途半端で戻られて悪化されても困るんだから。」

雪樹 「まあ、出るときはちゃんと医者から許可貰いますよ。」

片桐 「そうして頂戴」

雪樹 「ところで、扉の後ろで待つての方はいいのかな」

片桐 「ああー…呼ぶわね。」

片桐さんが声を掛けると一人の女性が入ってくる

雪樹「初めてまして、346プロダクションの松谷雪樹です。今後、よろしくお願ひします。」

三船「同じプロダクションの、えつと…三船美優です…よろしくお願いします…」

雪樹「怯えているのかな」

片桐「まあ、言うなれば彼女も被害者ね。」

雪樹「ああ…前任ですか。」

片桐「ええ、あまり話をすると三船さんに悪いから省略するけど。相当ハラスメント行為受けてるから。優しくしてあげて頂戴。」

雪樹「わかりました」

三船「あの…ほんとは来るつもりじゃなくて…」

片桐「三船さん安心して。彼は結構良い人だから。」

三船「疑っているわけではないのですが…なんといいますか…」

雪樹「どんな仕打ちを受けたか、僕にはわからない。だから、信用してほしいと約束するつもりはないよ。無駄に厳しくするつもりもないし、いきなり馴れ馴れしくするつもりもない。」

三船「どうしてそんな風に思うんでしょう…？」

雪樹「どうしてかつて？そうだね。僕も誰かを信用する機会がありなかつたからかな。一方的に相手に期待しても、噛み合わないだけ。だから本当に必要な時だけ話をしてわかつてもらう。それでいいと思つてるから。」

片桐「その考え方でプロデューサーやろうなんてよく思つたわね。」

雪樹「今僕がやるべきことはスカウトじゃなくて復興、だからそう考へてるだけ。いきなり声をかける事なんてする余裕がないよ。皆には少しづつでも戻つて来てもらえたならそれでいいと思つてる。」

三船「プロデューサーさん…」

片桐「専務も変わった人を…」

雪樹「無理は言わないよ、たまには事務所に来てプロダクションの皆と話を聞くくらいしてくれたらそれでいい。」

三船「わかりました…優しい人なんですね。」

雪樹「他人に厳しくするのは苦手ですから、それに厳しくするのは

僕じやなくていつか戻つて来る彼の役目でしょう。」

片桐「彼? 冬斗君? のこと?」

雪樹「戻つて来るものだと思つてますけどね。」

片桐「いやまさかねえ。まあ戻つてきたらみんな喜ぶと思うけど。」

雪樹「そうなれば僕の役目は終わる。補助に回るだろうけど。」

片桐「いいんじやない? それでもせつかくプロデューサーになつたんだから二人で仕事回すのもありだと思うけど?」

雪樹「あまり先のことを話しても鬼が笑うだけですね。とにかく、よろしくお願ひします。」

片桐「そうね、改めてよろしく」

三船「はい、よろしくお願ひします。」

一区切りついたところでノックされ扉が開く

真壁「少しお邪魔するよ。」

雪樹「どうかされましたか?」

真壁「先日の事故で、君を跳ねた車の運転手なんだが、彼の事で話が」

雪樹「そいうえば先日ここに来ましたね。保険がどうとかつて。彼が何が?」

真壁「今朝、彼がスタッフに暴力を振るつたみたいでね。」

雪樹「ああ: 今朝の件ですか」

真壁「酷く暴れたそうだ、元レスラーは横暴で困る。今は取り押さえて大人しくしてもらつてている。」

雪樹「先日話をした感じはかなり丁寧だつたんですが。人は見かけによらないってことですかね。」

真壁「事故のこともあるだろうから関わるときは気をつけるといい。」

片桐「今のプロデューサーに暴力されたら困るのよね。」

真壁「片腕骨折してるととはいっても、レスラーの体幹は凄まじいからな。普通の人間一人じや抑えるのも無理が近い。」

雪樹「ましてや僕は片腕片足骨折ですからね。」

真壁「当分は部屋で大人しくしてもらう予定だ。」

雪樹 「頼みます。彼とは少し言い争いになりかけたのもありますし。」

真壁 「注意しておくよ。」

雪樹 「あと、一つお願ひがあるんですが。」

真壁 「何かな。」

雪樹 「退屈なんですが、事務所内での仕事だけでもだめですかね。」

真壁 「仕事に復帰したいのか。私はあまり気が乗らないが。」

片桐 「ちょっとプロデューサー、あまりにもいきなり過ぎない?」

雪樹 「気になることが2つほど、多分大丈夫だと思うけど。」

三船 「その状態でもお仕事に熱心なんですね…」

雪樹 「熱心というか、単に心配なだけだよ」

片桐 「無理しないで頂戴、あなたに居なくなられるのが一番困るんだから。ちひろさんも専務もプロデューサーをやれないのよ」

雪樹 「僕は無理をしてるだなんて思つてませんよ」

片桐 「傍から見たら無理しかしてないのよ、少し聞いたけど、就任から5連勤してたんだつて?」

雪樹 「そうですね。気がついたらそんな感じでした」

片桐 「おまけにストーカーされたり沈められたり、車に轢かれたり。どうやつて耐えてるのか疑問に思うわ」

雪樹 「ここ数日、いろいろあり過ぎるんですよね。面白いことに。」

片桐 「何も面白くないわよ。むしろ怖いわ。」

雪樹 「でも、今はつまらない。仕事ないことには、退屈なんだよ」

片桐 「今後何があるかわかつたものじやないから治るまでおとなしくしてほしいのよ。」

雪樹 「せっかく貰った仕事だから、」

真壁 「問答はそこまで、明日にでも退院の手続きをするよ。今後のイベントや仕事のことが気になるんだろう。ただし次病院に搬送されるようなことがある場合は私が判断するまで大人しくしてもらう。」

片桐 「待つて、それでも少し早すぎると思うわ。」

三船 「本当に大丈夫なんでしょうか…」

雪樹 「大丈夫じゃないとは思う。でもやれるだけやりたいんだ。」

真壁 「あまり調子に乗らないように。そこまでの怪我人を一週間と経たず退院なんてありえない話だぞ。」

雪樹 「本来であれば一ヶ月くらい掛かるでしょうね。」

真壁 「ひと月で済めばいいほうだな、今夜少しギプスを補修する。それじゃ、準備をしてくるよ。」

雪樹 「わかりました」

真壁さんは病室を出していく

片桐 「いくら何でも無理があるわ…」

三船 「あの…流石にそこまでやる必要は…」

雪樹 「ある三人と、約束したのもあるんだ、だから早いうちに病院を出たかったのもある。」

片桐 「約束?」

雪樹 「クリスマスに演劇をやるそなんだ、見て欲しいって。だから、間に合わせたくてね。」

片桐 「その日だけでも良かつたじゃない。」

雪樹 「どうせだからレッスンも見てあげようと思つたんだ。」

片桐 「全く…呆れたわ。」

三船 「優しいというより、真面目すぎる、でしようか…」

雪樹 「よく言われるよ。」

片桐 「まあ止めても無駄でしようけど、極力周りに迷惑かけないようになさいよ、必要な時は私も手を貸すけど、我儘通すならある程度の覚悟は必要だと思って」

雪樹 「忠告、ありがとうございます。」

片桐 「あんなこと聞いたあとだと正直心配だけれど、そろそろ帰るわ。」

三船 「お大事に…無理しないでください。」

雪樹 「お二人ともお疲れ様です。」

二人が帰ったその後の夜。
ギプスを部分補強した。

私生活で使いやすいように取り外しも楽になつていてる。

真壁「リハビリはまだ先だ、二週間に一度は通院、私のもとにきて経過確認を取る。いいな。」

雪樹「わかりました。この状態ではリハビリも出来そうにはないですから。できる限り負担をかけないようにします。」

真壁「明日、迎えは来るのか」

雪樹「待ち時間に身内に連絡はしました。午後過ぎには来ると言つてましたね」

真壁「わかつた。準備をしておくよう。」

荷物を纏める…とは言つても退院手続きの書類を鞄に入れておしまい。

また明日。

事務所には連絡をしないとな。

⋮

翌朝、朝食を取つたあと病室の扉をノックされた。

雪樹「どうぞ。」

入つてきたのは例の人。

雪樹「おつと…」

金森さんだつた。

尋常とは思えない形相で手にナイフを持つてこちらに近付いてくる。

金森「逃げるなよ…おめえも終わらせてやる…」

雪樹「落ち着け！なんのつもりだ！」

答えることもなくナイフを刺そと振りかざしてくる、

咄嗟に松葉杖を持ってベットから降りて避けるがまた突進するように戻り掛かってくる。

体制も不安定なままで避けるのも難しい…

おとなしく刺されるわけにもいかないので松葉杖を横に振つて横腹に一撃を当てる蹲つた

隙を見て裏に回り込んで押し倒し背中に重し代わりに乗り掛かる動けない隙に松葉杖をうまく利用してベット横の呼びボタンを押

した。

看護師 「どうされま…え!」

雪樹「金森さんが襲い掛かつて来たんです。誰でもいいので代わりに取り押さえてもらえませんか。」

看護師 「は、はい！」

耳元の無線で別のスタッフを呼んでいる。

金森 「どけ！邪魔するな！」

雪樹「邪魔するに決まってるだろ、殺されそうになつて素直に死ぬやつがあるか。ふざけるな、どんな理由であれあんたに殺されるつもりはない。」

金森 「お前じやなかつたら…」

雪樹 「俺じやなかつたらなんだ。言つてみろ」

金森 「もう手遅れなんだよ！だつたらいつそ…！」

真壁 「今更遅いのはわかつていてるだろう」

数人の看護師達で取り押さえて連行されていく。なんとかなつた

⋮

雪樹 「全く驚きました。」

真壁 「食卓用のナイフか。勘弁してほしいな」

雪樹「真壁さんは彼がどういう理由で僕に襲い掛かつて来たのか、わかつてるんですか」

真壁 「先日も話をしたとおり、彼は元レスラーなんだがね。」

雪樹 「ええ、それで、」

真壁「スポーツ事務所側から、仮に被害にあつた側の事故でも他人に怪我を負わせた以上は解雇、それは変わらない、おまけに相手は有名事務所のプロデューサー、どう示しをつけるかこちらでも検討中だからしばらくはおとなしくしてほしい、とのことだ」

雪樹「まるで金森さんが悪人みたいですね。少しは同情しますけど。それで恨まれるのも迷惑ですよ」

真壁「スポーツ事務所側で酷く言われたらしい。もとは彼も非はなかつたのだろうけれど。」

雪樹「我慢できなかつたんでしようね。」

真壁「まあ彼の話はいいとして、襲われた時かなり激しく動いただろう。怪我は大丈夫なのか。」

雪樹「なんどもありませんよ、片腕片足でもどうにかなるものですね」

真壁「咄嗟の判断が良かつたんだろう。大したものだが何か異常を感じたらすぐ連絡するように。私は金森さんの対処について院長と相談をしてくるよ。」

雪樹「わかりました、お疲れ様です」

真壁「あと、退院の時は代わりの者を手配しておくよ、仕事が増えさせいだ。すまないね」

雪樹「お構い無く。」

午後、迎えが来て病院のエントランスに行くと、三人組と合った、森久保「あれ…プロデューサーさん…どうされたんですか…？」

雪樹「早いけど、退院だよ。」

早坂「お、おい、まだ怪我治つてないのに…」

輝子「手足が不自由なのに…だ…大丈夫なのか…？」

雪樹「行けるときは事務所に行くよ。怪我が痛むときはおとなしく家にいるつもり。」

森久保「あの…無理はしないほうが…」

雪樹「心配してくれてありがとう。できる限り無理はしないから。少し頑張ってみるよ」

早坂「怪我、早く治るといいなッ！」

三人に軽く挨拶をして。
兄の車に乗り込んだ。

長男「あの子達は？」

雪樹「仕事関係のね、言つてなかつたつけ。」

長男「あー、あの子達もアイドルな訳か」

雪樹「そう。あの三人はユニットでの活動で仲良くなつたみたいですね。」

長男「そうか、まあ俺達は年下の面倒見るのは慣れてるからな。」

雪樹「誰かさん達のおかげでね、」

長男「無理するなよ、ていつも無駄か、お前が一番無理強いさせられてきたしな」

雪樹「負担になりすぎないようにするよ」

……寝れない……

やっぱ体痛いな!?

家に戻り、動いた反動で身体の痛みが激しすぎて寝れなかつた

先を見据えた一步

雪樹 「痛み引かないな…」

襲われた時に動いた反動で体が痛む。

動いていて違和感は無いが、この状態では出勤は無理だろう。

雪樹 「流石に痛み引いてからだな」

数日経つてから仕事に復帰は無理か：

先に事務所に電話を入れておこう

雪樹 「あ、もしもし？」

千川 「はい、346プロダクションの千川です。この声はプロデューサーさん？」

雪樹 「ええ、今少し話しても大丈夫ですかね」

千川 「はい、話って何でしよう？」

雪樹 「退院したのは聞いてますかね？」

千川 「え？ 退院されたんですか？」

雪樹 「昨日です、事務所に行つて伝えようと思つたのですが、思いの外痛みがひどくて。先に連絡しました。」

千川 「痛みひどいのに退院して良かったのでしょうか。」

雪樹 「まあ、痛むのは他に理由があつただけなので、多分悪化はないと思います。」

千川 「無理しないでくださいね。」

雪樹 「痛み引いてなんとか行けるようであれば、事務所までの通勤手段確保します。それまでなんとか頼みますね」

千川 「来れるときだけでも構いませんが…交通費どれくらい出るか調べておきますね。」

雪樹 「ありがとうございます。それでは、また復帰する前に連絡しますね。」

千川 「はい、こちらからも何かあれば連絡します。お大事に」
電話を切り久々にパソコンを付ける。

メールボックスには何通も未開封のメール。

ネットゲームで知り合った人からだ。

そういえば、今の仕事を始めてからパソコンをつけた覚えがない。

メールボックスを開くとしばらく連絡がないとの心配されている
メールばかり。同じ人から何通も来ていたりもする。

雪樹「仕事変える前は頻繁にやり取りしてたのに。なんで忘れてた
んだろう。」

一人ずつメールを返信する。

片腕がこの状態ではしばらくはゲームも出来そうにない。

心配掛けてしまったことを謝つて。怪我をしたからゲームは出来
ないが元気だと伝える

仕事が変わつてゲームをする機会が減ることも伝えておいた。

雪樹「以前は、プライベートな時間だけが生き甲斐だつたな」

今後もそうなのだろうか。

まだわからない。

前職は楽しくなかつた。

毎日ストレスに苛まれ、何かしらしていないとすぐに気が沈んで嫌
になつた。

でも、ゲームをやつているときは。

楽しくて気持ちも開放的になつて、それについて考えることも厭わ
なかつた。

友人やネット先での知り合いとも沢山遊んだ。それ以外にもネット
小説に読み更けたり

料理でたまに凝つたものを作つたり。

休みの日は一日寝て過ごしたりもした

何故だろう。とても懐かしく感じる。

昔の日常にもう戻れないんだと。

今になつてやつと気がついた。

雪樹「そうか：変わったんだな」

特別なことがあつたわけではない

毎日同じことの繰り返しなのはそう。

仕事してゲームしてご飯食べていければいいと思っていた。

それが、今では。

雪樹「アイドルプロデューサーか。」

今更になつて、不安が押し寄せてくる。

勢いで専務の誘いに乗つた。

いろんな子達が事務所に来て、話をしたけど。正直まだ掴めないことをばかり。

いざ初めての営業かと思えば、事故に遭つてこの有様。
こんなことでプロデューサーが務まるのか

それに。アイドル達のこともそうだ。嫌われるかもしれない。もう戻つてこない子もいるかもしれない。今後事務所に来なくなる可能性だつてある、失敗が一度も許されないスタートで不安に駆られな
い訳がない。

雪樹「知識も経験も何もないのにな」
不意に溢れた不安の言葉。

悪い癖だ。

昔から精神的に追い込まれると考え過ぎてしまう。

雪樹「悪い癖。直さないとな…」

自分自身に呆れる。

深呼吸しないと。落ち着けない。

考えてもキリがない。

なるようにならぬとしても慎重かつ丁寧に。雑になれば損をして不利になる。

無理はしない。

……

退院から数日後。

タクシーを呼んで事務所まで向かう。

雪樹「交通費どれくらい出るんだろうか…」
せめて、半分は帰ってきてほしい。

久々のオフィス。

鍵はかかっていない。

オフィスに入るどちひろさんはいなかつた。

ただ、見覚えのない少女が二人いた

雪樹「おはようございます。初めまして。新しいプロデューサーの雪樹です。」

金髪の少女「新しいプロデューサーさんね。おはよう。怪我しても来るなんて。熱心なんだね。」

黒髪の少女「お嬢様、気安く近付いてはいけません。彼も例の男と同じかもしません」

金髪の少女「ううん、この人はあの魔法使いさんと同じ香りがするの。だから私にはわかる。この人は良い人」

雪樹「魔法使い、ね。」

黒崎「自己紹介しないとね。私は黒崎ちとせ。こっちの子は。」

白雪「白雪千夜です。」

黒崎「ちよつとぶつきらぼうだけど、ほんとはしつかり可愛いからたまに可愛がつてあげてね?」

白雪「そんな必要はありません。」

軽く睨まれてる。

前任の話があつたから警戒されるのも仕方ないか。

雪樹「黒崎さんに白雪さん、よろしくお願ひしますね。」

黒崎「にしても、そんな状態でよく来る気になるよね。」

雪樹「大人しくベットで寝てるだけなのはつまらないから…あつ…と…?」

松葉杖が何かに引っかかったのか、躊躇して転けそうになつたが、白雪さんが手助けしてくれたおかげでなんとかなつた

白雪「足元、杖が椅子にぶつかつたからでしょう。周りに迷惑かけないようにもつと注意するべきです」

黒崎「千夜ちゃん、積極的だね!」

白雪「怪我が悪化されるのは面倒なだけです。」

雪樹「ありがとうございます。気をつけるよ。」
プロデューサーデスクの椅子に腰掛けて、デスク上にある白封筒を確認する。

メモが添えてあつた

専務からのメモ。

どうやら白菊さんのドラマ撮影の資料らしい
封筒を開けると数枚の用紙と一枚のDVDがあつた。

雪樹「無事に終わつたのか。」

PCのドライブにDVDを入れて確認する

雪樹「流石、アイドルだな。」

黒崎「何見てるのー?」

雪樹「ドラマの撮影シーン、白菊さんに少しだけ役者を演じても
らつたんだ。」

黒崎「へえー、見てもいい?今後の参考になるかも。」

雪樹「どうぞ」

動画を一から流す。

黒崎さんは真剣に見ているようで
熱意の籠つた視線だつた。

黒崎「うんうん。いい感じ。演じきつてとつても上手だつたね。」

雪樹「専務が居てくれて助かつた。」

黒崎「今後も専務に任せせるの?」

雪樹「自分にできる仕事なら自分で引き受けたいと思つてる」

白雪「そんな怪我ではできることも少ないのでしょう、本当に大丈夫
ですか。」

雪樹「大丈夫かどうかは僕が決めるよ。僕にできることをやるだけ
だからね」

白雪「なら大丈夫でない場合は?」

雪樹「断るのはリスクがあるかもしれない、頼めるなら専務に頼む。
それもできない場合は…切り捨てるしかないね。」

白雪「なら貴方につきることとはなんでしょう。」

雪樹「僕にできる事?できるかどうかは案件が来たときに考える

よ。そうじやないと具合がわからないから。」

白雪「何故その場で判断するのでしょうか？」

雪樹「わからないうから、資料も何もないのにいきなりできるともできないとも言い切れない。言い切つてしまふのはそれこそリスクの塊。そこにリターンはないと思つていい」

白雪「なら貴方は…」

黒崎「千夜ちゃん、意地悪になつてるね」

白雪「そういうわけでは…」

雪樹「今みたいな圧迫するような質問は控えたほうがいいよ。相手を不快にさせてしまうから。」

黒崎「とか言いながらプロデューサーは眞面目に答えてるよね」

雪樹「答えないと気が済まないからかな、売られた喧嘩氣分だけど」

白雪「私は喧嘩などする気はありません」

雪樹「だろうね。一つだけ忠告しておくよ。聞くかどうかは…」

白雪「なんでしょう」

雪樹「…思つたより食いつくね…大人相手にその喧嘩腰な反応は控制したほうがいい、これは僕が不快に思つたからじゃない、僕以外の誰か、例えば専務やそれ以上の地位の人、そういうつた人にさつきの態度はとても危険すぎる」

黒崎「確かに、さつきの千夜ちゃんちょっと怖かつたね」

雪樹「君自身の個性を否定するつもりはない、ただ目上に対しても対応はよく気をつけたほうがいいかな」

白雪「お前にそこまで言われる必要は…」

黒崎「千夜ちゃん。この人が言つてることが正しいよ。今は千夜ちゃんが引き下がるべき」

白雪「お嬢様……わかりました。以後気をつけるようにします。」

雪樹「説教は誰も気分良くならないから、あんまりしたくないけど…これも、今の僕にできる事だからね」

黒崎「千夜ちゃん、飲み物買つてきて?」

白雪「何がいいですか?」

黒崎「千夜ちゃんのオススメ、お願ひね」

白雪 「オススメですか…わかりました。」

白雪さんは財布を持ってオフィスから出ていく

黒崎 「プロデューサー、怒つてるね」

雪樹 「怒つてるとより、納得行かない」

黒崎 「口では笑つても目は怒つてる。」

雪樹 「怒鳴るのは好きじゃないよ。諭して済むならそれが一番平和的だから。」

黒崎 「そうだね。千夜ちゃんのこと、少し話してもいい?」

雪樹 「あの子のこと?」

黒崎 「そう、また、昔みたいに戻っちゃつててさ。前の魔法使いさんのおかげで少し心開いたはずなのに、前任のせいでも元通りになつた」

雪樹 「なるほど、ここでも來たか」

黒崎 「普段から冷たい態度だからね、前任の人酷く怒つたのよね。出禁にまでされたんだよ。それが相当ショックだつたんだろうと思う。」

雪樹 「それに加えて僕の説教が、印象は最悪だつたかな」

黒崎 「ううん、あれは千夜ちゃんが悪いの、いくら前任に悪くされたからつてあなたがあんな仕打ちされる理由はないもの。」

雪樹 「優しく接してあげたいとは思う。でもそれ以上に僕が嫌われてしまうなら、手の打つ方法は考えないといけない。僕じやなくて、他の人の協力が必要だろうと思う。」

黒崎 「私も千夜ちゃんが言い過ぎないように気に掛けてるから、また素っ気なくしちゃうかもだけど。あの子の事よろしくね、魔法使いさん」

雪樹 「わかりました。魔法使いではないけどね。あ、あと。ちひろさんどこ行つてるかわかるかな。」

黒崎 「ちひろさんなら、他の子にお願いされて、レッスンルームにいるはずだよ。」

雪樹 「挨拶言つてきます。」

黒崎 「怪我大丈夫?」

雪樹「大丈夫ですよ。」

オフィスから出てレッスンルームに向かう

近くなつてくると声が聞こえた。

恐らくトレーナーさんの声だ。

声が落ち着いた頃、レッスンルームの扉を開けて入る。

ちひろ「プロデューサーさん、おはようございます、そのお怪我で来られたんですか？」

雪樹「まあね、大丈夫だよ、今日はあの二人の。」

ちひろ「はい、城ヶ崎姉妹がまた近々ライブをする予定でして。専務が話を進めてはいますがレッスンのときは私が代わりに見てあげてます。」

雪樹「なるほど、姉妹アイドルなだけあつて息はすぐ合つてるね」
ちひろ「一度披露した曲でもありますから。ファンからはまたライブで二人の姿が見たいと言う要望が多くつたとのことで、機会を用意したつて専務から聞きました」

雪樹「ファンが喜んでくれるならそれは大いにありがたい。復興に向けてファンの要望はできる限り応えていきたいからね。」

ちひろ「ですから、今までのファンレターは全て皆さんにお配りしましたあと、内容によってはお伺いしてます。自発的にライブをするのもいいですが、ファンの要望があつてのライブの方が集まりが良いのだとか、専務の策略ですね。」

雪樹「確かにファンからの要望であれば逃さず来る人も居るでしょう。告知をすれば要望を出したファンから周りに広がつて来てくれる人も増えるだろうし。専務も流石ですね。」

トレーナーさんの声が止まると

城ヶ崎の二人も踊りをやめた

トレーナー「一旦休憩だ、二人とも流石だな。この調子を継続できればライブは問題ないだろう。」

二人「ありがとうございます」

トレーナー「続きは13時から、細かいところの指摘をする、丁度プロデューサー殿も來てるから挨拶忘れるなよ」

三人とも僕の所に来た

聖「初めまして、トレーナーの青木聖です。美城専務からお話は度々聞いていました。よろしくお願ひしますね。」

雪樹「こちらこそ、プロデューサーの雪樹です。」

美嘉「怪我、大丈夫なの？」

雪樹「ちょっと不便だけど、大丈夫だよ。」

莉嘉「ちょっとの域じゃないと思うんだけど、ほんとに大丈夫？」

雪樹「大丈夫ですって。」

聖「トレーナーの私から見ても到底大丈夫とは思えませんが。無理は禁物ですね。」

みんなめちゃくちゃ心配してる…

そりやそりや、普通心配するよな。

雪樹「そこまで言われたら少し気が縮こまってしまうなあ…」

ちひろ「仕事熱心なのはいいことだと思いますが…無理しないでくださいね」

雪樹「気をつけます。とりあえずオフィスに戻ろうかな。」

聖「またレッスンのときはお願ひしますね。」

雪樹「はい。では。」

レッスンルームを後にしてオフィスに戻ると白雪さんが戻つてきていた。

白雪「机の上にあなたの分も置いてあります。」

雪樹「ありがとうございます。頂くよ」

置いてあるのはブラックコーヒー

雪樹「ブラックか、久しぶりに飲むね」

基本、カフェオレか微糖。

ブラックコーヒーは好んで飲まないだけ

嫌いではない。

デスクの椅子に腰掛けてノートPCを着ける

専務から送られてきているデータをいくつか確認する。

僕が就任する前に請けた内容や仕事に就いたあとの内容、情報共有の為だろう。

すべて目を通して重要なものの期日の近いものは個別にメモを取る。

雪樹「とりあえず直近はクリスマスの劇と新年ライブか：新年ライブは1日だけなんだな。」

先程のレッスンルームにいた二人は丁度このライブに向けての練習をしているようだ

他にも何人も出場の決まっているアイドルユニットもいる。全員での曲、ソロ曲、ユニット曲、全部把握しておかなければ。

黒崎「そういえばプロデューサーって。前はどうな仕事してたの？」

雪樹「ん？ 前の仕事？ サービス業だけど」

黒崎「接客業とか？」

雪樹「そうだね。家電製品の販売員だね。」

黒崎「へえ、家電かい、丁度そこにあるミニ冷蔵庫とか？」

雪樹「それも確かにそうだね。生活家電と情報家電とあといろいろ」

黒崎「結構詳しいんだよね」

雪樹「ある程度ね」

黒崎「ねえ千夜ちゃん、今度買い換えようつて言つてたの、プロデューサーについてきてもらつて何がいいか決めよっか」

白雪「怪我をしているので連れていけません、それに、私が選んだもので問題ありませんよ。」

黒崎「プロの販売員の説明、聞いてみたいよね。せつかくだから今度ね。」

白雪「少なくとも今は行けません。」

黒崎「それじゃ、プロデューサーの怪我が治つたら行こう。」

雪樹「まだ当分先かな。」

予定をノートに纏めていると美味しそうな匂いがする。二人が机で弁当を広げていた

雪樹「ああ、もうそんな時間か」

黒崎「お昼にはちょっと遅いかな。」

時計を見ると14時、

そんなに作業してただろうか：

雪樹「僕も昼ごはん済ませるか。」

弁当を持ってきている。

久しぶりの弁当、母親が作っていたものとは違つて少し量が多い。

黒崎「プロデューサーもお弁当なんだね」

雪樹「こんな調子だし外食も気軽にいけないから。」

白雪「手作り：な訳ありませんよね」

雪樹「兄の夫婦と同居しててね。ついでとして作つてもらつたんだ。」

黒崎「プロデューサーつてお料理出来そうな感じするよね」

雪樹「得意ではないけど、ある程度ならね。以前いろいろ作つてたかな。」

黒崎「前の魔法使いさんは苦手だつたね。」

白雪「そうでしたね。」

雪樹「男の人は好きで料理する人は少ないだろうと思う。」

黒崎「料理はできた方がいろいろ便利じやない？」

雪樹「そうだね、出来るようになれば好きなときに好きなもの作つて食べられるから案外いいね」

白雪「お嬢様も練習されますか？」

黒崎「私は千夜ちゃんが作つてくれるからいいかなー、そのうち練習するね。」

白雪「わかりました。そのときはお手伝いします」

昼食を終えた時。事務所の電話が鳴つた

雪樹「専務から？」

⋮

雪樹「はい、346プロダクションの雪樹です」

美城「美城だ、プロデューサーか、退院したそุดだな」

雪樹「はい、まだ万全というわけではないんですが仕事には復帰しています」

美城「無理は禁物だからな、書類とPC側のデータは確認してくれたか。」

雪樹「ほたるさんの件と過去と今後の仕事の事ですね。ほたるさんの件に関しては急なことでご迷惑をおかけしてしまいました、申し訳ありません。」

美城「仕方あるまい。無事に成功で終えたが相手側からは心配されてしまった。今後も依頼があれば喜んで請けたいと話はしておいたからその時は改めて頼むぞ。」

雪樹「こちらこそ、ありがとうございました。」

美城「あと、もう2つ、資料を目を通してるなら勘付いていると思うが、クリスマスと新年のライブに向けての話だが」

雪樹「はい、ちょうどその事で考えていました。」

美城「電話だとわかりにくくな、オフィスで話そう、一旦切るぞ。少し待つてくれ。」

雪樹「かしこまりました。」

電話を切った

専務のオフィスまで向かうべきか

雪樹「この資料だな。」

黒崎「どこか行くの？」

雪樹「専務のオフィスまで。今後の話をしてくる。」

黒崎「怪我してるんだし、専務来るまでまつてみたら？流石に怪我人呼び出すことなんてしないと思うよ。」

雪樹「そう、かな。」

メモを取つて待つっていた。

美城「すまない、待たせたな」

雪樹「いいえ、わざわざすみません。」

美城「その状態で出勤するのも如何なものと思うが来るなとは言わない。だが無理はするなよ。」

雪樹「ええ、予定が無い時は休みを頂くかもしれません。」

美城「本題だが、クリスマスの件から話そつか。例の三人なんだが何度も話はしているか。」

雪樹「ええ、度々病院まで見舞いに来てくれていたので、何度も顔を合わせてます」

美城「そうか。なら紹介は必要ないな。商店街のステージで子供向けとして行うイベントに参加する。企画書も渡してあるが確認してくれるな。」

雪樹「はい、相談もされてたのである程度は把握しています、本当にあの三人でよかつたのでしょうか？」

美城「ああ、あの三人でいい。」

雪樹「そうですか。」

美城「週に二度ほど専用の建物を設けてレッスンをしている。もうそろそろリハーサルに向けて練習もしてるだろうから行けるのであれば顔を出して挨拶をしておくといい。当日も君に任せることもりだ。新年ライブも同様。普段はレッスンルームを使っているだろうから事務所にいて声を掛けられたときは手伝つてやつてくれ。」

雪樹「わかりました。また困ったことがあれば相談させて頂きます。」

美城「その必要があればな。話は以上だ。私もプロデューサーを兼任できるほど時間に余裕はないのでな。失礼する」

雪樹「はい、お疲れ様です。」

黒崎「大変だね。」

雪樹「大変なのかな、まだ実感が湧かないからどうかな。でも少し楽しみはあるよ。」

黒崎「なら大丈夫なんじやない？ 楽しめたらきっと上手く行くと思うから。」

雪樹「楽しめる仕事だと嬉しいかな」

白雪「真面目に仕事するのは忘れないでください。」

雪樹「もちろん。」

クリスマスの劇の資料を眺めているとあることに気がついた。

他事務所のアイドルグループがいると聞いていたが、まさかシンデレラ役が他事務所のアイドルだった。

雪樹「今回は主役はシンデレラじゃないとはいえ。それでいいのか

⋮」

まあ、いいか。」

それに関しては深く考えない方がいいな
クリスマスか、予定もないし丁度いいか。

クリスマスに仕事なんて、いつものことだしな。

雪樹「二人はクリスマスは予定あるのか？」

黒崎「ないかなあ。まああるとしたら劇の子達見に行くくらい？」

白雪「そうですね。今後演劇をやる機会もあるかもしれません。参考程度に拝見するのはいいでしよう。」

雪樹「そつか。」

時計を見るともう夕方だつた。

流石に遅くなるまでに帰るべきか。

ちひろ「戻りました。」

雪樹「お疲れ様です。」

美嘉「お疲れ様」

莉嘉「お疲れ」

ちひろ「プロデューサーさん。お時間大丈夫ですか？」

雪樹「そろそろ帰ろうと思つてたところです。」

ちひろ「お怪我されてるので無理せず早めに切り上げてくださいね。」

美嘉「帰りはどうするの？バスとか？」

雪樹「タクシーの予定。今朝頼んだタクシー業者が良さそうだったから」

ちひろ「少しお待ちいただければ送つていきます」

雪樹「すいません、ありがとうございます」

黒崎「私達も帰ろつか」

白雪「そうですね」

美嘉「私達も帰るよ、宿題あるし」

アイドルの子達は荷物を持ってオフィスを出ていく。
荷物を纏めるか。

ちひろ「お待たせしました。」

事務所を出てちひろさんの車に乗る。

程無くして家までついた

雪樹「すみません。お手数かけてしまって」

ちひろ「いえ、気にしないでください。それでは私も帰りますね」

雪樹「お疲れ様です」

ちひろさんの車が見えなくなつたあと。

???「あれ？ 久しぶりじゃん！」

振り向くと男がいた。

誰だ？ 見覚えのない顔だが：

雪樹「ごめんなさい、見覚えが無いんですが。」

山倉「うわひどいな、高校一緒だつたじゃん山倉だよ。」
：正直よく声を掛けれたなも思うほど会いたくなかった

雪樹「本当に山倉なのか。」

山倉「いや嘘言う理由ないよ。ほんと久しぶりだなあ」

雪樹「こんな時間に何してるんだ」

山倉「ちょっと知り合いのどこに遊びに来てたんだよ。コンビニ寄
ろうと思つてさその帰り、ところでどうした？ 骨折？」

雪樹「骨折だよ」

山倉「骨折しててその状態で仕事させられてんの相当ブラックじゃない？ 今の女人に送つて貰えたとはいえさ。」

雪樹「仕事の事は別にいいだろ。」

山倉「ふくん、もしかしてあの女人、彼女とか？」

雪樹「そうだつたとしたら明日雪が降る。」

山倉「とか言つてほんとは付き合つてたりして」

雪樹「その袋に入つてるコーラ振つてお前に掛けてもいいか。」

山倉「ダメダメ、ごめんて。」

雪樹「立ち話もキツイんだ俺は帰る。」

山倉「おう、気を付けろよ」

：

最近は人との関わりが多いな：

それもそうか：

そういう人生になつたんだもんな

進んでいく準備。

翌日、またタクシーで事務所まで向かう。

ちひろさんと見覚えのない子もいる

雪樹「ちひろさんおはようござります君は…初めてましてかな」

「はい。初めましてですね」

雪桜
新しく口元
「鷺沢文香です」

割と普通な感じでおとなしめ。

ごせらを見て普通に振る舞っているらしい」とは、前任の影響に少なかつたのかな

？ そう思つた次の瞬間オフィスの扉が勢い良く開いた

驚況「ありすちゃん！」

雪樹「初めまして、新しいプロデューサーの松谷雪樹です。よろし

九

橘一た、橘ありすです、…へ、変な真似したら…」
鶯沢「ありすちやん落ち着いて」

鷺沢「ありすちゃん落ち着いて」

橘さんの方が影響大きい様子だな…

鶯沢「聞いた話では、この人が白菊さんを助けた。プロデューサーさ

「確かに…怪我もしますし…」

雪樹 「勘違いさせてしまつたなら、すまないね。」

木下「いえ、和洋の詰め合わせなので」

渡されたのはメモ。

•
•
•
•
•

そろそろ本格的にクリスマス劇と新年ライブに向けてのレッスンに君自身も注力していくといい。時間はもう少ない。

君が来る前から皆練習は始めて いる。

私もたまにレツスンルームに行つていたが今後は君の役目だ、よろしく頼むぞ。

改めて伝えるが時間は少ない。

それをよく理解しておくといい。

無理は禁物だぞ

雪樹「クリスマス劇まではもう2ヶ月を切ってるし、新年ライブはその直後、そろそろかな」

あひら「私もできる限り」

橘「専務と代わつたんですね」

雪樹「今後は僕が皆のお手伝いするよ。僕もわからない事たら」
からね、不甲斐ないところも出るかもしね。」

鷺沢「新人さんなのに、いきなりのお仕事で大変

雪樹「そうだね。就任して数日でいきなりこの怪我で、それでもつてクリスマス劇と新年ライブの取り巻き、なんてびっくりだけど。我

儘は言えないからね、頑張るよ」

「文香さんそろそろ時間なのですが…」

鷺沢「そうですね 私達は行きますね」

雪樹 「あの二人は新年ライブに出るんだつたかな」

雪樹「ちひろ「練習、見に行かなくていいんですか？」

雪木一也でされ 矢野見に行つてまつ
オフィスを出てレッスンルームに向かう

音楽が聞こえてくるそれに合わせてトレーナーのものであろう声も聞こえる。

一区切りついたところでノックして入る

雪樹「失礼しますね。」

トレーナー「プロデューサー殿…?」

雪樹「初めてかな。新しいプロデューサーの松谷雪樹です。よろしくお願ひしますね。」

青木麗「トレーナーの青木麗です、よろしくお願ひします、ただ…その怪我…話には聞いていたのですがね…」

雪樹「ああ、お気になさらず」

麗「いや、気にするなと言ふ方がおかしいと思いますが、まあ無理は禁物ですね」

雪樹「はい」

麗「さて、もう少ししたらレッスンを再開しますが、プロデューサー殿から見た感想もぜひ頂きたい。前任は良く言えば放任主義でしたから」

雪樹「悪く言うなら?」

麗「部下の面倒も見れないダメ上司、と言つたところですね」

雪樹「なるほど、そうなりたくはないですね。」

麗「まだわからないことが多いだろうとは思いますが、貴方の采配次第でどうなるか、ですよ。」

雪樹「はい、できる限り善処します。」

トレーナーさんは頷くとレッスンに戻つて行つた。

歌つている子は一人、単独曲の練習だろう、歌も上手でそれに加えて振り付けもしつかりしている。流石アイドルといつたところだろう。

…周りの動き、踊りが目立つて、ミスは見られないが。歌つている子だけ動きが小さいように見える。

雪樹「…んー…なんか動きが弱いかな…」

ふと言葉が溢れた。

曲が終わるとトレーナーさんから声を掛けられる

麗「いかがですかね。時間はあるので今後もレッスンは続けていきますが。」

雪樹「大部分は出来上がつてますよね、この曲初めてではないでしょか。ただ気になる点を少し」

麗「何でしよう」

雪樹「ミスもなく振り付けもしつかりしていますが。ソロでの曲ですよね。踊りの目立ちは逆転してます。」

麗「逆転している。なるほど」

雪樹「歌も上手で踊りも何も問題ありません。ですが目立つべき華が間違ってる。」

???「それは、どういうことですの？」

雪樹「ああ、挨拶が遅れました。新しいプロデューサーの松谷雪樹です。今後、よろしくお願ひしますね」

櫻井「櫻井桃華ですわ。それで今のは。」

雪樹「少し難しいかもしないが、周りの振り付けを控えめにして、櫻井さんの振り付けを目立たせるようにしたほうがいいと思いました。」

麗「確かに、違和感はあつたな。」

櫻井「歌いながら踊るのに振り付けを大きくするのは大変ではないですか？」

雪樹「無理に大きくする必要はありません。必要であれば櫻井さんの振り付けだけ目立つものに変更したり。先程も言つたとおり他の方だけ一部控えめにするなどでもいいと思います。」

櫻井「今から振り付けを変更するのは私は構わないのですが、他の方はよろしいの？」

雪樹「最悪他の方はそのままでいいかも。」

麗「大きな変更をするのは少し無理があるかもな」

雪樹「難しいのは承知ですが、あくまで提案です。無理にやれとは言いませんしやらずとも成功するのであればそのままでも大丈夫でしょう、ただ再三言いますが目立つべき華は櫻井さん。周りの花は櫻井さんを目立たせるためにあるんです、櫻井さんもそれはよく理解していると思いますが。」

櫻井「もちろん、私のソロ曲ですもの。新しいプロデューサーの仰ることは間違いないですわね。昇進いたしますわ。」

麗「もう少し調整してみるとしよう。」

櫻井さんとトレーナーさんは他の子とまたレッスンを始めた。

先程話した内容を踏まえて、トレーナーさんも指摘修正を繰り返している。

それに合わせて櫻井さんも一部動きを変えたり大きくなりしたり。難しいと話していたことを難なく行つている。

雪樹「うん、さつきとは全然違う。」

麗「満足して頂けたようですね」

雪樹「あとはファンがどう思うかだね、でも、これなら良いだろうと思う。衣装と振り付けもきっと合うだろうから。」

櫻井「きっと喜んでくれますわ」

雪樹「さて、少し昼を過ぎてしまつたな。」

麗「休憩にしようか」

雪樹「僕はオフィスの方でゆっくりしてくるので何かあれば呼んでください。」

麗「わかりました。またよろしくお願ひします」

櫻井「お疲れ様ですわ。」

オフィスに戻り昼食を広げていると。

先程のレッスンしていたアイドル達が戻ってきた。

雪樹「ああ、みんな来たんだね。」

櫻井「ええ、事務所で皆様と過ごすなんて久しぶりですもの。せつ

かくですから食事も一緒に済ませますわ」

橋「前のプロデューサーさんはこここのオフィスほとんど来ていましたよね」

鷺沢「勝手に開けるなど怒るときもありましたから」

雪樹「ああ、だから閉め切つたままだつたんだね。」

鷺沢「はい、ですからあまり皆さん集まれなかつたんですね」

雪樹「やっぱりみんなここが大切なんだね。」

櫻井「それにしては以前より綺麗ではないですか？」

雪樹「そうなのかな？」

橋「そう言われてみればそうですね」

ちひろ「プロデューサーさんが半日かけて一人で掃除してたみたいですよ」

鷺沢「そ娘娘たんですね」

櫻井「プロデューサーが一人で、そのお怪我なのに。言つてください
れば皆で手伝いますのに。」

雪樹「いや、その時はまだ怪我してなかつたし、案内された時に埃
とか汚れまみれで見過ごすのがどうも気に入らなくつて。」

橋「綺麗好きなんですか？」

雪樹「んー、多分それはあると思う。あと掃除とか案外好きだし。
自分が汚れるのは気にしないし」

鷺沢「それでお一人でオフィスの掃除を…」

雪樹「まあ、結果的に綺麗になつたつて思つてもらえたなら良かつ
たよ。」

橋「以前のプロデューサーさんはお仕事詰めで机の上とか散らかつ
ていましたよね。」

ちひろ「冬斗さんは片付けるの苦手そうでしたからある程度は手
伝つてました。気にかけているみたいなんですが自分のテリトリー
はもう悲惨でしたから…」

鷺沢「普段から外交多かつたそうですし。仕方ない部分もあるので
しようか」

櫻井「プロデューサーちやまはカバンの中だけは綺麗に整頓されて
いるのに、オフィス周りは仕事の直後まで片付けしませんもの。」

ちひろ「なんというか。慌ただしいんですね」

橋「もつと余裕を持つて行動すればいいんです。」

鷺沢「でも忘れ物や物を無くしたりしないので案外しつかりして
のかもりませんね」

お話しながら食事をする場面を見て、自分が求めていた結果が見え
た気がした

事務所を以前のように賑やかにすることを目指してきたが、目の前
ある風景がきっとその一部なんだろうと。

橋「あれそういうえばプロデューサーさんはお昼は？」

雪樹「ん？もう食べ終わつたよ」

櫻井「少食ですか？」

雪樹「今日はたまたま少ないだけ、まあ元々食べるのが早いのもあるけど。それでも満腹感はあるからいいかな」

櫻井「満腹になるのなら大丈夫ですかね」

橘「でも夜まで間に合うんですか？」

雪樹「あまり動かないから大丈夫かな。」

三人はまた食事をしながら談笑していた。

櫻井「そろそろお時間ですわね。」

橘「はい、午後のレッスンも頑張りましょう！」

鷺沢「失礼しますね。」

雪樹「行つてらっしゃい。何かあつたら連絡して。」

三人は荷物を纏めてオフィスを出ていく。
棚から三人のプロデュースノートを出して三人の今までの活躍について調べていた。

櫻井桃華

鷺沢文香

橘ありす

新年ライブに参加する三人。

他の曲での出演もあるみたいだが。
他の進捗も気になるところがある。

雪樹「まあ、順を追つてだな。」

他の出演の子達とも顔を合わせておきたいとは思っているが、運良くオフィスに来てくれた時に会えるか、レッスンのときにしか無理だろう。あとは当日に挨拶するしかない。

メモを取りノートを眺め予定を考えていたとき。オフィスの扉が開いた。

見覚えのない子達だつた。

??????「お久しぶりですね。事務所にお邪魔するのは

「本当に開いてるんだ。」

??????「あー…暖房効いてる…暖かいっスねー…」

一人、キャラが濃い。

雪樹「初めてまして、新人プロデューサーの雪樹です。今後ともよろ

しくお願ひします。」

安部「初めまして！ウサミンこと安部菜々です！」

神谷「私は神谷奈緒。よろしくね、プロデューサーさん。」

荒木「荒木比奈です、この部屋こんなに明るかつたでしたつけ…？」
ちひろ「プロデューサーさんが一人でお掃除されたんですよ。」

荒木「よっぽど綺麗好きなんですねー」

安部「あの、お話はちらつと聞いたんですが。お怪我されてるの本当なんですね。」

雪樹「ああ、まあね。心配かけさせてしまうかもしけないけどとりあえずできる範囲で仕事してくつもり。よろしくね。」

神谷「できる範囲つて言つても。移動が大変なのは相当な支障だよね。」

安倍「私達がしつかりサポートしてあげないとですね！」

雪樹「とは言つてもまだプロデューサーになつてまだ早いからね。何がなんだか。」

荒木「いきなりですもんね。何も資料無いところからいきなりだと、困惑もするなあ。」

神谷「でも新年ライブの話とかもあるから目先の目的はあるから今はそれじやないかな。」

雪樹「そのために今は出演メンバーの名前や顔、あとレッスンである程度進捗確認しておかないといけないから、言われた通りしばらくは事務所や舞台でのリハーサルかな。あとはクリスマスの演劇も任せられたし」

安倍「そのお怪我で、新人さんがそのお仕事の量は大変過ぎませんか？」

雪樹「専務も僕ができるって確信してくれたから任せてくれたんだろうし、きっと大丈夫だと思います。まあ。少し不安はありますがそれでもやれるだけやります」

荒木「なんか、頼りがいがありそうですね。」

神谷「冬斗さんと違つてお茶目つ氣はないから、ちょっと肩身狭いかなあ。でも眞面目なのはありがたいかな」

安倍「前のプロデューサーさんは数ヶ月でやめてしましましたしお仕事ももらえず…」

神谷「あのおつさんは元々ここを潰す気だったんだから、あんなの頼りにするべきじやなかつたんだよ。」

荒木「結構ひどかつたつすからね、私も出禁食らつてましたし。」

雪樹「ああ…はは…」

(→)でも話題が出てきたか。)

ちひろ「雪樹さんはとてもお優しいですから、きっと大丈夫ですよ。3人とも」

神谷「ちひろさんがそう言うつてことは良い人間違いないね」

安倍「菜々ももつと頑張りますから新年ライブ以降もたまにお仕事くださいね！」

荒木「原稿あるから、私は適度にほしいつす…」

雪樹「みんなありがとう。僕の当面の目的としてはみんなに気軽にこの事務所を利用して貰えるよう復興すること。何かあれば協力お願いするね」

神谷「そういうことならいつでもいいよ！」

安倍「ウサミンパワーでみなさんを元気にさせましょう！」

荒木「そうつすね！活気が戻るのはいいことつす！」

ちひろ「ふふ、心強いですね。」

雪樹「ええ、ありがたい限りです」

神谷「えっと、ちひろさん、まだレッスンルームつて空いてないですかね。」

ちひろ「3人は17時からでしたよね、もうそろそろ、先の子が戻ってくると思うんですが」

荒木「もう少し、暖まって行きたいつす…」

安倍「お外…寒いですね…」

神谷「そう？あたしは気にならなかつたけど」

荒木「せめて寒暖気にならない気候になつてほしい…」

雪樹「もう、すっかり冬ムードだからね。」

ちひろ「そういえばエアコンも掃除しないといけないです」

雪樹「エアコン…ふむ。」

神谷「流石にエアコンは業者に頼んだほうが。」

雪樹「んー、そうだね。こんな怪我してたらできないし、そうするよ。」

神谷「やるつもりだつたんだ…」

ちひろ「事務に話通しておきますね」

雪樹「頼みます。」

話をしていると。レッスンルームにいた三人が戻ってきた
橋「少し早いですがレッスン終わつたのでつて。もう来てたんですね。」

神谷「お疲れー。わざわざ早めに空けてくれるなんて、いつも通り
気が利くねー」

雪樹「3人ともお疲れ様、今日はゆっくり休んで。」

鷺沢「はい。プロデューサーさんのおかげで携りましたので、お礼
も兼ねてたんですけど。あれ、櫻井さんは？」

橋「あれ、確か一緒にレッスンルームを出たはずなんですが…」

櫻井「お二人ともレッスン後は水分補給を怠つてはいけませんの
よ。」

櫻井さんはレッスンルーム前の自販機からジュースを持つてきて
いた。

3人分だけでなく。8人分。

つまり次の人の分と私とちひろさん。

ちひろ「私達の分まで。ありがとうございます、櫻井さん」

神谷「いや、流石にちょっと申し訳ないよ、これ渡しておくね」

櫻井「あら、別なお金のことはいいんですよ。」

神谷「買って来てくれるのは嬉しいけどさ。」

雪樹「そうだね。一緒にレッスンした二人の分も買うならわかるけ
ど。その後の3人分だけでなく僕達まで奢つてもらうのはちょっと
やり過ぎなのはあるよ、一方的になるともらう側は困つてしまうとき
があるから気をつけてね。もちろん悪いことではないよ、ありがたく
頂くね」

櫻井「そうですね…わかりましたわ。」

神谷「言いたいこと全部言われちゃつたな」

安倍「すごく納得の行く説明でしたね。」

雪樹「さて、この話は終わり。次の三人とも頑張ってね。」

荒木「ああ…この部屋離れがたい…」

神谷「ほら行くよ。体動かせばもつと暖かくなるから。」

鷺沢「私達も帰りましょうか」

橋「はい、お疲れ様です」

櫻井「お疲れ様ですわ」

雪樹「お疲れ様。」

櫻井「お疲れ様ですわ」

雪樹「お疲れ様。」

6人はオフィスから出ていく
ちひろ「プロデューサーさんはいつ頃までいますか？」

雪樹「まあ、三人がレッスン終わるまでは」

ちひろ「そうしたら、先に帰つても大丈夫ですか？ 買い出しに行きたくて」

雪樹「いいですよ。」

ちひろ「お手数かけてごめんなさい先に失礼しますね。」

ちひろさんは荷物をまとめて帰つてしまつた。

久々に一人になつた気がする

雪樹「うん。静かなな」

先程レッスンに来た三人のプロデュースノートをチエツクして、三

人について調べていると、突然オフィスの扉が開いた。

???「お、聞いた通り開いてるな♪」

見覚えのない女性がオフィスを眺めている

お人好しという魔法

雪樹「はじめまして、ですね。」

???「お？もしかして新しいプロデューサー？よろしくー☆
めちゃくちゃノリが軽い：」

雪樹「えっと、雪樹です。今後共よろしくお願ひしますね。」

佐藤「佐藤心ことしゅがーはあと、はーとと呼んでくれよな♪」

雪樹「んー…と、佐藤さん、ですね。」

佐藤「お、おい。まあ、前任もそuddたし慣れてるぞ。」

雪樹「そうだ、一つお聞きしたいことが。」

佐藤「お？なになに？彼氏なら募集してないぞ？それともプロ
フィール？どんなこと？」

押しが強い：何だこの人：

雪樹「会つていきなりこんな話で申し訳ないんですが、前任の方の
悪事といいますか、佐藤さんの身近な方で特になかつたかどうか、な
んですが」

佐藤「いきなりスワイーティージやない話題飛ばしてくるなよ☆：
まあ、居るよ、被害者は」

雪樹「わかりました、それが聞けただけでも助かりました。」

佐藤「どうして聞いてきたんだよ、少しは気になるぞ」

口調も態度も変わった

この話題に対して真剣そうだな。

余程、何かあつたな

雪樹「一人でも多く、事務所でのアイドル活動に復帰してほしいと
思つてゐんです。もちろん無理には言いません。難しい方もいらっしゃ
ると思います。だからできる限りで。」

佐藤「そういう事なら、協力は惜しまないぞ☆」

あ、戻つた

佐藤「とりあえず本人達と話して見るからその後また話をする。そ
れでもいい？」

雪樹「ええ、構いません、ありがとうございます」

協力者が増えた。ありがたい

佐藤「いやしかし……聞いてたとおり派手な怪我してる…そんなので仕事してて大丈夫?」

雪樹「不自由はありますけど、なんとか」

佐藤「車椅子とか…」

雪樹「構いませんよ。私はこれでも。」

佐藤「とりあえず連絡先だけ交換しとくぞ☆」

これで少しでも多く戻つてきてくれる機会が増えるとありがたいんだけど

佐藤「それで早速なんだけど、話いい?」

雪樹「ええ、先程の話です?」

佐藤「一応、気にかけてる人が居てね。三船美優って言うんだけど

ど。」

雪樹「ああ、三船さんなら先日お会いしましたよ。片桐さんと話をして。多分大丈夫だと思いますが。」

佐藤「コラコラ、フライングはだめだぞ☆まあ話通つてるなんならいいんだけどさ。他にもはあとが気にかけてる子はいるからまた今度連絡するよ。」

雪樹「ありがとうございます。助かります。」

佐藤「ところで、新しいプロデューサーは、飲む人?」

雪樹「飲む?お酒ですか?お酒は飲まない派の人ですよ、あとタバコ吸いませんね」

佐藤「飲まない人かー、まあ仕方ないな」

雪樹「前職のときもお酒の席はいつものジンジャーエールかただの炭酸水で済ませました。」

話をしていると、三人が戻つてきた

神谷「あー、今日も疲れたよー。」

安部「今日もハードでしたねー。」

荒木「でももうそろそろツスからね。ハードなのも仕方ないツスね。」

雪樹「三人ともお疲れ様。」

神谷 「プロデューサー怪我してるので残つてくれてたんだ。」

雪樹 「ちひろさんが早めに帰りたいって話だから残つておかないと
いけないと思つて。鍵貰つておくよ。」

安部 「帰りはどうされるんですか…？」

雪樹 「まあ、タクシー捕まえるよ。それが電話でタクシー呼ぶでも
いいし。」

佐藤 「ほらほら三人とも、遅くなる前に帰るぞ☆そのためのお迎え
はあとなんだぞ♪」

神谷 「えっ、車ですか？」

佐藤 「そそ、近くに停めてあるから。それじゃ、プロデューサーも
氣をつけるよな☆」

雪樹 「ええ、お疲れ様です」

三人 「お疲れ様です。」

4人がオフィスを出ていく。

まあ、長居する理由もないし。

遅くなる前に帰ろう、

と、思つているとオフィスの扉が開く

雪樹 「専務?どうかされました?」

美城 「君、帰りは」

雪樹 「そろそタクシー会社に電話する予定でしたが」

美城 「私も今から帰るところだ、送つていくがどうする?」

雪樹 「いいんですか?」

美城 「構わない、ついでだ」

荷支度をして専務の車に乗る

帰り道を案内しながら話をしていた

雪樹 「わざわざありがとうございます」

美城 「怪我のこともあるからな。無理をされても困る」

雪樹 「早く治るといいんですけどね」

美城 「あと、感謝しておきたい。アイドルを、白菊ほたるを助けて
くれて、ありがとうございました。」

雪樹 「突然のことでしたし、状況的に私にも限界がありました、で

も、私がどれだけ怪我しようと彼女達を護らなければならぬ、それは変わりありません。」

美城 「それはプロデューサーとして、か」

雪樹 「意地悪な言い方ですね。」

美城 「冗談は苦手か?」

雪樹 「苦手、というか好きになれないですね」

美城 「君は自分の役目を全うした。そりゃう?」

雪樹 「ええまあ、言い方は酷いかもしませんが、彼女達はプロダクションにとって商売の要です。無くてはならない。だから無碍にできない。人である以上感情もありますから、それも踏まえて丁寧に扱わないといけない。」

美城 「一理あるな」

雪樹 「ただ、それ以前に」

美城 「それ以前に?」

雪樹 「私はお人好しなので。」

美城 「ああ：そうだつたな。見知らぬ少女を助けようとした挙句、アドリブ投げつけられてそれに難なく応える程だつたと聞く、良くもまあ平静を保ちながらなりきれたものだと感心する」

雪樹 「まあ、それがこの結果なのでしよう。」

美城 「その結果でも君は生きている、頼もしい限りだ。」

雪樹 「この有様でそんなこと言われましても。」

美城 「逞しい、と言つた方が正しいかな」

雪樹 「そうですね、自分でも驚くほどです」

美城 「さて、この付近だつたな」

雪樹 「はい、今日はありがとうございました」

美城 「あまり無理はするなよ、私も手を回すのに限界があるが、必要なときは手を貸す。」

雪樹 「そう思つていただけるだけでも心強いですね。努力します」

美城 「ではな。」

車を降りて家に向かう途中

…またか。と思うことが起きた

山倉「おお、またあつたな。」

雪樹「そうだな。」

話すこともないから帰る

山倉「え？ それだけ？」

雪樹「それだけ」

山倉「ふーん、思つたよりつまらないな。なあお前、仕事変えたつて話聞いたんだよ」

まあ：面倒だが相手するか

雪樹「それで？」

山倉「それで、俺の知り合いがさ、最近やらかして捕まつたんだよね。」

雪樹「イヤな予感だな。」

山倉「タイミングが合いすぎてさ。」

雪樹「俺が何かやつたとでも？」

山倉「いや：何かまどろっこしいのは面倒だわ。」

そう言うと鞄からナイフを持ち出してくる

何とも：最近はよく狙われるもんだ

雪樹「なんだ、また逆恨みか：ほんといい加減にしてくれよ」

山倉「お前、アイドルプロデューサーなんだろう、あいつの後任なんだろ、せっかく推進してやつてあいつ：プロデューサーになれたのに。」

雪樹「あれは、自業自得だぞ。話聞いてないのか。」

山倉「知つたことか。お前もあの会社も潰してやるんだなぜかわからないが。」

ものすごく。感情が沸々と湧き上がつてくる

なんだろうか、これが憤りつてやつだろうか

雪樹「やれるならやれ。やつてみせろ。今ここで証明してみせろ。お前に他人が刺せるか？その後はどうする？人を殺してしまいましたごめんなさいか？あの会社も私が潰しましたごめんなさいか？考えているのか？」

山倉「そんなあとのことは知らねえ。潰れてしまえすればいいんだ

よ！」

雪樹「ふざけるな！」

最近こういうことが増えた。

感情的になり過ぎる。

雪樹「お前も、あの赤原という男も何様のつもりだ！人を殺す？会社を潰す？馬鹿馬鹿しい！そんな恥ずかしい事をして誰が得をする！時間の無駄だ！」

山倉「…なんでそんなキレるんだよ、お前そんな感情的だつたか…？」

雪樹「ああ、俺は今ものすごく腹が立つて、怪我してなかつたら暴力でも奮つてたかもしれないくらい苛立つてる。まだなんかあるか？」

山倉「…ほんと。変わつたな。」

ナイフを鞄にしまいこんだ。

やる気はなくなつたみたいだな

雪樹「正直もうお前と会いたくない、二度と顔も見たくない。話しかけてくるな。」

山倉「昔みたいに隅っこにいる小動物かと思つたけど、そんなことはなかつたか。」

雪樹「俺は帰る」

立ち尽くす男を放つて家に向かつた

⋮

翌朝、兄貴から紙切れをもらつた。

⋮

あのストーカー事件

実は俺も関わつてたんだ

自首するよ

⋮

おそらくあの男だろう。

今更どうでもいい：

思い出すのも嫌になる

タクシーでプロダクションに向かう。オフィスに見覚えのない子がいる。かなり、背が高い。

?? 「あんずちゃん、やつぱりいいよおー…」

双葉 「お、プロデューサーおはよー。」

ちひろ 「おはようございます。プロデューサー」

雪樹 「おはようございます。」

とりあえず鞄を机に置いて

ソファーに座つて名刺を差し出す

雪樹 「初めまして。新しくプロデューサーになりました。雪樹です。今後ともよろしくお願ひしますね。」

諸星 「諸星きらりです…えつと…」

名刺を受け取るもまだ不安そうにしている

以前聞いていた嫌がらせ、

相当酷く言われたのかもしれない

双葉 「きらり、怖い？」

諸星 「ちよつと。かなあ」

雪樹 「以前のことと思い出せてしまつたかな。申し訳ない。」

諸星 「あんずちゃんは新しいPちゃんを…どう思うの？」

双葉 「ええー？ あんずに聞くのー？ まあ、なんというか。お人好しだよねー」

雪樹 「まあ、間違つてないと思う」

諸星 「そつか、優しいPちゃんなのかな」

双葉 「多分、あんず達が思つてるより、優しい人だと思うよ。初日から休まず連勤したり、誘拐された翌日も平気な顔してここに来るし、事故つてもこの通りだよ？」

雪樹 「いや…少しやり過ぎかと反省はしてるから、それ以上は…」
ちひろ 「すごい熱心ですよね。」

諸星 「Pちゃんが頑張ってるなら、きらりも頑張つて、Pちゃん応援しなきやだね。」

双葉 「そうそう。私の分まで頑張つちやつてよー。」

諸星「だーめ。あんずちゃんも頑張るの」
楽しそうに話す二人を見ると

また一つ役目を果たせたと実感する。

諸星「あれ？あんずちゃん大きくなつた？」

双葉「ちよ、うわつ、持ち上げないでよー」

雪樹「まあ、もう少し伸びるといいかもな」

双葉「もうプロデューサーも見てないで止めてよー」

諸星「でもでも、あんずちゃんはちいちゃいから可愛いんだもん。」

双葉「もうー、私も好きで小さいわけじやないぞー」

諸星「もう怒らないで、ごめんごめんー」

雪樹「凸凹コンビ、面白そうだね」

ちひろ「そうなんですね」

双葉「あんきら再結成かー。」

諸星「またあんずちゃんとお仕事出来るつて思うと今から楽しみ！」

双葉「まあ当分先かな、クリスマスと新年もあるし、プロデューサーもこんな怪我なんだから。」

諸星「そ、そうだよね。早とちりだつたね。」

雪樹「申し訳ないね。」

諸星「そういうえば、Pちゃんは…きらりの背がおつきいのはどう思うのかな…」

雪樹「どうつて？身長が高いだけだと思うけど？」

諸星「本当に、それだけ？」

雪樹「背が高いとは聞いてたけど思つたより高かつたかな、でもどうして？」

諸星「背が高いのは、アイドル向かないって言われて…でもそんなことないもんね」

雪樹「前任から言われたのかな、寧ろ得だと思うよ、印象に残りやすいし、目立ちやすいし注目されやすい。でもそれだけじゃ他にも背が高い人はいるから理由としては弱いかな。」

双葉「プロデューサー、それじゃ伝わりにくいと思うよ」

諸星「んゆ？どゆこと？」

双葉「きらりは背が高いから、怖がられてるんじゃないかつて思つてるんでしょ。」

諸星「初めの頃は思つてたかなー。」

雪樹「怖がられない為に色んな工夫をしたから今があるんだと思う。」

双葉「きらりは衣装がとにかくわいい系だねー」

諸星「可愛くデコつてきらきらしてるほうがハピハピになれるよ？」

雪樹「そういう工夫を欠かさなかつたから、背が高くて別に気にならないんだと思うよ」

双葉「もつと自信持つていいと思うよ、きらり」

諸星「あんずちゃんもPちゃんもありがとう！」

双葉「さて、私はそろそろ帰ろーかなー」

諸星「あんずちゃん、レッスンはー？」

双葉「うつ…きょ…今日くらいやらなくとも…」

諸星「ほーら、次の舞台はきらりの分まで頑張るつて言つたのあんずちゃんだよー」

双葉「え、えへへ…そんなこと言つたつけ…」

諸星「言つたよー、ほら自主練ついでに事務所に行こうつて誘つたのあんずちゃんだよー、このままじゃ自主練がついでになっちゃう」

双葉「まあそーだねー、ちゃんと練習しますかあー、」

ちひろ「相変わらず、きらりさんの押しに弱いですね。」

雪樹「双葉さんも新年ライブの方に出るんだよね」

双葉「そーだよー、今日は他の子は予定があるから集まれないんだつてさ、だから自主練。」

雪樹「頑張つておいで、ハイ鍵。」

双葉「それじゃ、行きますかあー」

二人はオフィスを出ていった。

雪樹「うん、また一つ。」

ちひろ「良かつたですね」

雪樹「ええ」

戻つてくれても。

どうだろう、満足しててくれているのだろうか。それにまだ他の子も居るだろうし

目先の目標のこともある。

ライブに出る子達でまだ顔合わせもできていない人もいるし…

ちひろ「プロデューサーさん? どうかされました?」

雪樹「ああ、少し考え方してただけです、大丈夫ですよ」

ちひろ「お仕事のことであればわからないところがあれば言つてくれるださいね」

雪樹「はい、今は大丈夫です、ありがとうございます」

考えても埒がない。一つずつかな

ちひろ「昼食行つてきますね」

雪樹「はい、僕はお弁当があるので残ります」

社員食堂に行くのかな

足に自由が出来たら今度行つてみよう

食事を済ませて、新年ライブに出る子達のプロデュースノートを眺める。

ある程度は情報収集ができるだろう。

雪樹「様々な子達が居るな。」

総勢24人

城ヶ崎姉妹に先日の6人、それに双葉さん。

この前顔を合わせた三人、島村さんに渋谷さんと本田さんだったか。

佐藤さん、早苗さんと三船さんも出る。

それ以外の子はまだ顔を合わせていない。

あと9人か。

三船さん、怖がつていたけどライブに支障が出ないか心配だな。ソ

ロ曲もあるから

充分にフォローしてあげないとな

考えてみるとあと9人

なんとか出勤にあわせて顔合わせできるといいけど。

考えに呆けているとオフィスの扉が開く

??? 「おう、ここに来るのは久しぶりじゃな」

今の今、写真を見た子だ。

??? 「そこに座つとる言うことは、お主が新しいプロデューサーで間違ひはないな？」

資料で見た時に思い浮かんだイメージに近いかな

雪樹「はい、僕が新しいプロデューサーの松谷雪樹です、以後よろしくお願ひします」

村上「おう、村上巴だ、礼儀はしつかりしておるようじゃな。感心する」

雪樹「礼儀？えっと、」

村上「ああすまん、自然と比べてしまつてな、気にせんでいい」

雪樹「前任…ですね」

村上「まあそういうことじや、おらん者の話をしても無駄じや。この話は終わるぞそれより聞きたいことがあるが…」

雪樹「ええ、どういったことでしょう？」

村上「お主、本当にその怪我で迎えるつもりか？」

心配されている訳ではなさそうだな。

正直この子はまだ中学生とはいえ

この子の家柄の事情を知れば下手な返しはできないだろうし。
まあ、それでも言うこととは一つか

雪樹「それが今僕にできることですから」

村上「自分の置かれている環境と状況は充分に理解して居るな？」

雪樹「もちろん、今更逃げ出すことなんてしません。この怪我も目の目標も私がこれまで成してきた事の顛末ですから受け止めていきます」

黙り込んでこちらをずっと凝視していく

やつぱり試されてるんだろうな

こんな子供に…とは思うけど

普通に考えてこんな怪我人がプロデューサーなんて心配だし聞いて当たり前のことか

村上「…その言葉に嘘はないと感じた。」

雪樹「ありがとうございます」

村上「なにより、歳下に丁寧な対応しとる時点で桁違いな覚悟のは感じ取れた。」

雪樹「そうですか、ただの癖なんですけどね。」

村上「悪くないと思う。それでもう一つじや、新年ライブのことではな」

雪樹「ええ、丁度リストを眺めていたところです。」

村上「うむ、わしも出演する、ユニットとしてだが、当日はよろしく頼むぞ、流れが決まっているとはいえ、プロデューサー殿の言葉も皆に勇気を与えてくれるもの、無くてはならないもの。」

雪樹「無くてはならないもの…わかりました、その言葉忘れずにいきます」

村上「話はこれまでじや、今日はレッスンルームがフリーと聞いているのじやが、使用許可是降りるだろうか、ユニットでの練習がしたくてな、トレーナー殿には声をかけてある」

雪樹「それなら、双葉さんが自主練してるから直接聞いてみて、午前中からいるからもしかしたら変わってくれるかも。」

村上「うむ、承知した。」

ドアノブに手をかけたまま止まっている

雪樹「どうかしました？」

村上「すこし、ゆっくりしてからにする」

口調が変わった？

雪樹「ユニットで練習ですよね？」

村上「他の二人はもう少ししてから来るからまだいい。少し表情が暗くなつたか…？」

何があつたのだろうか。

雪樹「…その感じだと。何かありましたね」

村上「まさかいきなり緩むとは思わなかつた…」

あれだけ威厳を見せていたとしても、
まだ子供だからね。

雪樹 「話してスッキリするなら、幾らでも聞くよ」

村上 「…もうここに来れないと思つてた…前任と散々言い争つて出
入りを許されなくなつて…アイドルとして何もできず…若い衆に話
をすればこのプロダクションがどうなるか…それも心配だつた。」

雪樹 「それだけ、ここがかけがえのないものだつたんだよね。」

村上 「そう…最初は親に勝手にオーディションに出されただけ…で
もある人がうちを全力でサポートしてくれたおかげか、楽しかった、
とても有意義に感じた。いつの間にかアイドルと言うものが自分の
中で変わつていた。感謝してもしきれないほど。あの人に恩返しが
したい。」

雪樹 「冬斗さんだね。」

村上 「居なくなつてしまつて寂しいとは言えなかつた。一人のアイ
ドルとして他のアイドルやあの人と共に歩めたのはとても嬉しく
思つていた…だから…ここに来れなくなつた時…全て終わつてしま
つたような感覚になつた…とても耐え難く…苦しかつた」

雪樹 「今こうやつて、事務所に来られるのも一つの奇跡かもしけな
いね。」

村上 「プロデューサーには感謝しかない…あと…さつきは…ごめん
なさい…というべきか…」

雪樹 「謝らなくていいよ、普通に考えてこんな怪我人が仕事してゐ
なんて知つたら心配されて当たり前のことだから。僕も少し度が過
ぎてる自覚はある。」

村上 「ならなんで」

雪樹 「お人好しだから」

村上 「お人好し…あの人と同じ」

雪樹 「僕は魔法使いではないよ」

村上 「うむ…話して見るものじやな！こう、モヤモヤしたものがあ
つてな。それも消えた。スッキリする！」

雪樹 「それはなにより。」

村上「改めて感謝する。いざれ恩返しをさせてもらう。」

雪樹「こちらこそありがとうございます。恩返しは別に構わないよ。」

村上「それでは、連絡も来ていたしレッスンルームに向かうとする

か。」

雪樹「頑張つておいで」

ドアを開けて手前でまた止まる

振り向いて一言言い放つ、

まるで輝くような笑顔で

村上「世話になつたな！」

見届けると、また、静かな空間が広がる。

目的の道筋、僅かな進歩

村上さんがオフィスを出たあと、プロデュースノートで出演アイドル達の曲などを調べていた。

雪樹「いくつかCMで聞いたことあるかもな。」

聴いてみないとわからないが

見覚えのある名前はいくつかある。

一応。プロデュースノートと一緒に全部揃えてあるようだから、パソコンで聴けなくはない。

雪樹「試しに。」

アルバムの物を一つ手に取り、今回のライブの曲を選んで再生する

【Great Journey】

雪樹「素晴らしい旅、良い題名だね」

歌詞と曲調がうまく合さつていて聴いていてとても楽しい、曲の歌詞が三人の特徴にあわせてあるような感じがする。

雪樹「ちょっと楽しみになってきたな。」

以前は知り合いに誘われて付添いで行つてただけのライブ。

まさか、プロデューサーとして会場に行くことになるとは思わなかつたが。

雪樹「会場が近くで助かつたな…」

遠い場所の場合、最悪欠席してたかもしれない。その場合は…いや考える必要はないな、

聴き終えたCDを棚に戻し

貰った資料から当日の流れを確認する。

雪樹「休憩を2回挟むんだな。片方は僕がアナウンスするのか。一

応確認しておかないとな」

アナウンス用の台本も用意してあるようだ

会場の放送室でのアナウンスだから最悪台本持ちながらでも問題はないさそうだ。

見た感じ舞台に出て挨拶するのは一度だけ

その時はどうしようか。

雪樹「車椅子か…松葉杖か…」

ちひろ「新年ライブのお話ですよね。無理して出られなくともいいと思いますよ。当日は私もいますから」

ちひろさんが戻つて来ていた。気づかなかつた

雪樹「いいんですかね」

ちひろ「どうしてもというのであれば止めませんが。」

雪樹「その時の状態によりますかね」

ちひろ「でもその前にクリスマスの劇もありますよね。」

雪樹「クリスマスの方は順調かな」

クリスマスの予定も加味して予定を組み始める。

もう11月も終わる。

そろそろクリスマスの劇の方もリハーサルの仕上げにかかっているだろう。

雪樹「一度、劇のリハーサルを見に行かないとな」

ちひろ「三人とも、頑張つてますよ」

雪樹「ええ、楽しみです」

資料をもとにリハーサルの日付を確認して、予定に組み込む。

ちひろ「プロデューサーさんは、本当に熱心ですね。」

雪樹「え？ そうですか？」

ちひろ「大変だと思いますし、実際、その状態でお仕事なんて辛いと思いますが、楽しそうにしてますよね。」

言われてみれば…怪我のことが頭から離れていた。

雪樹「確かに、今思うと楽しいかもしれないです」

ちひろ「楽しんでいただけてるなら安心してサポートできますが。身体のことだけは無理されないでください。」

雪樹「ありがとうございます」

予定を考えていると、オフィスの電話が鳴る。

ちひろ「私ですね。」

誰からだろうか。

ちひろさんの会話を聞いた感じでは

おそらく事務所のアイドルだろうとは思う

ちひろ「このあと、アイドルの子達が来るみたいなんですが。今つてレッスンルームって空いてなかつたですよね。」

雪樹「午前に双葉さんが使つてて、さつき村上さんがユニット曲の練習をするつて向かつていますが、まだどちらも戻つてきてないですね、どちらかはオフィスに寄らずに帰つたかもせんが。鍵は返つてきてないです。」

ちひろ「わかりました。」

レッスンルームと言うことは、

新年ライブに出演する子達だろう。

電話を終えたようだ。

雪樹「皆さん積極的ですね。」

ちひろ「あと1ヶ月しかないですからね。レッスンルームが空いていれば使いたくなると思います。」

雪樹「まあそれもそうか。」

ちひろ「レッスンルーム、どうしましよう」

雪樹「少し時間を空けてからの方がいいかもせんね。時間決めて交代してもらうとか。オフィスで待つてもらうくらいは大丈夫ですし」

ちひろ「そうですね。」

予定を考えているとオフィスの扉が空き

双葉さん達が戻つてきた

双葉「あく、暖房暖かい」

諸星「あんずちゃんおつかれ」

双葉「きらりも人々で疲れたんじゃない?」

雪樹「二人ともお疲れ様。」

ちひろ「お疲れ様です。レッスンルームはどうされました?」

雪樹「村上さん達は来たかな」

双葉「来てたよ。交代してきた。まあレッスンルームいても意味ないしどうせならオフィスでゆっくりしてから帰ろうと思つたんだよ、暖かいし。」

諸星 「久しぶりに踊つて楽しかった☆」

双葉 「ライブ出るわけじゃないのにね。」

諸星 「隣に一緒に踊つてくれる人がいたほうが、やりやすいと思つたんだよー。」

双葉 「わざわざありがとうねー。」

雪樹 「お茶出そうか」

諸星 「Pちゃん怪我してるんだから、きらりに任せて♪」

手際よくお茶を淹れてくれた。

慣れた手つきなのを見た感じ、以前も普段からみんなに配つてくれてたんだろうか。

諸星 「Pちゃんとちひろさんもどーぞ♪」

ちひろ 「ありがとうございます」

雪樹 「すまないね、ありがとうございます。」

諸星 「ほらあんずちゃんも」

双葉 「熱すぎても飲めないよー?」

諸星 「大丈夫、大丈夫」

一息ついた感じがする。

落ち着いて温かいお茶を飲むのはいつぶりだろうか。

双葉 「プロデューサーはどう。やつていけそう?」

雪樹 「ああ、頑張るよ」

双葉 「別に頑張らなくてもいいと思うけどねー」

諸星 「あんずちゃんまたそういうふうに言つてー。」

双葉 「頑張るつて言つたつて明確に頑張ることがないのに、何を頑張るの?あんず達は踊りや歌があるけど、プロデューサーは営業して私達を送り出して。資料纏めるだけだよね」

雪樹 「そうだね、努力、ではなくて義務だね。」

双葉 「そそう、それがやつていけそうかどうかだよねー」

雪樹 「確かに今の現状だと怪我のせいもあるけど満足にはこなせない。でも少しづつ手を伸ばしていくことは思つてるよ。」

ちひろ「まだ来て間もないですから。そこまで深く考えなくとも大丈夫ですよ。」

双葉「まあのんびりやろうよ。のんびり」

諸星「あんずちゃん、そろそろ帰ろつか」

双葉「やつと帰れるよー、ゲームしたい、ゲーム。きらり家までおんぶしてよー」

諸星「レッスンのご褒美にアメちゃんも上げるから、ほら立つて。」

双葉「アメちゃんは食べる。仕方ないなー」

雪樹「二人ともお疲れ様。気をつけてね」

ちひろ「お疲れ様です」

二人がオフィスに出ていったあと。

ちひろ「双葉さん。余程プロデューサーさんの事が心配なんですね。」

雪樹「まあ、心配されますよね。」

ちひろ「遠回しでしたね。」

雪樹「それでも伝わりました、大丈夫です」

心配されてばかり。

当たり前か：でもその分期待もされているだろうから、しつかりやつていかないといけない。

??????「お疲れ様です！カワイイボクがきましたよ！」

??????「お疲れく、お久しぶりの事務所やねー」

??????「お疲れ様です。新しいプロデューサーさん。」

雪樹「君達がさつき電話をしてくれた子達かな。初めまして。雪樹

と言います。今後共よろしくお願ひしますね。」

輿水「ボクは輿水幸子です！やつと事務所が戻りましたね。事務所に集まれないと色々と大変なんですよね」

相葉「私は相葉夕美、ライブのレッスンに来たついでに挨拶に来ました。」

塩見「あたしは塩見周子。みんなからは周子ちゃんとか呼ばれとるから気軽に呼んでやー」

輿水「それにしても、怪我大変ですよね。大丈夫なんですか？」

雪樹「大丈夫かどうかって言われたら、大丈夫とは言うけど。普通に見たら大丈夫じゃないんだよね。」

塩見「話には聞いてたけどやつぱ大変なんちやう？歩くので手一杯やろう？」

雪樹「とは言つても、やるべきことはやらないといけないから」
相葉「その状態なのにしつかり仕事に向かつての姿勢がすごいと思ひます。私なら逃げてしまいそう…」

周子「そやね～。頑張る姿勢はしつかりしとるかな～」

輿水「実際骨折するところなるんですね…」

雪樹「良いこと無いからね。」

輿水「ほんと…バンジーといいジャングルのお仕事といい、何も無く終わつてたのがよかつたと痛感しますね。」

雪樹「輿水さんは大変な仕事をよくしてたつてさつき資料で見たよ…ともかく、三人ともよろしく。レツスンルームの件なんだけど。村上さん達が使つてるかもしれないから相談してほしい。」

輿水「そうでしたか。それならそれで一緒でもボクはいいんですが。お二人はどうしますか？」

塩見「構わないよ～」

相葉「その方がお互い確認しやすいと思うからいいかもね。」

輿水「それなら、行きましょう。」

雪樹「行つてらつしやい」

塩見「プロデューサーも無理せんようにな～」

三人はオフィスを出てレツスンルームに向かつた。

新年ライブまでの大体の予定は決まつたが。

それ以降はどうしようか。

ちひろ「プロデューサーさんはどうしてそこまで仕事に執着されているんですか？」

雪樹「はい？執着してるように見えますかね。」

ちひろ「ええ、なんというか。必死そうなところがたまに見えます」

雪樹「そうですか。」

ちひろ「やつぱり無理してますよね。」

雪樹「無意識に無理してしまつてるのでしようね」

ちひろ「新年ライブ終えたあとはどうされるんですか？」

雪樹「それを、丁度考えていたところなんですね。」

ちひろ「お休みされてはどうでしょう。怪我が治るまで、先日の病院で入院して、退院できるくらい回復するまで。」

怪我を治してからでも、悪くはないか

雪樹「そうですね。そうしましよう」

専務に一応報告だけするべきだろう。

雪樹「少し出ますね。専務と相談してきます。」

ちひろ「呼びましょうか?」

雪樹「いえ、僕が用事があるわけですから。自分で行きます。」

ちひろ「足元、気をつけてくださいね。」

オフィスを出て専務のところまで向かう途中

美城「どうかしたかな」

雪樹「専務、丁度よかつた、一つお願ひがあります。」

専務「立ち話は無しだ、君のオフィスまで行こう。」

オフィスまで戻ることになつた。

ちひろ「専務、お疲れ様です」

専務「ああ、お疲れ様。それでプロデューサー、話とは。」

雪樹「新年ライブ以降の予定に關してなんですが。」

専務「来年の話をすると鬼が笑うというが、一応聞こう。」

雪樹「怪我のこともあって新年ライブを終えたあと、再度入院して怪我の治療に備えたいと思つてます。」

美城「なるほど、それは必要だと思うが、その期間の指示はどうする、営業やライブの予定など、何もなしにするわけには行かないぞ。」

雪樹「そこで一つ提案で、リモートで何かしらの営業活動はできなかと思つたんです。パソコンでの面談やメールのやり取りで打ち合わせなどができるでしょう。会社のパソコンを持ち出す訳には行かないでの、資材の用意はこちらの自費でなんとかします。直接病院まで来て相談でも構いませんが。」

美城「完全に穴が空く訳ではないなら構わない。アイドル達が事務所に来たときのフォローは千川でも適任だろう。」

雪樹「ありがとうございます。」

美城「具体的な期間は提示してくれなくていい、キミが復帰するときまた連絡してくれ。」

雪樹「わかりました」

美城「あとは何かあるか、思い当たることがあれば今聞いておくが。」

雪樹「あとは…特に、何かあればまたの機会に相談させていただきます」

美城「わかった、それでは失礼する。」

専務がオフィスを出ていったあと、自分の机に戻る。

ちひろ「良かつたですね。リモートでの面談うまく行くでしょか」

雪樹「資材は家にあるものでどうにかなりますし、アイドル達がリモートでの面談や相談が可能かどうか、できなければちひろさんにお願いするかもしれませんが、まあ先程の通り、病院まで来ててくれても構いません。」

ちひろ「私もできる限り協力はしますね。」

雪樹「ありがとうございます。」

劇もそろそろリハーサルを本格的に進めていくだろうし。

雪樹「一回は劇の方のリハーサルを見に行くかな。遠い場所ではないし。」

ちひろ「バスで行けるところでしたね。お一人で大丈夫ですか?」「雪樹「なんとかします。タクシーでもいいですし。ちひろさんは事務所をお願いします。」

ちひろ「わかりました」

雪樹「時間もあるし、レッスンルーム行つてきます。」

ちひろ「はい」

レッスンルームにつくと休憩をしていたようだつた。

雪樹「みんなお疲れ様です」

橋「プロデューサーさん。お疲れ様です」

麗「お疲れ様です。プロデューサー殿」

雪樹「順調かな。うまく進んでる?」

輿水「何度か公演で踊っていますし、新しくアレンジする部分もあるとはいえ、滯りはありませんね。今日は少し確認するだけなので終わりにしようか相談してました」

雪樹「そなんだね。」

塩見「プロデューサーは歌とか踊りは好きなん?」

雪樹「体動かすのは苦手だから踊りは無理かな、」

相葉「プロデューサーさんって、普段どんな曲を聴くんですか?」

雪樹「聴く曲かー。アイドル系の曲は最近聴くようになつたね。知り合いにおすすめされたりとかするし。他はアニメ系とかゲーム主題歌のものとか。歌番組とかに出るようなアーティストさんの曲は、あんまり聴かないね」

櫻井「偏りはあまり少ない方ですね」

村上「手広く聴くのも悪くない」

輿水「巴さんは演歌が多かつたですよね。」

村上「それこそ偏つておつたからの。」

雪樹「偏つても良いと思うけどね。」

輿水「そういうえば。不埒なCanvasのレッスンの後、以前のプロデューサーさんとカラオケ行つたことがありましたね」

塩見「ああ、そやつたね！」

相葉「周子さん黒髪のウイッグつけてたりしましたよね。あのときはびっくりしました。」

櫻井「新しいプロデューサーさんはカラオケには行かれますの？」

雪樹「昔は行つてたね。」

輿水「案外上手だつたりするんですか?プロデューサーさん」

相葉「でも以前のプロデューサーさんもカラオケは好きとか言いながら、カラオケドッキリのときプロデューサーさん案外音痴だつたよ？」

塩見「いやあたし達は歌うことが仕事だからね。比べちゃダメだよ？」

輿水「比べなくても音痴だつたと思いませんけど…」

雪樹「まあ、人並みには歌えると思うよ。」

塩見「アイドルの曲とか歌うん?」

雪樹「アイドルの曲は最近聴き始めたからわからないけど。カラオケとかでは歌つたことないかな。」

橘「アニソンとか、でしたつけ?」

雪樹「そうだね。機会があれば歌うよ。」

そろそろ戻ろうかな

塩見「歌つてるとこ見てみたいわー。」

村上「うむ、気にはなるな」

橘「きっと上手ですよ。」

相葉「アニソンかー、どんなのが好きなんだろう。」

輿水「ボクには劣りますよね!」

櫻井「それで?歌いますの?」

雪樹「え?:?冗談だよね?」

塩見「どうやろ?」

麗「お前達、お願ひするならしつかりしないとな」

歌うのは流石に: :

雪樹「歌うのは流石にね: 音楽もないし」

麗「音楽くらいスマホで調べればあるだろう。」

雪樹「いや、流石に遠慮しておきます。」

塩見「まあ、今度カラオケ連れてつてもらお。」

輿水「そうですね。そこでなら歌つてくれると思いますし。」

雪樹「どうしても歌わせたいんだね:」

橘「以前のプロデューサーさんはカラオケよく行つてたそうなので
それで皆さんも行くようになつたんですね。私はたまにしか行か
ないですけど。」

雪樹「冬斗さんでしたつけ。」

塩見「そうそう、元からカラオケ行く子達は多かつたけどねー、カラオケ大会とかやつたりする時もあつたらしいよー」

村上「皆よう歌いよる。流石アイドルつてもんや」

雪樹「また今度機会があればね。」

麗「レッスンはどうする?」

輿水 「今日は解散にしましよう。」

塩見 「そうやね！」

雪樹 「オフィスに戻るかな。」

全員でレッスンルームを出る

トレーナーさんは途中で別れたが、他の子達はオフィスまで着いてくるようだ。

ちひろ「お疲れ様です」

雪樹 「みんなお疲れ様」

橘 「皆さんこのあとどうされますか？」

村上 「学校の課題を終わらせるのに帰る予定じゃ」

塩見 「まあ帰つてのんびりするかなー」

相葉 「私も帰ろうかな、お腹空いちやつた」

輿水 「実はまだ宿題終わらせてないんですね…」

櫻井 「提出期限は大丈夫ですか？」

輿水 「まあ明後日までなので今日終わらせてしまえばいいのでまだ余裕はあるんです。でも早めに終わらせておかないといけないですよね」

櫻井 「宿題は貰った日に終わらせておくのがいいと思いますわ。橘さんはどうされますの？」

橘 「勉強道具も持つてきたので時間があれば誰かと勉強出来たらと思つたんですけど…」

櫻井 「それなら、少しお付き合いしますわ。プロデューサーさん、よろしくて？」

雪樹 「遅くなりすぎなければ構わないよ」

橘 「ありがとうございます。」

ちひろ「今日も先に帰つても大丈夫ですか？」

雪樹 「いいですよ。」

ちひろ「ありがとうございます、お先に失礼しますね」

塩見 「私達も帰ろつかー」

ちひろさんとアイドル達は帰つて行き

橘さんは勉強道具を広げ始める

僕のやる事は…今の所、特にない

まとめる資料も無いし。

予定はだいたい組み終わった。

声を掛けられている内容はあるが、

2つも予定を控えるから新しく始めるわけにはいかない
夕暮れ時何か始めるわけにも行かないしな

手持ち無沙汰とはこのことか。

櫻井「プロデューサーさん? 何か考え方でも?」

雪樹「ああ、いや暇になってしまったなって。」

櫻井「そうでしたのね。プロデューサーさんは得意なことは?」

雪樹「得意なこと。んー…」

いきなり言われてもパツと思い浮かばないな。

雪樹「得意なことっていうのはあまり意識したことはないな。」

櫻井「歌は得意ではないんですね?」

雪樹「人並みかな。カラオケまた行つてみるかな」

櫻井「カラオケ、あまり縁がありませんわね」

雪樹「友達と今度行つてみるといいよ。」

櫻井「家柄の都合…そういう庶民的な娯楽には経験が疎くて、何か
良い方法は…」

雪樹「事務所の子に連れて行つてもらおう。ほら、城ヶ崎の姉妹とか。」

櫻井「城ヶ崎さん…確かに二人は詳しそうですわね。」

雪樹「何も畏まることは無いよ、知つてる曲で歌いたい曲を思うよ
うに歌うだけ。」

櫻井「知つっていても歌える曲というのはなかなかに難しくなくて
?」

雪樹「歌詞やリズムを覚えていればなんとかなるよ」

櫻井「歌つてみてどうかですね」

雪樹「まあ普段からどれぐらいその曲を聴いているかは関わってく
るけど、実際に何度も聴いてた曲で初めて歌うものでも上手く行くこ
とはあると思うよ」

橋 「桃華さん。こここの問題のことで…」

櫻井 「お伺いしますわ。」

二人が教科書に顔を向ける。

アイドル同士が仲の良いのは助かる

しばらくすると橋さんは勉強道具を片付け始めた

橋 「今日はここまでやれば大丈夫です。桃華さんありがとうございます。プロデューサーさんもお待たせしました。」

せつかくだから二人にも聞いてみよう

雪樹 「どういたしまして。一つ聞きたいことがあるんだけどいいかな。」

橋井 「どういったことでしょう?」

雪樹 「前任のことについて。なんだけど。二人の友達とかでいる人から特に酷いことされた子とか居ないかなって思つて」

橋井 「そうですね…特に酷いの言うのを絞つていうのはあまり気が進みませんわ。」

橋 「敢えて言うなら…晴さんでしようか…」

雪樹 「結城晴さんかな。」

橋 「でも、もういないなら気にしなくていいや、とか言つて、この前事務所には来てましたよ。」

雪樹 「そつか。それなら大丈夫だね。」

橋井 「他の方にもお話を聞きしてますの?」

雪樹 「うん、このプロダクションを少しでも戻したくてね。」

橋井 「熱心ですね。」

橋 「また何かあれば連絡します」

雪樹 「ありがとうございます、二人とももう帰るよね。寮まで離れていないとはいえる。気をつけてね。」

橋 「はい、プロデューサーさんもお気をつけて」

櫻井 「お疲れ様ですわ」

二人がオフィスを出たあと

荷物を片付けて帰ることにした。

一つの壁

タクシーを降り、家の前まで行くと軒先に見知らぬ男性がいた。

??? 「初めまして、貴方が346プロダクションの新しいプロデューサーさんですよね。」

雪樹「ええそうです。初めまして、新しいプロデューサーの松谷雪樹です。」

?? 「先日、ドラマの撮影でご依頼させていただいた者で斎藤と申します、大変なお怪我ですね…お大事になさってください。」

雪樹「電話でお話させて頂いた方ですね、先日はありがとうございました。それと、当日の撮影に協力できず、申し訳なかつたです」

斎藤「いえいえ、白菊さんから事故のことをお伺いしたときは会議どころの話ではありませんでした、真っ先に美城さんにご協力を求めた次第なので…仕事は大事ですが…何よりも人の命が一番大事です」
雪樹「専務が引き継いだとお聞きしました。お手を煩わせてしまつて申し訳ありません。」

斎藤「いえ、こちらこそ引き受けて頂きありがとうございました。これは撮影班からの退院祝いです。まだまだ大変だとは思いますがこれからのご活躍を陰ながらお祈りしております」

雪樹「祝い物まで頂いてしまつて、こちらこそありがとうございます。今度また案件があれば是非ともお声掛けください、ご期待に添えるよう努力致します。」

斎藤「ご協力感謝します。では失礼します。」
斎藤さんが帰り

家に帰ることにした。

雪樹「兄貴。これ退院祝いにもらつたから」
お菓子と茶葉

期限の早いものはその場で食べることにした。
すごく美味しかった…羊羹

……

翌朝、いつも通りタクシーで事務所に向かった。オフィスに着くとまた見覚えのない女性がいる。誰かの客人だろうか。

雪樹「おはようございます」

ちひろ「おはようございます、プロデューサーさん」

???「おはようございます、ふふ、貴方が噂の新しいプロデューサーさんですね。」

雪樹「はい、初めまして、プロデューサーの雪樹と申します。」

高垣「初めまして、高垣楓です。」

ちひろ「楓さんもうちのプロダクションのアイドルなんですよ。大人組の方。大人しそうの方だな。」

雪樹「そうでしたか。今後とも宜しくお願ひします。」

高垣「こちらこそ宜しくお願ひします。お怪我大変そうですね。」

雪樹「しばらくは杖で…なんとかなると思います。」

ちひろ「クリスマスの劇の練習で三人が来てましたよ。レッスンルームにいると思いますが。」

雪樹「そうでしたか。挨拶しに行つて来ますね。」

オフィスを出てレッスンルームに向かう。

雪樹「3人とも頑張つてるね。」

森久保「あ…おはようございます…プロデューサーさん」

早坂「怪我してるので歩いて大丈夫なのか？無理するなよな。」

星「まあまあ、来てくれたんだし、見てもらおうよ。」

森久保「え…見せる…演技をですか…」

早坂「恥ずかしいことないだろー、それに本番はもっと多くの人で、しかも子どもたちも居るんだぞ、今のうちに見られる練習もしないとな」

森久保「あうう…」

早坂「ほらさつきのところからもう一度やるぞ」

森久保「わ、わかりました…」

三人は練習を始める。

一連の流れが終わり三人はお互に意見を言い合っていた

星「プロデューサーは、どう思つたかな。」

雪樹「十分良いと思うよ。お互いに意見を言い合つて、直していく結果なんだよね」

早坂「ウチはまだ物足りない感じはするんだよな…」

雪樹「それなら、時間はもう少ないけど満足行くまで、頑張つてみたら?」

森久保「美玲ちゃんのやる気が眩しい…」

雪樹「そう言う森久保さんもしつかり役を演じきれているよね。」

森久保「えへへ…はい…いっぱい練習したので。」

星「ぼののちゃん、最初の頃より、やる気、出てるな」

雪樹「いいことだね。」

三人はまた練習を始めた。

貫つっていた台本通りセリフは問題なし、

演技も申し分ない。流石アイドル。動きも機敏でしつかりしている

聖「おや、プロデューサー殿。」

雪樹「おはようございますトレーナーさん、このあと、レッスンを?

？」

聖「ああ、もうそろそろ交代の時間なので」

雪樹「もうそんな時間なのか。」

聖「そもそも12時までは空きだつたから三人が来たのだろうな。ライブも間近に迫っているのに、レッスンルームに空きがあるのは好ましい状態ではないが…」

雪樹「それは、仕方ないといいますか。なんとかしなければなりませんね」

聖「後始末もせずに消えた前任のせいといえばそうだが、彼女達を守れなかつた私達にも責任はある。」

雪樹「これから、良くしていけばいいんです」

聖「そうだな」

話をしているとまた二人、レッスンルームに入ってきた

??「おはようございます。」

??? 「おはようございますでしてー」

雪樹「おはようございます、初めましてですね。新任のプロデューサーの雪樹です、よろしくお願ひしますね」

依田「初めましてー。わたしは依田芳乃と申しますー」

藤原「藤原肇です。よろしくお願ひしますね。」

雪樹「二人も年始のライブのレッスン?」

藤原「はい。久々に芳乃さんと歌えるのでちょっと嬉しいです。」

依田「わたくしも肇さんとの再共演を待ち望んでおりました故、このような機会は嬉しく思いますー」

雪樹「そう思つてくれてるなら、良かつたです。」

依田「お話はお伺いしておりますが、お怪我の方はやはり」

藤原「早くに退院したつて聞いたのですが…やっぱり大変そうですね。」

依田「早く治るよう。日々お祈り致しましようー。」

雪樹「ありがとうございます。前任の件もあつたと思うのに、優しいんだね。」

依田「そなたからは悪しきものは感じませぬ故、支えるべきと判断したのでしてー」

藤原「芳乃さんが言うなら、本当に大丈夫そうですね。」

雪樹「もし、僕がそうでない行動をしたら…?」

依田「今、そなたは申し訳なさそうに質問をしておりますー、意地悪は苦手でしてー?」

雪樹「すごいね、全部読まれてるよ。」

話をしていたら三人が練習を終えて戻ってきた

早坂「交代の時間か?」

聖「ああ、3人ともご苦労様。演技上手くなつたな、期待しているぞ」

星「いっぱい練習したからね、へへ」

森久保「今日もいっぱい練習して…疲れました…」

早坂「本番は緊張もするからもつと疲れるかもだな、そのためにはもつと練習だ!」

聖「練習するのはいい事だが程々にな、疲れる過ぎては本番に成果

を挙げられない。練習した後はしつかり休め」

早坂 「そ、それもそうだな…しつかり休まなきやな。」

雪樹「三人ともお疲れ様。事務所開いてるから。休憩しておいで」

森久保「はい、ありがとうございます。」

早坂一矢子
甘いもの食
星「販賣機、
寄ろうか。」

三人は挨拶するとレツスンルームを出ていく。

藤原 「今度は私達ですね。」

雪樹「二人とも頑張つて。」

聖「プロデューサー殿は残られますか？」

雪樹「そろそろ昼食にするので。」

聖一わかりました。後はお任せください」

雪樹「はいよろしくお願ひします」

藤原「お疲れ様です、お身体お大事にしてください。」

雪樹 「ありがとう、それでは」

オフィスに戻ると高垣さんとちひろさんの姿がなかつた、

雪樹「先にお昼ご飯に行つたかな」

お弁当を広げて食べていると

先の三人が戻ってきた

美玲「アロ元ニリサレ オ弁当なんだな」

雪根一郎も足のこともあるから外食や二三回は無理がからずつてもうつてゐるんだ

星 「愛妻弁当だな、フヒ」

雪樹「愛妻じゃないよ、結婚していないし彼女も居ないから、おまけ

弁当。かな」

森久保 「おまけ…？」

雪樹 「兄貴夫婦と同居しててね、兄の奥さんがついでに作ってくれ

てるんだ」

星一ついて弁当 たね」

日暮れの運転手

とかよりも美味しいと思うぞ。」

森久保「手作り弁当…しばらく食べてないです…」

雪樹「学校だと給食とかあるから機会は少ないかもね。」

早坂「休みの日とかレッスンある日は、お昼はみんなでファミレスとかに食べに行くもんな。」

森久保「森久保はお弁当も好きです。」

星「ファミレスもいいけど。コンビニも美味しい。」

雪樹「案外、意見が合わないんだね…」

早坂「んー、でもそれはそれだな。別にそれで喧嘩することはないし。」

雪樹「そつか。お互に譲り合いもできるならいいんじゃない？」

森久保さんと星さんが机の側来ていた
また机の下に行きたいのだろう

森久保「あの、プロデューサーさん。」

星「ぼののちゃん。同じこと考えてたね。」

雪樹「ああ、えっと。ちょっとまつて。」

食べ終わった弁当を片付け。椅子を引くと
二人は机の下に収まるように入つていった

森久保「やつぱりここが落ち着きます…」

星「暗くて、ジメジメ…ではないけど、落ち着くな」

早坂「二人ともそこが好きだよなー」

雪樹「あはは…まあいいか…」

僕が慣れるまで時間はかかるだろう。

雪樹「ところで三人はご飯はまだなんじやない？」

早坂「ウチはどうしよーかなー」

星「私は、おにぎりがある。」

森久保「森久保もパンを買つてきましたけど…」

雪樹「コンビニで買つてきてたんだね」

早坂「先に言つてくれればウチもコンビニで買つてきたんだけど
なあ」

星「今から、コンビニ行く?」

早坂「そーだなー、お腹減ったからなんか食べたいぞ。」

星「じゃ、行こう。ぼののちゃんとどうする?」

森久保「あ、森久保は、ここで休んでいますので…どうぞお二人で。」

早坂「まあコンビニ行くくらい無理に誘う必要ないしな。」

雪樹「行つてらっしゃい。」

二人はオフィスを出てコンビニに向かつていった。

雪樹「一緒に行かなくてよかつたの?」

森久保「え?あ…えつと…はい…疲れてるので休憩しようと思つて…」

雪樹「それもそうか。レッスンあとだもんね。」

森久保「今日は美玲ちゃんがいつもより張り切つてましたし、森久保も頑張りました。」

雪樹「そつか、慣れてる場所のほうがやつぱりやりやすいだろうからね。」

森久保「それもありますけど、多分、久しぶりに事務所のレッスンルーム使わせてもらえたからだと思うんです。最近はいつも舞台の上でしたから…」

雪樹「それだけ練習に打ち込めてるなら本番も大丈夫そうだね。」

森久保「はい。監督さんも満足してくれるので森久保も自信持つて頑張れるかなと思つてます。」

雪樹「うん。わかつた、頑張つてね」

森久保「がんばります。えへへ」

森久保さんが本を読み始めたので

今後の予定について改めて見直していた
クリスマス劇のあと

新年明けて数日後にライブ。

その後は病院で長期療養。

クリスマスの劇までもう3週間ほど。

ライブ会場までの経路とかは全部調べてあるが、当日の欠席者のことなどを考えると。

色々まだ不安はある。

とにかく今はうまく行くことを願う一心。

色々思案しているとオフィスの扉が開いた

ちひろ「戻りました。」

雪樹「おかえりなさい。高垣さんは帰られましたか？」

ちひろ「はい、帰りました。それはどうでした？三人の方は」

雪樹「僕から特に言う事もなさそうです。問題はないと思いますよ。」

ちひろ「そうでしたか。それなら安心ですね。」

雪樹「気になつてたことはほとんど解消しつつあるので。クリスマスも新年明けてのライブもあとは当日何も事故が起こらないのを願うばかりです。」

ちひろ「そうですね。無事に終わるといいですが。」

雪樹「何か気がかりなことでもあるんですか？」

ちひろ「前のプロデューサーさんはライブ本番の日でも平氣で怒鳴つていましたから：雪樹さんがそういう方とは思えないんですが不安ではありますね…」

雪樹「なるほど。」

確かに本番にどうなるかはわからないが…

雪樹「間違つたことをすれば指摘はしますけど。無闇に怒鳴つたり叱りつけたりするつもりはありませんよ、本番に気分悪くされてしまふトコンディションでいられなくなつてしましますから。」

ちひろ「そう思つて頂いてるなら大丈夫そうですね。」

パソコンに向かつて今後のこのメモを取りながら考える。
指摘自体は本番に限らない。

必要であれば私生活にも多少は干渉せざるを得ないことだつてあるだろう。

その辺はよく考えないといけない。

本当に起きていないのか、知らされていないのかはわからないが、そこまでの話は今の所聞いていない。

ただ前任の件以降、事務所に来ていない子達はどうなのだろう。

事務所に来ることを拒む子達や、やめることを決意している子もいる

るかもしれない。

どうなるかはその時になつてみないとわからないが、事務所絡みで何か間違つたことをしていいか、もしくは巻き込まれていないかどうかも心配だ

考え込んでいると、聞き覚えのない女性がいつの間にか目の前にいた

??? 「気づくのが遅いわ」

雪樹 「ああ、申し訳ない、僕は新しいプロデューサーの松谷雪樹です。今後よろしくお願ひします」

??? 「ふーん…まあいいわ、自己紹介くらいはまともにできるのね。」

雪樹 「え？ええ、まあ」

財前 「財前時子よ、久々に来てあげたというのに貢物もないのね。早く出しなさい」

ちひろ 「いま用意しますね。」

ちひろさんがお茶を用意している：いや普通のことだとは思うんだけど、いつもと雰囲気が違う。

なんというか、気品がある…

財前 「それで、貴方から何か言うことはないのかしら？」

雪樹 「僕からですか。うーん。」

仕事は特に取つてきていないし。

すぐに取れるものでもないからなあ。

雪樹 「気が済むまでゆっくりしていってください。」

財前 「あら、私に指図でもするつもり？」

やつぱり気になる。違和感しかない

雪樹 「ああ、少しお待ちください」

財前 「ふん」

……えつと、パッショナーアイドル…？

財前 時子についてのプロデュースノートを一通り確認する…

(そういう人かあ～……)

本物のお嬢様であり、

サディストである。

根は優しく他のアイドルからの信頼は厚い。同時に他のアイドルを邪険にすることはなく、むしろ大切にしている。

なので、サディズムが発揮されるのは。

基本的にアイドル以外

⋮⋮⋮

⋮残念ながら。サディズムには全く興味はそそられないな。

僕はただの新人のプロデューサー

このプロダクションの復興を目指すだけ。

余計な性癖は要らない。

雪樹「お待たせしてすみませんでした。決して指図するつもりはありませんよ。」

時子「これだけ待たせておいて粗末な謝罪ね、お仕置きが必要かしら。」

雪樹「お仕置きは必要ありません、僕はただのプロデューサーですから、下僕でもなければ豚でもありません。真人間です。」

時子「あら、いい度胸ね。」

財前さんは立ち上がり腰に控えていたムチを構えた。

雪樹「言つておきますが、僕はそういうものに興味はありません。踏まれるのも罵倒されるのも見下されるのも不快に思う質なので。」

時子「この期に及んでもまだ歯向かうわけ?」

雪樹「歯向かうも何も、僕はプロデューサーであなたはアイドル、それ以上でもそれ以下でもないでしようから。」

ちひろ「時子ちゃん、今は抑えてくださいね」

財前「気に食わないわ。」

雪樹「⋮実害を加えるなら、警察沙汰になりかねませんがどうされますか。とりあえず傷害罪あたりは確定しますよ。それくらいは理解できますよね。」

財前「チツ⋮」

雪樹「そういうのは適材適所だと思いますよ。僕はあなたが知つていたプロデューサーではありませんから」

諦めたのかムチを仕舞い込みソファに戻った。

財前「一理あるわね、ふん、気に食わないけどまあいいわ。」

ひとこと言い放つてお茶を飲み干し。オフィスを出ていつてしまつた

雪樹「次に財前さんが来るまでには、仕事用意しておかないとなあ」

ちひろ「プロデューサーさん…屈強ですね…」

雪樹「アイドル相手に大人気ないかなと思つていたんですが、主導権を握られるわけには行かないんです。」

ちひろ「あの感じだと、どうでしようか」

雪樹「わかつてます、第一印象は最悪に捉えられてもおかしくありません。」

ちひろ「今後大変そうですね」

雪樹「それでも譲るわけには行きませんよ。」

森久保「あ、あの…プロデューサーさん」

雪樹「あ、森久保さん、さつきの会話を聞こえてたよね、すまないね怖がらせてしまつたかな。」

森久保「あ…いえ…プロデューサーさんはしつかりしてるんだなつて…」

雪樹「自分の信念は曲げないようにしてたよ、真面目で中立的な人としてね。それでどうにもならないときは臨機応変に対応するようにしてる。」

ちひろ「さつきの財前さんのときは、ちょっと危なかつたですね。」

雪樹「あれが最適とは言えませんが、僕がそういう人間ではないってわかつてもらうのと、お互いの立場をわかつてもらうためです。そもそも、怪我人をムチで打とうなんて、以ての外ですか。」

森久保「お怪我も色々大変ですよね…」

雪樹「これ以上酷くなるのは困るから。」

星「な、何かあったのか?」

早坂「ウチでもちよつと怖かつたぞ…」

雪樹「二人ともおかえり。もしかして財前さんとすれ違つたのかな。」

星「あ、ああ…鬼の形相とまでは行かないが…」

早坂「遠くから見ても、すぐ不機嫌そうだつたな…」

雪樹「僕がちよつと言ひ争いみたいになつてね。」

星「そ、そうか…あの人と言ひ争つたのか…」

早坂「もしかして言い負かしたのか…?」

雪樹「そんな感じになるのかな。」

星「あの人の性格的に…それは不機嫌になるかも…うん…」

早坂「挨拶も出来そうになかつたぞ…」

雪樹「まあね…」

二人がコンビニで買つてきたものを広げ始めると、森久保さんが机の下から出てきた。

早坂「乃々にも買つてきたからな。お菓子」

森久保「いつもありがとうございます、美玲ちゃん。」

早坂「あと。プロデューサーはコーヒーで良かつたか?」

雪樹「あれ、僕の分まで、」

早坂「足怪我してて気軽に歩けないんだから。たまにはいいだろ

?」

雪樹「わざわざすまないね。ありがとうございます。」

星「ちひろさんにも。あるぞ。」

ちひろ「お二人共ありがとうございます」

時計を眺めると。昼も終わりかけていたその時、またオフィスの扉が開いた。

……

责任感という重り

?? 「あ、あのこんにちは。」

?? 「そんな緊張することないよ。多分ね。」

雪樹 「初めまして。事務所のアイドルの子達で、いいんだよね。」
小日向 「はい、小日向美穂です、あの、新しいプロデューサーさん
で、いい、いいんですね？」

北条 「あたしは北条加蓮。よろしくね！」

雪樹 「僕は新しいプロデューサーの松谷雪樹、今後ともよろしく。」

小日向 「は、はい…えっと…よろしくお願ひします」

北条 「そんな怯えなくとも大丈夫だよ、美穂。この人は、命がけで
ほたるちゃんを護つた人なんだから。」

小日向 「そ、そうですよね。うん。そうだね。」

雪樹 「怖がらせてしまったかな。すまないね。」

小日向 「い、いえ！初めて会うから少し緊張してたのもあるので…」

北条 「プロデューサーとしているつてことは、話は聞いたかもしけ
ないけど美穂もね、前任の件の被害者なんだ。」

雪樹 「前任の件の話は美城さんから聞いてるし、無理なことは言わ
ないつもりだよ。以前のように振る舞ついてくれたらそれでいい
かな。」

北条 「あたしはあんまり相手にされなかつたけど。他にも結構居た
からね。」

小日向 「安心していいんですよね…」

北条 「まあ、今の所はね。」

雪樹 「しばらくは疑心暗鬼かもしれないけどそれでもいいから。ア
イドルのお仕事を頑張つて、困つたこととかあればそのときは相談に
乗るよ。」

早坂 「プロデューサーって、他人に優しいのに自分のことはそつち

のけなとこあるんじやないか?」

雪樹「えっと、そんなにかな」

早坂「そもそも、そんな怪我してて大変だろ? 色々頑張り過ぎだぞ。ウチらより頑張つてるよう見えinるもん。」

星「確かに、言えてるかもな、フヒ。」

森久保「頑張つてるというより…無理してるようにも見えるんですけど…」

雪樹「そうかな。」

北条「無理は良くないかもだけどじつとしてられないんでしょ。体弱くて長い間入院してたことあるから、なんとなくわかるよ。」

雪樹「まあ、じつとしてられないのはそうかな」

早坂「それでも無理し過ぎだと思うぞ」

ちひろ「まあまあ皆さん、プロデューサーさんも頑張つているんですけどから。」

小日向「熱心なんですね。」

雪樹「なんか、ことある」とこの話題してゐる氣がするな。」

ちひろ「皆さん心配されますから。」

雪樹「まあ、この状態だとどうか」

森久保「もりくぼは…常にがんばるなんてむりです…」

北条「無理してでもあたし達の為に頑張つてくれてるんでしょ、あたしは嬉しく思うよ」

雪樹「そう言つてもらえると、ありがたいよ」

北条「プロデューサーが居ないままじやお仕事も少ないし、専務も仕事がままならないでしょ。」

雪樹「任せつきりにするわけにはいかないからね。」

北条「プロデューサーの事が心配なのはあたしも一緒だけどさ、それでも頑張つてるんだからあたし達も頑張らなきや。」

小日向「私達も無理しない程度に、ですね」

北条「そうそう、無理は良くないからね。」

雪樹「ありがとう。」

北条「さて、交代の時間まではしばらくまだ時間あるけど、どうし

よつか。」

雪樹 「以前みたいにくつろいでいいからね。」

北条 「まあ、冬休み明けのためにちょっと勉強でもしようかな」

二人がソファでくつろいでいる、

見知った顔の人がオフィスに来た。

佐藤 「おつかれー☆もう二人とも来てるな☆」

雪樹 「佐藤さん、お疲れ様です。」

佐藤 「プロデューサーもお疲れ様、あんま無理すんなよー。」

雪樹 「まあ、しばらくは松葉杖は手放せそうにないよ。」

ちひろ 「3人つてことは、あの曲ですか？」

佐藤 「そうそう。久々にねー」

北条 「それじや、時間も近いしそろそろ行こつか。」

小日向 「そうですね。」

佐藤 「そんじや、行つてくるぞ♪」

雪樹 「頑張つて」

3人が出て行く

早坂 「ウチ、そろそろ帰ろうかな」

森久保 「そうですね、宿題もありますし」

星 「そうだな、帰るか」

雪樹 「3人とも、お疲れ様。」

早坂 「お疲れ様ー」

森久保 「お疲れ様です。」

星 「ふひ、お疲れ様。」

3人がオフィスを出ていくのと同時に、
依田さんと藤原さんが戻ってきた。

依田 「お疲れ様でしてー」

雪樹 「二人ともお疲れ様。どうだつた。」

依田 「とても良き時間でありましたー」

藤原 「本番が楽しみですね。」

雪樹 「有意義な時間になつたなら良かつた。」

藤原 「本番の日はプロデューサーさんはお休みされるんですか?」

雪樹 「いや、行くよ。絶対とは言えないけど。行くつもり」

依田 「無理なさらぬよう、今は安静にするのが良いかと。」

雪樹 「そうだね。無理はしないでいるよ。」

ちひろ 「お話のところすみません、少し離席しますね。」

雪樹 「はい。お気をつけて」

藤原 「私達も帰りましょうか」

依田 「はい。それではプロデューサーさんもお疲れ様でして～」

藤原 「お疲れ様です」

雪樹 「お疲れ様」

さて、どうしようかな。

まだ夕方前。

帰るにはまだ早いし。

事務仕事も今日の分は終わってしまった
専務にメールで任せられた過去の営業報告業務とかもほとんど終
わつてしまつた。

とりあえず。ゆっくりして待つてようかな

雪樹 「最近は、携帯電話の通知を見る機会も減つたな。」

気がつくと溜まりに溜まつていた

以前はやつていたカードゲームのグループチャットや、ゲームの方
も。最近は連絡も取つていない。

懐かしいなと眺めていると、眠たくなつてくる。

雪樹 「1時間ほど…仮眠を取るか…」

タイマーをかけて。座つたまま寝ることにした…

…

??? 「おーい、プロデューサー、そろそろ起きろー」

雪樹 「うん…? ああ、佐藤さん、起こしてくれてありがとう(づ)づい
ます」

佐藤 「もう19時だぞ、仮眠にしては長いぞ♪」

雪樹 「アラームつけてあつたのに…」

佐藤 「ちひろさんもう帰つたから、プロデューサーももう帰るだろ、
送つていくよ」

雪樹 「他の子達は…」

佐藤 「とっくに帰つてる。送つてあげるためにわざわざ戻つてきてやつたんだぞ☆」

雪樹 「ああ…そとか…ありがとう、仕度するよ。」
荷物を片付けてオフィスを出て

歩きながら佐藤さんと話ををする

佐藤 「仮眠のつもりが熟睡になつたなんて、それほど疲れてるわけだから、大丈夫じやないでしょ、誰かに相談してる?」

雪樹 「残念ながらそういう間柄の知り合いはいないんで。全部抱え込みですよ。」

佐藤 「まあ、そうじやなきやそこまで無理しないか。」

雪樹 「無理するのは慣れてますからね」

佐藤 「でも本当にだめなときは誰かに相談しないと、取り返しのつかないことになるぞ。わかってるよな」

雪樹 「まあ、取り返しのつかないことになつたことは、今のところありませんが、気をつけてはいます」

佐藤 「だから相談しろつてこと、プロデューサーつて、無理すんなつて言つても無駄なタイプの人間だろ、」

雪樹 「まあそんな感じです」

佐藤 「頑張つてくれてるのは頼りになるけどさ、無理して疲れすぎて倒れるのだけは、勘弁だからな、そこんとこわかつておけよ。」

雪樹 「はい、」

佐藤 「助手席、乗つていいから」

佐藤さんの車に着いた

雪樹 「色々ありますね。ぬいぐるみも、看板?もほんとにいろいろ」
佐藤 「よくアイドルの子達が出掛けるのに車出して上げてるからな、お礼だつて置いていつてるんだとさ。」

雪樹 「返したり片付けたりしないんですか?」
佐藤 「別にいいんだよ。それだけはあとが感謝されてるつて思つて。返すのも申し訳ないじやん?」

雪樹 「そもそもそうですね」

佐藤「着いたぞ、あとは大丈夫?」

雪樹「ええ、ありがとうございました」

佐藤「気をつけろよなー」

車を降りて、家の前の階段を登るとき

視界が真っ白になり、強烈な目眩に襲われた…立つていられなかつたがなんとか屈んで堪えた、

雪樹「う…つ…」

佐藤「プロデューサー大丈夫!? ちょっと待つて!」

佐藤さんがうちのドアホンを鳴らす、

何か話しているようだが、よく聞こえない。

少しすると、長男がきた

雪樹「ああ、兄貴来てくれたか」

長男「とりあえず、家の中入ろう、女性の方は：知り合いか?」

佐藤「一応ついて行つてもいいですか？心配だから」

長男「わかりました。」

佐藤さんと長男に支えられながら家中に入る。

雪樹「佐藤さんすいません。」

佐藤「だから無理するなつてみんなに言われるんだぞ。ほんと、頑張りすぎ」

長男「まあ、あまり責めないでやつてほしい、そういう癖が根付くくらいにはこいつも苦労してきたんですよ」

佐藤「とはいえその状態で出勤して、無理も大概にしないと、先が思いやられるところじゃなくなるかもしねないし」

長男「お茶、用意してくるから。」

雪樹「ほんと。弱いな…僕は」

佐藤「そんなことはないでしょ、むしろ、メンタル強過ぎて体が追いついてないだけ。」

雪樹「以前からこんなことばっかりなんですよね。いつも丈夫でもない自分を酷使してしまう、わかっているはずなのに、歯止めが効かない」

佐藤「责任感かもね。さつきお兄さんが言つてたけど無理する癖が

付くような環境にいたわけでしょ？」

雪樹 「責任感は確かにそうかもしない…」

佐藤 「今のプロデューサーに必要なのは、体を休めること。無理しないこと。プロデューサーが無理じやないって思つても他の人に無理してゐるつて思われたら素直に休め。そうしないと同じこと繰り返すだろ。」

雪樹 「休みが必要なのはわかっているつもりだつたんだけどな。」

佐藤 「いや、わかつてたらこうならないだろ。自分の体も仕事の度合いも、自分でコントロールしないと。専務に仕事任されてるつて思うのは大事だけど、それでプロデューサーが倒れたら仕事任した専務はどうなる？」

雪樹 「そうか…それは考えてなかつた…」

佐藤 「プロデューサーつてのは無くてはならないだろ、事務所にとつても、あたし達がアイドルにとつても、今プロデューサーが欠けたら困るんだよ。」

雪樹 「それは…逆の立場でも同じことが言えるからよくわかつてます。」

佐藤 「早苗さんから退院の時の話を聞いたけど、めちゃくちゃ心配してたぞ。」

雪樹 「少し口喧嘩つぽくなつてしまいまして…今度謝つておかないと。」

佐藤 「正直あたしもやり過ぎだとは思う。」

雪樹 「少しでも皆を励ましたいんだ。新人にできることは少ないかもしれないけど、何もしないなんて時間が勿体無いから。」

佐藤 「新人プロデューサーとは言つても、もう皆から信頼築けるくらいには土俵ができるんじやない？ほたるちゃんの件もあるし。新年のことでも協力的でよかつたつてみんな言つてるぞ。だから一人で突つ走んな。誰かに相談しろよ。」

雪樹 「…本当にそうでしようか…」

佐藤 「だから、無理すんな」

雪樹 「そうですね。考え方直してみます」

佐藤 「そうした方がいい。」

長男 「正直、無理しかしてないだろう。前の仕事もストレス半端なかつただろうし。」

佐藤 「そういえば、プロデューサーの前の仕事ってどんなの？」

雪樹 「家電量販だよ、販売員」

佐藤 「あー、確かにストレス溜まるよなー。」

長男 「よく頑張ったと思うよ。」

雪樹 「結局はやめたからな。なんとも。」

佐藤 「やめてなかつたらプロデューサーになつてなかつたわけだぞ」

雪樹 「そう、だから別に悪いことじゃない、もう数ヶ月前の話だから。」

佐藤 「プロデューサー、大変な思いしてないか？」

長男 「大変だな、」

雪樹 「まあ、大変なのは間違いない」

佐藤 「一息ついたところであたしは帰るわ。無理すんなよー、プロデューサー。」

雪樹 「ありがとうございました、佐藤さん」

長男 「お手数おかげしてすみません、今後共弟をよろしくお願ひしますね。」

佐藤 「いえいえ、無理してそuddたら適度に声かけるので、こちらこそよろしくお願ひします。」

佐藤さんは帰つていったあと。
すぐに寝入つた。

……

翌日とその次の日までは休みにして、

家で過ごしていた。

特に何もなく安静に過ごした。

時々ちひろさんや専務から連絡がくる。

アイドル達の様子についてや

新年的ライブについて。

着実に準備が整っているようだ。

⋮

新年的ライブのレッスンに協力したり。クリスマス劇の練習に付
き添いでリハーサルを確認したり、事務仕事に専念したりと、時間が
過ぎていき、数日、十数日が経つた。

何日かに1日は休みを取るようにしている
時間がすぎるのが早く感じたのか。

気がつくと3日後にはクリスマスだった